

---

# 誇り無き従者と誓う戦災復興

偽・稲継魂大神

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

誇り無き従者と誓う戦災復興

### 【Nコード】

N2278T

### 【作者名】

偽・稲継魂大神

### 【あらすじ】

誰からも理解されずとも愚直に進み続けた生涯を経て衛宮士郎は死に英霊エミヤが生まれた。

だが彼を待っていたのは人を救うという存在ではなく、災いの元凶と関わったものを抹殺することで世界を救うというものだった。そんな彼に偶然かそれとも必然か聖杯戦争に参加する機会がめぐってきた。

そこで過去の自分の抹殺するため好機を窺い仕掛けるが過去の自分の想いに負け、またこれからがんばっていくと決意する。

その後また幾度となく守護者として召還されるが彼は迷わない。  
だが、あるとき異世界で偶然にも彼を召還するものが現れた。  
これはその召還者と共に戦災復興をなしていく物語である。

1 パンプキンシザーズとFate/stay nightのアー  
チャーのクロスものです。

2 読者の様子をみながら更新していきます。

3 原作知らないと厳しい

## 主従の誓い（前書き）

衛宮士郎の最期やUBWエンドなどの話はなくパンプキンシザーズ  
原作前から始まります。

うまく書く自信ないので。

## 主従の誓い

（数年前）

首の後ろが疼く。

廊下をただ歩いていただけで周りにはなにもない。

いや、ちょうど書庫の扉がある。

このとき私がなぜ書庫に入ろうと思ったのかはわからない。

ただ気の向くまま。そう、本当にただ気の向くままに入ったにすぎない。

中に入ると整然とし数多の本を内包した空間である。

当然だ。書庫という役割を担った部屋なのだから。

だが、一冊の真っ赤な本が床に落ちている。

私はその本を手に取り表紙を見た。

「忌憚されし錬鉄の英雄」

英雄であるのに忌み嫌われるとは、とらえどころの無いタイトルだった。

そんなタイトルに興味が惹かれページをめくる。

だが、何も書かれていない。

次のページをめくるもそこにもなにも書かれておらず、

私は奇妙に思いながらもページをめくり続ける。

半分を過ぎ残り1/5といったところか。

ある奇妙な模様と言葉が書いてある。

私はいつも間にかその言葉を紡ぎだしていた。

すると突然窓も開いていないのに風が吹き本棚を揺らし始める。

私は驚きながらもその風の中心を見る。

風は止まないまま今度は眩い光があふれ出し、流石に私は目を閉じた。

やがて数十秒すると風と光は収まり目を開ける。

そこには鋭く鷹のような目を連想させ長身の赤い外套を着た男性が立っていたのだ。

私はその男にひどく驚いたが不思議と恐怖は感じない。

すると男は眉をひそめるも私を見て何か納得がいったのか私にこうつぶやいた。

「 問おう。君が私のマスターか？」

これが私「アリス・L・マルヴィン」と英霊「エミヤ」との出会いだった。

---

---

「ひどく驚いた顔しているが大丈夫かね？」

わけがわからず黙っていると心配そうに男は言った。

私もようやく話せるまでには落ち着いたが考えがうまくまとまらない。

とりあえず男に名前など問うことにした。

「お前は誰だ？なぜ私たちマルヴィン家の屋敷の書庫にいる？それにマスターといったか？わけがわからないのだが……  
・いや、まず私から名乗ろう。私はマルヴィン家の三女、アリス・L・マルヴィンだ。」

男は感心したような顔をするところ答えた。

「これはすまない。Ms・アリス。私の名前はエミヤ。できればアーチャーと呼んでくれればうれしい。こちらの名のほうが存外気に入ってるのでね。なぜ私がここにいるかというと、召還に応じたためとしか言いようが無い。私は君が召還したのだと踏んだのだが違

ったのかな？魔力供給のラインは君とつながっているのだが。」

（魔力供給のライン？なんだそれは。それに召還に応じたとは・・・。私は直前まで本を眺めていたはずだが・・・。まさかこの本が関係あるのか？）

私がそう考えその本を見てみるとアーチャーという男もその本に気がつき「少し借りてもいいかね？」と聞いてきたので手渡した。

本を手にするとアーチャーは眉をひそめ私に「この本をどこで見つけたのかね？」とたずねてきた。

先ほどこの場所で見つけてページをめくっているとあなたが現れた。

よく覚えていないが言葉も紡いだ気がする。

そう答えるとまた何か納得したのか「そうか、ならば間違いはあるまい」と言いいきなり片膝をつき跪いた。

私はいきなりのアーチャーの行動についていけず困っていると彼は

「君がマスターで違いないようだ。これから私は君の剣となり君を阻む障害すべてを退け、盾となり君を害するものから守り抜いて見せよう。」

と宣言するのだ。

それはまるで主に忠誠を誓う高潔な騎士を連想させるに十分な光景だった。

私は思わず

「わかった。そなたは私の手となり足となりどんな困難な道がある  
うとも共に進む騎士として認めよう。私のことはアリスと呼べ。」  
とそう高らかに宣言し返した。

「ではアリスと。ああ、この響きは君に実に似合っている。」

「な!？」

私はいきなりのごとで面をくらった。

彼はいきなり何を言い出すんだと。

だが悪い気はしない。

「それではアリス。これから私のことについて説明しよう」

このあと私は信じられないことの数々に驚くばかりであった。

## 主従の誓い（後書き）

ご要望あればください。

次話から原作入ります。

だからアーチャーによる自身が英霊などの説明は書くつもりないです。

要望があれば書きますが……。

一応もうひとつ書こうと思っている方をメイン更新にするつもりです。

こっちは読者の様子見ながらですね。

死灰を撒く病兵（前書き）

結構お気に入りされてる。

おもしろいことないよ？

## 死灰を撒く病兵

帝都中央第一士官学校 - 第六十二回卒業式 -

「若き力で滞った戦況を打開し……」

現在この士官学校校長が卒業生に対する激励の言葉の最中である。

その卒業生の中にアリス・L・マルヴィンの姿も覗えた。

しかしその厳粛な式の場を乱すように教官と思われる男が会場に入ってきた慌てて校長に歩み寄る。

校長はその教官をたしなめるもこの男の発言で会場全体を驚愕に満ちさせることとなる。

「陛下が……陛下が……停戦条約を結ばれました!!!」

五日後 帝国边境

の村

「停戦か……」

赤い外套を着た男は遠くを見ながら虚しそうにつぶやく。

その周辺にいる村人たちは停戦を伝えた兵士に向かって説明を求め  
るが、通達を預かっただけの兵士に理由がわかるわけがなかった。

外套の男はより一層遠い目をし、

「はぁ……簡単に言ってくれる。ならば、なぜ……もっと  
早くに……」

男の目に映るその先には戦争の傷跡が深くどこまでも広がっていた。  
……。

---

三年後

---

「げ！戦車！……あゝあゝりやダムっていつより山  
賊の砦だぜ。」

「だね」

先に発言したのは帝国陸軍情報部第3課 - オレルド准尉 - であり、同意を示すのは同じく第3課 - マーチス准尉 - である。

マーチスはそう冷静に返すと報告書を書き始める。

「僕らの仕事は調査と報告。別に攻め込むワケじゃあ……え！？」

そう発言したマーチスを無視するかのごとく立ち上がり剣を大きく振り上げこう発言するものがいた。

「攻城戦！！用意ッ！討つ！！」

陸情3課実動隊隊長、つまり我らが3課のリーダーである - アリス・L・マルヴィン少尉 - である。

「う、討つってそんな無茶ですよっ！！」

とマーチスが反論するも

「やつらは規律を乱しているんだ！悪・即・斬っ！！」

と聞いて聞かない。すると周辺調査からもどってきた赤くされど3課と同じデザインの制服を着た長身の男が、

「待ちたまえ。まずは麓の村の被害調査からだ。我らが行うべきはまず被害にあっている者たちを訪ねることであって戦うことではな

い。それに例え討つとしても彼らの詳しい情報が必要だ。」

「わ、わかっている。気持ち少し早まったただけだ。では、村に向かうぞ！」

彼女はこの赤い男の正論には無視できないのかすぐに気持ちを切り替えて行動する。

赤い男は満足したのか皮肉的な微笑を浮かべ車の後ろに続くように乗り込んだ。

この赤い男は陸情3課実働隊特別支援係 - アーチャー少尉 - である。

しかし彼は「階級まで言うといいにくいだろうからアーチャーでいい」と言うので皆はそう呼んでいる。

そのアーチャーという名前に関しても偽名であることは明らかであるが、

これは彼が誰にも自分の真名を明かそうとせず「アーチャーと呼んでくれ。」というのである。

まあアリスは知っているのだが。

それに彼はもともとこの隊の人間ではなく今回の作戦から三課に加わり活動することになったのだが。そのことはおいおい話していくとしよう。

先ほど彼らが見ていたのは一年前からそのダムを根城にした野党・  
・いや、元軍隊の「灰色の狼」という戦車部隊であり麓の住人が追

い出そうとしても戦車が相手ではどうしようもないというわけである。

---

---

彼らは麓の村に着き、聞き込み調査を開始した。

ここで性格が表れる。

アリス少尉は熱心に聞き込み、マーチス准尉も真面目に、しかしオレルドはきれいな女性に声をかけるばかり。

まあそうはいつでも聞き込むことはしているのだが……。

アーチャーは聞き込みをせずに村の被害状況を見て回っているといつたところか。

聞き込みをはじめて数十分したところか、いきなり大きな大砲の発砲音が村に鳴り響いた。

村人たちは「灰色の狼がきた!!!!!!」と叫び家に駆け込んでいく。

もちろん三課は音のしたほうへ急ぐがアーチャーは遠くのほうにいるのだから姿が見えない。

到着するとそこには村長らしき人が部隊のものに脅されていた。

「『分ける』なんて言ってねえ『よこせ』つつつてんだよ！」

村長は恐ろしくて何もいえない状況だった。

「もう一発かましてやりますか？中尉？」

「何度言ったらわかる。」

後ろの戦車に乗っている隊長らしき人が言う。

「『ヴォルフ』と呼べ」

「何が狼だっ！猿山の猿め！！」

到着した三課が戦車部隊に言う。

「陸軍情報部第三課パンプキン・シザーズ小隊だ！！”人為戦災”と見なし貴様を村より排除するッ！！！」

アリス少尉がそう高らかに宣言した。

ちなみにオレルドたちは少しあせりながらも避難を呼びかける。

「聞いたことあるぞ。帝都に設立された”戦災復興”の部隊だよ！」

一人の男がそういうと村の人々は驚きながらも少し喜んでいた。

だが、狼と名乗る隊長は少しにやけると部下に何か命令した。

すると、装填音が聞こえ戦車の主砲が上に向きたまが発射された。

その後何事もなかったかのように静けさを取り戻し、戦車部隊は「  
また合おう。陸情三課！」と去っていつてしまった。

「に……逃げ……た？」

呆気にとられたアリスだが現状把握するとすぐに追いかけてようとするのだが、背後から現れたアーチャーに止められる。

「戯けが！！せっかく戦車が引いてくれたのだ。生身の君では到底敵うまい」

「だが空砲だぞ！人をナメるにも程が」

「ナメられたぐらいで熱くなるな。戦車に挑むなんぞマトモな人のやることではない」

「だが！！」

「まあ待て。勝てないとは言っていない。冷静に状況を判断し勝算を見出してから行動しろといっている」

「……わかった……！？」

アリスは突然首筋を押さえる。

「・・・なにか・・・降ってないか？」

オレルドたちは困惑しながら「いえ、なにも・・・？」というがア  
ーチャーは険しい顔をしていた。

部 中央管理局

帝都 陸軍情報

「ハンクス大尉！マーキュリー号から少尉たちの報告書が届きました」

そうするのはアリスと同じ課のステッキン曹長。

対して呼ばれたほうは三課課長のハンクス大尉。

ちなみにマーキュリー号というのは軍所属特別上等伝令兵の犬であり階級は伍長である。

「妙だな・・・」

「どうかしました？」

ハンクス大尉が報告書を読みながらつぶやく。

「戦車一輜野戦砲二門小銃を持った兵が数十名……。こんな大所帯がなぜここまで気づかれずに」

「ハンクス！ハンクスはいるか！？」

そこに現れたのは陸軍情報部第一課課長コネリー少佐だ。コネリー少佐はかなり怒っており勢いよく三課に駆け込んできた。

「なんだよ、うるせえな」

「貴様あのダムに人をやつたる！！今すぐ調査隊を引き上げさせる。・・・『灰色の狼』には手を出さすな！！！」

---

の酒場

麓の村

---

現在アリスたちは戦車部隊を追っ払ったということで村人たちに歓迎されていた。

オレルドたちは村人たちと楽しそうに話をしているがアリスとアー

チャーは真剣な面持ちで窓の外を眺めながら話している。

「なにかいやな予感がする」

「また例の首筋のアレかね？君のそれはいいのか悪いのか判断つきかねる。まあ危機が迫っていることがわかるのだからよいのだろうが……。今回もそのようだしな……。」

二人の間で重い空気が流れる。アリスはそんな空気に耐えられず日ごろ思っている質問をする。

「そういえばお前、前はどんな部隊にいたんだ？前は機密情報だといって教えてくれなかったではないか？」

「……いや、なにここに三年は戦後の事務処理ばかりでね。特にこれといった特徴はない。あえて言うなら戦後の復興支援が円滑に進めるための情報整理だ」

「では、私がまだ士官学校に通っていたころは何をしていた。ちょうど三・四年前ぐらいだろう？」

「そのことについては後々話すと」

「キヤアアアッ！！！」

二人が話していると店内で切り盛りしていた店員が倒れたのを見て女性が叫ぶ。

「女主人！？どうしたっ！！！！」

そう叫ぶ男性が近寄ると今度は背後の人が倒れまた次に、また次に、と人が倒れていく。

アーチャーが外を見て「食中毒ではなさそうだ」とつぶやく。

アリスはそれに反応し外に飛び出す。そこにはどんどんと人が倒れていく姿が見受けられた。

「揮発性戦術毒キルヒ3号。通称”K-3”化学弾頭。こいつはやられたっ！」

アーチャーがそうつぶやく。

「……！！あの時の空砲……ッ！！！」

アリスは首元を抑えながら怒りに燃える。

---

#### ダム内部

---

「そろそろだな」

そついうのは部隊長ヴォルフ。ダムから村を眺めながらこつ続ける。

「教えてやるうじゃねえか……戦争のツ軍隊のツ美しい一面って

ヤツをよ・・・!」

---

中央管理局三課

---

「ここにも」・・・んんんず」というような重い空気が流れていた。

「『灰色の狼』は俗称だ。正式名称は『903CTT』”K-3”  
始め化学弾頭を使う化学戦術部隊の略称だ」

「『K-3』・・・キルヒ3号か。つまり実在したワケだ・・・」  
クラシクハイト・イエーガー  
「死灰を撒く病兵」

その二人の重い会話の中にステツキン曹長が空気を読まずにはいつてくる。

「あのっその『きるひサンゴウ』ってなんですか？」

コネリー少佐に「チツ・・・小娘が入って来るな」といわんばかりの顔をされるがハンクス大尉が説明してくれる。

「キルヒ3号。空中散布式の戦術毒だ・・・抵抗力の強い者には効果はないがそうでない者は、5～6時間で意識障害や発熱、機能不全を起こし抗体を打たなければ20時間で死に至る」

「そう、国際条約違反兵器だ……だが帝国はいくつものそういう部隊を作ってしまったのだ」

「『不可視の9番』か……正直マツバだったぜ。903『死灰クラインクハイト・イエーガーを撒く病兵』906『翼無き降下兵』……」

「帝国の犯した”禁じ手”……世に知られるわけにはいかん」

そうコネリー少佐は言ってハンクス大尉のほうを見て笑う。

「……つまりこうか？『903など存在しない』『なにもいないダムに援軍は出せない』」

「たかが村ひとつ。それで済むなら安い話だ！」

「（誰よりも辛い戦いをさせられながら誰からも認めてもらえない兵士……か……）」

---

### 麓の村

---

「抗体……奴らは抗体を持っている筈だ！」

「めつたなコトを言うんじゃない。呐喊少佐に聞かれたら厄介だろうが！」

マーチスが気づいたことをオレルドが止めようとするが・・・

「聞こえたぞつ。攻城戦用意ッ！！！」

とアリスが気づいてしまう。

「少しいいか？相手は戦車持ち一個中隊。それに比べてこつちはどうだ？四人の部隊員に装備もままならない。結果は見えているようなものだ。それでもいくのかね？」

そうアーチャーは告げる。そうだ、普通に考えれば敵うはずのない戦力。そんな状況で打開する術などあるのだろうか。

「・・・苦しむ民を見て、貪る悪を見て、私はそれによって被害を受けるものを救いたいと思うしその悪を正したいと思う。そうでなければ私が私でなくなってしまうからだ。お前が来なくともそこに悪があるかぎり私はいかなければならない」

アリスのそんなまっすぐな意見をまっすぐな目を見て聞けば固い決意が窺えた。

するとアーチャーは少し皮肉気に微笑み、

「君に固い決意があるかどうか試してみたかったのだがどうやらその必要はなかったようだ。これほどまでの決意があるのであれば何も心配はすまい。私があまり居てやれなかった8年間よくここまで

成長した。それに私がアリスについていけないワケがなかるう。私は君の剣であり盾なのだから」

それを聞いたアリスは満足そうに微笑みすでにダムを攻める準備を始めているオレルドたちに加わった。

程なくして準備が終わり今度は作戦会議が開かれる。

やはりなんと云っても戦車が厄介なのだ。

そのためには策を練らなければならないのだが。

「戦車は私が何とかしよう。戦車を討つ手はいくらでもある」

とアーチャーは言つてのけるのだ。

「本当かつ。そんなことができるのか!？」

当然アリスは疑問に思つのだがアーチャーは「まあ任せておけ」という顔をするだけである。

「このダム・・・複層式なのだな? 戦車隊の陣地は第一・第二ダムの中間地点。第一を放流してそこを水浸しにできれば・・・」

「・・・泥で戦車の動きを殺せるといふわけか。『戦車に挑むのはマトモじゃない』・・・誰かそんなことを言っていたが?」

アリスがそう返してくるがアーチャーはいたって涼しそうな顔でこり返す。

「ああ、生憎と私はマトモではないからな」

また、アリスの首筋がうづく。

「そういえば、前の部隊名を聞いていなかったな」

するとアーチャーは神妙な顔をして何か迷うがそれも一瞬だった。

「901ABT」

## 死灰を撒く病兵（後書き）

アーチャーの自身の説明そんなにしなかったという設定にします。

アリスの認識では対人戦超強いぐらい。

あと宝具とか使っちゃうと話作れないので使用頻度そんなに高くないです。

まあ次の戦闘で戦車相手に数回使うつもりですけど。

カラドボルグと中華剣を。オリ宝具はたぶん作らない。だって考えるのめんどい。

読者が考えてくれたら出します。でもたぶんこの作品じゃ使いどころなくて送ってくる人いないな。

だいたいカラドボルグ一発でかたがつくし。

固有結界とかもう出すシーンねえよorz

あとほかにFateキャラ出すつもりもない。

アーチャーTUEEEEE書きたいからね。

あとは原作開始八年前にアーチャーが軍に入ってアリスとはたまに会ってたぐらいにします。

鍛錬とかもアーチャーにきたえてもらったりとか。

でも、アリスは原作通りちゃんとあの剣使いますから安心してくだ  
さい。

双剣とか使いませんから。

まあいろいろな武器に対応できるという設定にしますが。

とりあえず「901ATT」部隊は無かったことになります。

戦車の博士のところにある銃のレプリカは何とかします。

## 支援無き孤高の兵隊（前書き）

あくまでもつひとつの小説がメインです。

こっちは書くのがかなり難しいのでたぶん途中で放置る。

## 支援無き孤高の兵隊

ダム内部

ダム内部では戦車部隊が酒を飲んだりポーカーをしたりして楽しんでいたのでが哨兵の一人が慌てた様子で中に入ってくる。

「たっ大変だ！ヴォルフッ！！あっあの灯りは帝都の援軍じゃ……？」

窓の下を覗いてみると複数の灯りが見える。皆も一様に騒ぎ出すがヴォルフは一喝して落ち着かせる。

「……虚仮威こぼせしだ。小銃隊オスエウで片付ける」

ヴォルフの一言で冷静さを取り戻し、小銃を抱えてダムから出撃していく。

ただヴォルフは神妙な顔をしながら何か考えているようだった。

「（村を……見捨てなかったのか！？）」

「ッ！」

「オラオラどうしたっ！ハチの巣にしちまうぞ！」

小銃隊の反撃を受けるオレルドとマーチス。

今、この場所に居るのは二人だけである。

いわゆる陽動作戦をしているのだが二人でこの数を相手するのは無理があるので大人しく車を盾に隠れることにしたらしい。

「ねっ！もしかしてバレてない！？」

「バレていても兵を割かないわけにはワケにはいかない。これぞ兵法よ！」

そうオレルドが自慢げに言うが内心は、

「（しかし、ま・・・あっちの方が楽チンだったかなあ・・・）」

「くそつダメだ！」

そうというのはアリスで水門を開け水浸しにしようと考えたのだが、鎖が頑丈で持っている工具では千切ることができないのだ。

「下がりたまえ。私がやろう」

アリスはそんなことができるのかと疑問に思うが空気が変わったのをはつきりと感じる。

アーチャーは懐から中華剣を取り出して構える。

アリスはアーチャーの背中しか見えないが発せられる雰囲気におおされる。

「アリスは抗体の確保を・・・水門は私が開く」

「独りで・・・大丈夫か？お・・・おいエミヤ！？大丈夫」

「早く行け」

つい真名を呼んでしまうがアーチャーが少し振り返りいつも以上に鷹の目を鋭くさせそう言われると言葉が続かない。

「あ……ああ気をつけてな」

アリスは抗体を探しにいくしかなくなるのであった。

「そろそろアリスに私の秘密がバレるやもしれんな……」

アーチャーはそういって中華剣を振り下ろし鎖を断ち切る。普通、剣ごときで鉄の鎖を断ち切ることはできないはずのだがそれを簡単にやってのけてしまった。そしてアーチャーはかなり重いはずのバルブハンドルを簡単に回していくのであった。

---

水門前下部

---

「（あの眼光が消えない。冷たくて……仄暗くて……まるで機械だ……!?!）」

そう思っていると首元がうずく。

「（もしかして……まだ何か秘密を隠し持っているんじゃないだろうか……?）」

そう思っていると水門が開くのが見えた。

勢いよく出た水はとどまるところを知らずどんどんと砂地を泥に変えていくのだった。

---

ダム内部

---

「ヴォルフっ！！！！」

小屋に残っていた奴らはこの状況に慌てだした。

「（足を封じる気か！？ククッおもしれエ）戦車出すぞッ！今ならまだ動ける」

と冷静に考え行動に移す。そして小屋を出て行き戦車に乗り込んでいくと逆に小屋に侵入するものがある。

アリスであった。

奴らがいないうちに小屋から抗体を探し出すと計画していたのだ。

「よもやこの私が空き巣の真似事とはな。抗体は・・・あーもう！

「!!」

そこには散らかり放題の部屋が広がっていた………。

---

ダム内陸部

---

「エンジンがかかった!」

「急げ、もう道がねエ!」

戦車に乗り込んだまではよかったがすでに地面は水没しており戦車はのろのろとしか移動できないでいた。

「くそつまるで犬掻きだ。オマケに視界が悪い……下手すりゃダムから転落……ん?」

装填兵が何かに気づく。ヴォルフと操縦士は疑問に思いどうしたか尋ねる。

「イヤなんか前方に赤い何かが……」

ダムの放流によって発生した霧でよく見えないので近づいていくと

ヴォルフが慌てだす。

「白髪で赤い外套を着た男？」

ヴォルフにはその特徴に覚えがあった。

身体全身に駆け巡る悪寒。

「“強酸弾”用意！！」

「コイツを食らえば骨まで溶けますぜ」

「早くしろッ！！！！！！！！！！」

ちんたらもたつく装填兵をそう一喝し弾を込めさせる。装填兵もただ事ではないと感じ取り急いで弾を込めた。

「す・・・スイマセ・・・ああっ！？チクショウ！どこ行きやがった！？」

視界が悪い中見失った相手を見つけるのは困難である。だから男は視界窓を開けあたりを探ることにしたのだが・・・。

男は突然その細い窓から射抜かれた。

撃たれたのではない。射抜かれたのだ。

正確無慈悲なただの矢に。

弓矢というものは現在の戦闘に用いられることは皆無である。

なぜなら銃が開発されたり弓矢は狙いがつけ辛く弾となる矢が大きく軽いためどうしても周りの環境に影響されやすいからだ。

その矢に射抜かれたのだ。この放流による気流や霧が発生している中で。

ヴォルフと操縦士は何が起こったのかわからなかったが、数瞬後ヴォルフは慌てて大きな声で指示を出す。

「こっ……後退ッ!!!この場から急いで離脱しろ!!!」

「なんなんですかアイツはいつたい!?!」

操縦士の質問は最もでこんなことができる者を実際に目にしてみても信じられないでいた。

「『赤い外套を翻し静かに奴は狙ってくる』……ご同類だっ!しかもあいつ独りしかいねえのに部隊と呼ばれてやがる。”901”……対一個大隊猟兵部隊(AntiBattalionTrooper)……。『支援無き孤高の兵隊』!!!」

たった独りで部隊と呼ばれるということはその独りが一個部隊と同等の戦力を有しているということになり、さらに言うなれば『ABT』ということは一個大隊を相手できるほどの戦力があるということだ。

そんな相手に敵うわけもなくヴォルフは逃げの一手を取らざるを得ないのである。

「ち、近づいてくる!!」

操縦士がそう叫ぶ。ぬかるみの中ではどうしても戦車の機動力は落ちてしまう。

このままでは戦車に張り付かれて何されるかわからない。

逆にいえば距離をおけばマシンガンで撃たれようともスナイパーライフルで撃たれようとも中にいる限り安全なのだ。

ましてや『ただの矢』<sup>ただのや</sup>ごときでは貫通することはないだろう。

そう考えたヴォルフたちは逃走しながらも反撃に出る。

「撃エ!!!」

先ほど装填した強酸弾に火をつける。

弾は放たれアーチャーを狙う。

すると、アーチャーは外套とは違うコートを取り出しそれを盾にして歩みを止めることなく突っ込んだのである。

もちろんコートは溶け落ちていく。

「コートぐらいで防ぎきれるかよ……って、え!？」

コートを払いのけたそこにはやけどを負った無様な姿ではなく、無傷で獲物を狙う鷹であった。

また一步、また一步と近づきいつの間にか手には真つ赤な槍が握られていた。

「とっ止まれ！！止まるだろ普通！！チクシヨウ！！！」

操縦士はそう叫ぶと戦車の前で立ち止まりアーチャーは槍を構えた。

「ひ、ひき殺してやる！！！！！」

「落ち着け！！！」

戦車は前進し前にたたずむ男を押しつぶそうと駆け出す。

対してアーチャーは驚くべきことに何かつぶやくと戦車に向けて槍を突き刺したのだ。

鋼鉄でできている戦車に向けて槍を突き刺しても貫通などしないのは当たり前である。

そのはずなのだが。

「うっ！！！！なんで・・・これが刺さって・・・」

槍は操縦士の心臓を見事に貫いていた。

ヴォルフは驚いた。

戦車を貫通してその奥の操縦士の身体に刺さったのである。

いや、逆である。ヴォルフが見たのは身体に突.....き刺してから戦車を

貫通したのだ。

「(なにが起こっていやがる！これが901ABTってやつなのか！?)」

操縦士が絶命してしまったので戦車がいうことを利かず暴れだすがダム縁でようやく止まった。

「負傷なき無尽強襲”噂どおりの戦い方だな・・・901ッ”

アーチャーは戦車から出てきたヴォルフを見ながら柄の短い細身の剣を持っていた。

たぶん投擲専用の剣なのだろう。

しかしヴォルフの手には抗体と思しきビンを持っている。

「どうした？早く殺してみる。ん？・・・ああそうか俺を殺せばこの抗体も落ちてしまっからなあ・・・」

そう言ったヴォルフは拳銃を構える。

アーチャーは無表情のまま狙い定めるだけであった。

「・・・おまえは”こっち側”のはずだ901・・・あんな奴らのために力を使ってどうなる・・・？ただの徒勞だ・・・戦災復興なんて絵空事だ」

ここでアーチャーは初めて表情を変え皮肉気に微笑む。

「絵空事・・・か。たしかにそうかもしれん。どんなにがんばったとて戦争で亡くなった者への悲しみは消えるものではないからな」  
ヴォルフは満足そうな顔をする。

「なんだ、わかってるじゃ」

「だがな、生き残ったものはその務めとして亡くなった者の分まで生きなくてはいけない。私はその生き続ける者が生きやすいようにしなければならぬと思っている。私は貴様のような過去に縛られている者も救いたかった。だが、もう遅い。懸命に生きようとしている者を妨げてしまったのだ。その罪は重い」

「ちっバカが」

「それに私はアリス・L・マルヴィン少尉に仕えているものなのでな。主のもとから離れるのは主のためになるときか死ぬときと決めているのでね」

そういつて今度は誇らしげに笑う。

「はっ！じゃあ死ね」

「私から離れるなどありえん！！」

その声が聞こえると同時にヴォルフの腕を切りつけ抗体を掠め取るアリスの姿があった。

「り、陸情三課アアッ！！」

そう叫ぶ隙に持っていた剣を投擲しヴォルフの心臓に吸い込まれるように刺さる。

「……………名前を……………聞いてなかったな……………」

ヴォルフは最後の力を振り絞るかのように言う。

「俺は……………ヴォルマルフ中……………尉……………いや、俺達に……………名前など……………ククツ」

『<sup>ヴォルフ</sup>狼と……………呼べ……………』

そうして戦車はダムの下に落ちていつてしまった。

アーチャーはダムから見下ろし小さな声で「エミヤ……………エミヤだ」と言い静かに佇んでいた。

ダムの周りで戦っていた小銃隊もヴォルフがやられたことによりちらじりになって逃げ出した。

そのことを確認できたあとアリスはこちらを背に遠くに目を向けるアーチャーに近づいた。

「戦車を相手にして無傷とは確かにマトモではないな。普通は死ぬぞ」

「なに、今回は運がよかつただけだ。それに八年前に私が軍に所属することになったとき君が言った言葉が忘れられなくてな。『お前が死んだら私も死ぬ』と。これでは死んでも死にきれん」

アリスはそれを聞いて恥ずかしそうに「昔のことを持ち出すな！・・・まあ今もそう思っているがな」と言っつてそっぽを向いた。

アーチャーは「それだけ思われているとはありがたいよ」と言っつて笑う。

だが、それも長くは続かずまた遠い目をする。

アリスはアーチャーをじっと見て。

「なにを黄昏ているかは知らんが・・・もうすぐ夜明けだぞ」

シャキツとしろ！シャキツと！というアリスに「あ、ああ」としか返すことができない。

「・・・これでまたひとつ村を救えた。世界から見ればほんの一部であるけれど私とエミヤで成し得た初めての”戦災復興”だ！」

衛宮士郎として、英霊エミヤとして心が震える一言だった。

「しかし全くひどい奴だ。軍が用意してくれた制服を盾に使っなんて。よしっ私が替わりの制服を用意してやるっ」

そう言いアリスはまるで自分についてくるようにと背中語りながら勇み歩いていく。

アーチャーはやれやれという風に、しかしうれしそうにその後を歩いていくのであった。

## 支援無き孤高の兵隊（後書き）

とりあえずこの作品では武器の名前が出てこないです。

なぜかというところ第三者の視点で書いているので見た目の様子で伝えなかったからです。

それに自分の小説で武器名書くと急に厨二臭くなるからです。

次に支援無き孤高の兵隊はルビ入れようと思いましたがイタリア語かドイツ語っぽいのでやめました。今、勉強してるの中国語なんでよくわかんない。

+ローマ字のルビはできないんだね。投稿したあとに気がついた。

最後に一応、武器・防具出したときあとがきで説明します。

・中華剣〓干将・莫耶

備考：投影は両方しましたが鎖は干将で断ち切りました。

・正確無慈悲なただの矢〓ただの矢

備考：アーチャーの技術です。今回は50mぐらいです。弾込める間に下がりました。

・コート〓三年前、事務作業に移ったときに新調した制服。

備考：強化かけて強酸弾を防いだので衝撃は殺してます。

・真つ赤な槍〓ゲイボルグ

備考：因果逆転させて操縦士を一突き。相手が見えないのに当てられたのはご愛嬌。まあ戦車の構造を解析して居場所を割り出したという事です。

・柄の短い細身の剣〓黒鍵

備考：両手に6本と無駄に結構持っていました。

・赤い外套Ⅱ 聖骸布

備考：戦闘のときに着るがそれ以外はアリスが用意してくれる三課のコート（赤）。

そういえばカラドボルグ出してないな。

まあ使うほど苦戦してないからいいか。

次は当分先に更新します。

まあ気分転換で書いてるのでこれで最後になる可能性もありますが。

## 戦災という名の戦争（前書き）

わかった。

二つ同時に連載しようとしてもどっちも作品が似てつまんなくなる。

つまり才能ないわ。

そしてもうひとつがメインっていつてるのにまだ投稿すらしていないという。

次に支援無き孤高の兵隊のルビをゲシュペンストイエーガーにしました。言ってる意味は同じようなものなので。

話し替わりまして今から書くんですがこの話あんまり好きじゃないんでうまく書けないと思う。以上です。

## 戦災という名の戦争

某帝国軍研究所

「主任！第3ラボのレポートが・・・」

薄暗い部屋の中に主任と呼ばれた者が手紙を読んでいる。

主任は集中しているのか手紙を読み続けており返事はない。

「主任、灯りはちゃんと点けた方が・・・」

といい主任に近づくと手紙が入れてあったらろう封筒が目に入る。

驚いたことにその封筒は軍の官用封筒だったのだ。

すると突然主任が「くっくくくくく」と笑い出した。

「主任？」

そう呼ぶと顔をにやけさせて手紙を見ながらこう言う。

「実験の続きをしましょうねえ・・・キユウマルイチ マルタ901の被験体ちゃん」

腕を鎖で繋がれた三人の男たちが走っている。

三人はすでに息絶え絶えであるがそれでも歩みを止めようとしな

その後方には戦車が三人を捉えており、まさに今、弾頭が放たれた。

大きな唸り声を上げ迫ってくる弾頭に恐怖し必死に走るが、避けられるはずもなく左端の男に命中し言葉通り消し飛んだ

腕だけとなった遺体を見て恐怖の声も上がらず涙があふれる。

「どうしたのさ。まだゲームは続いているよ？金が欲しいなら走らなきゃホラ」

その言葉に振り向くと先ほどの戦車が目の前でこちらに狙いを定めて佇んでいた。

「キハハハハッ」

戦車のスピーカーから聞こえる笑い声は不気味な夜をさらに不気味にしていた。

「射撃”の腕が上がりましたな”

そう言うのは操縦席に座る40代の軍人だった。

「狩猟は貴族の嗜みだからね」

もう一人はスピーカーの声の主で戦車の中で紅茶を飲んでいる。

「持てる者と持たざる者。貴賤の差がこんなにも顕れる」

そう言うと紅茶を一口含む。

「いい時代になったものだね」

戦争があった。

永きに渡るフロスト共和国との戦乱は”帝国”内各地に深い傷跡を残した。

『薄氷の条約』と呼ばれた停戦から三年

飢餓・疫病・兵隊の野盗化

それは”戦災”という名のもう一つの戦争だった。

---

帝都 陸軍情報部 中央管理局

---

「ご苦労様であります!」

そう元気よく言うのは門前を警護する憲兵である。

対してそれを受けるのは先の作戦から三課に加わったアーチャー少尉である。

「ご苦労。君の挨拶でいつも元気が出るよ」

「はー!ありがとうございます。ところで三課に配属なされたとお聞

きましたすが、本当ですか？」

いつもとは違いそう尋ねてくる憲兵にアーチャーは疑問に思いながら答える。

「ああそうだが何かあるのか？」

「いえ、失礼しました。お仕事がんばってください」

「ああありが」

「おお〜いつ誰か来てくれ〜っ！！はっ早くっこっちだ！」

突然そう叫んで声をかけてきたのはむこうの門を守る憲兵だった。

アーチャーたちが近寄ると憲兵はアーチャーが上官だと気づきすぐに敬礼する。

「も、申し訳ありませんっ！上官だと気づかず大きな声で呼んでしまっつっ！」

そう改まるがアーチャーは「いい気にするな」といい先ほどの呼んだ理由を聞いた。

「不審物でも見つけたか？」

挨拶していた憲兵がそういう箱を見る。

「爆弾のがナンボかマシだ……」

箱を覗き込むとそこには……………

---

中央管理局三課

---

「遅いッ！…！」

そう言い剣を抜き放ち高々と掲げるのはマルヴィン少尉である。

「国軍に従事するものが遅刻とは何事かっ…！」

部屋は静まりかえりオレルド達が小さな声で話す。

「そついや遅いね」

「意外と道に迷ってんじゃねーのか。それともトラブルに巻き込まれたかだな。ハハッ」

「ハハッじゃな〜〜い…！」

抜刀したまま近づいてくるのでオレルドも「わーっ庁内での抜刀禁止っっ」といいながら逃げる。

それを見るハンクス大尉達は誰も止めようとせず見守るばかりである。

「こんなコトだから”お祭り部隊”などと笑われるのだ！今一度唱えよッ我々のあるべき姿をッ。『全員復唱ッ』」

そう腕を掲げアリスは宣言する。

「さんはいつ『我々は』」

「オッパイだ」

三課の空気が凍りつく。

それもそうだろうアーチャーがいきなり現れてそういったのだから。

「アリス、君はオッパイ」

パンツと乾いた音が室内で鳴り響く。

もちろんアリスは真っ赤で周りは冷めた状況だ。

数分後

「捨て子!？」

アーチャーが持ってきたのは門前に捨てられていた赤ちゃんだった。門番の憲兵では判断のしようがないのでアーチャーが引き受けたのだ。

「なるほどな。今の世の中、金のあるところあ軍施設へ ってなあモんだ」

「ま、時代の招いた必然の悲劇ってコトっすかねえ？」

ハンクス大尉がそう言いオレルドがそう纏めるのだが、

「ふざけるなっ！」

やはりアリスが机を叩き納得できないでいた。

「必然で子供が捨てられてたまるかッ！時代がなんだの世界がどうだの言い訳だッ！」

「私も子供が捨てられるのは容認できない・・・が、親もこの子を想って軍施設の前に置いたのだろっ。親としては失格だがわが子を想う気持ちは大きい。ただそれが間違った方向にいっただけだ。ならば君はこれからどうする？」

そうアーチャーに言われればもう答えは決まっている。

「三課<sup>我々</sup>で必ず”戦災復興”を果たす！！姑息な言い訳や間違った考え方ができぬ社会を取り戻すのだッ」

すると赤ちゃんはアリスの声で起きてしまい泣き出してしまった。

「え？あ、オイっころら赤子っなんで泣く！？オギャアではない。ハツキリともの申せっ！！~~~~」

そんな光景を見てアーチャーはそうなるよう戦災復興の決意を再確認した。

「作戦時間おしてるんだがなあ」

ハンクス大尉がそう言い、三課のメンバーは慌てて出かける準備を始めた。

それからハンクスはアーチャーの履歴書を見ながら考えにふける。

「（軍人らしいっちゃらしい。だが・・・『野盗化兵によるダム占拠事件』——三課での初任務であり今までの仕事履歴からして戦力としてはあまり期待してなかった。・・・だが結果は敵の主力だった特殊戦車をほぼ単独で、しかも無傷で排除。・・・ハッキリ言って異常だぜ・・・オメエのその戦闘能力は——）」

アーチャーが仕事の銃を取り出ししているとオレルドが突然、

「あ、そういえばアーチャーは隊長と知り合いなんつすか？」

と聞いてきた。アーチャーは「敬語もいらぬ」と言い問いに答えた。

「以前、マルヴィン家に仕えていてね。そのときあの子の世話係だったのだ。まあ今もあの子個人に仕えてはいるが先に部下という考えがくるだろうな」

「げ！？アーチャーって今いくつだよ。軍はいる前に貴族の娘の世話係って年数おいて信頼されてからしかできない仕事だぞ？」

「まあ私は比較的早く信頼されたからな。それにアリスが大祖父にワガママいったそうさ。大祖父は厳しくはあったが理解ある人でな。私と話す機会を設けてもらいそこで許可を頂いたので。だがアリスの父上には反対された。彼もまた娘を大切に想うが故の反対だ。許可して頂いたときにはアリスが大泣きしていたのを覚えている」

「へえ、あの隊長がね」

オレルドが「隊長が大泣きするなんて想像できなねえや」と言い面白いことを知ったと笑った。

アーチャーも苦笑いしながら「まだまだたくさんあるから今度話してやるよ」と言い出発の準備が整った。

「じゃあ隊長追っかけてこの課にきたのか？」

オレルドがそう疑問に持ち尋ねてみるとマーチスも顔を上げて聞く。

「まあな。前の課の仕事も落ち着き始めたのでアリスのいる課に転属したというわけだが、それだけではない。”戦災復興”のための部隊『ハンフキン・シザース陸情三課』・・・こんな部隊ができたのが凄く嬉しい」

遠い目をして制服を見ている姿にマーチスは無言で、オレルドはため息を吐き、

「熱血路線は隊長一人でカンベンだぜ？『正義の味方』じゃあるめえし・・・」

アーチャーはその言葉に笑って「違くない」と言いアリスが待つ車に急いだ。

「なに調べてるんです？」

ステツキン曹長がハンクス大尉に尋ねる。

先ほどからずっと調べものをしているのか本を開いては閉じ、開いては閉じを繰り返している。

「停戦年度の『兵科・部隊全書』」

ステツキン曹長は「へーそうなんですか」と言い子守にもどる。

「（・・・どこにも載ってねえな・・・」901ABT”なんて部隊。あいつの記録としては八年前に軍に所属してから事務や遺体処理ばかりでそれ以外の仕事は全く当然功績はない。なのに少尉という階級についてやがる。本人は三年前から事務課に移ったといってるやがるがそれ以前の901ABTの部隊も遺体処理部隊みたいなものだとしか話さねえし。存在しない部隊900番台・・・まさかな・・・）」

---

ウエルキンス子爵領近隣

---

現在ウエルキンスという貴族の屋敷に向かっている。

「つまりそのウエル・・・」

「ウエルキンス子爵領！その行政指導が今回の任務だ」

なかなか名前を覚えないうオレルドを嗜めながら今回の任務の詳細を話す。

「脱税でもやらかしたんすか？」

「『治安が乱れている』という旨の嘆願書が送られてきた」

オレルドが「楽勝っスね」っと茶化すのでアリスが気を引き締めるように言っておく。

アリスは最近感じることの多くなった首筋をおさえる。

感じる事が多くなったとてやはり必ず”なにか”起こる。

今回はなんの前触れなのだろうか。

そう不安に思っているうちの子爵領に入り屋敷、もとい城が見えてきた。

そのまま入り聞き込み調査から始めようと街に入ってみるのだが・

「なんと言うか・・・随分と覇気のない街だな」

街全体が物静かであり住人もどことなくやつれているようだった。

「今のご時勢、ドロもこんなモンっすよ」

「フム、いっそう邁進せねばな」

そういつて面々は調査を開始しようとする。

「それだけではなさそうだ」

と遠くから馬が台車をひいてやってくる。

参列者は皆、黒色のスーツやドレスを着ており手には花や十字架を持っていることから葬列であることがわかる。

台車には棺桶が三つ積んであった。

「戦時でもないのに三人も同時に亡くなったのか？ いったい・・・」

「ゲームに負けたんじゃよ」

アリスがそうつぶやいていると初老のやせ細った男性がいう。

「鬼畜領主めが・・・！」

「よせよジイさん。相手は貴族だ逆らえるわけがねえよ・・・」

その話を詳しく聞いたアリスは早急に子爵邸に赴くことにした。

「ウエエ~~~~~ッ！なんだよこの肉ッ生焼けじゃないかつ！」

一人の着飾った貴族らしき男が焼き加減がお気に召さなかったらしく肉を床にばら撒く。

「おっお館様。ですが確か昨日はレアにしろと……」

コック長はビクビクしながらそう申し上げるとそれさえも気に入らないのかコック長を睨む。

「あ、いえ、その……すぐに新しいものをつ」

そういつてコック長は逃げるように厨房に戻った。

その主の横で食事するのはこちらにも豪華な服だがデザインからしてお抱え軍人のようだ。

相当主と仲が良いのだろう。

主人と食事を共にするとは普通では絶対にありえないのだから。

こちらは文句も言わず黙々と食べ続けている。

ふと主が周りをみるとメイドたちが床に投げ捨てられた肉をじっと見てる。

主はニヤッと笑い、さらに残ったソースも肉の上にぶちまけ、

「そついえば最近エサが行き届いてなかったね・・・」

「・・・」  
「ッ!」

「いいよ食べなよ、床に落ちたのでよかったです。ククッ」

メイドたちは迷う。

もちろん床に落ちたものなど食べたくはない。

周りの目が気になるからだ。

——  
だが、本心は食べたいのだ。

久しぶりの食事が目の前にあり主が食べていいと言っている。

メイドたちは必死に我慢しようとするが身体が震える。

一人が唾を飲み込んだその時、

「子爵を出せ!!どこだっ!?!ここかっ!?!ここだな!?!」

「お待ちください!主はただ今食事中——」

その直後この部屋の扉が開き軍人が入ってきた。

「そこに直れい外道めがッ！！陸軍情報部第三課パンプキン・シザ  
ーズ小隊だ！！」

「三課・・・？パンプ・・・？」

子爵が疑問に思っているとお抱えの軍人がサッと横に控え説明をす  
る。

「・・・ああ例の——！！」

そう言うと子爵はニヤけた。

「街の者達に聞いたぞッ！！」

アリスはそう言って机を叩く。

「貴様ツ領民を・・・守るべき領民を・・・」

そう怒りに震えだすアリスをアーチャーが抑え、

「落ち着け少尉。・・・領民を”的”にして戦車で追い立てる——

—そんな猟奇に浸っているとお聞きしたが本当か？」

子爵はなんでもないので答える。

「余興<sup>ゲーム</sup>”だよ。生き残れば一攫千金。もっとも、生き残った”的  
”は皆無だけどね」

「貴族に生まれたというだけで・・・領民の命をコマ扱いかッ閉じ

た世界の矮小な暴君がッ」

より一層怒りに震える。

「へエ！良い演技かおをするじゃないか。クッククック。このホスロウは元陸軍の戦車乗りでね。面白い話をいくつも知ってるんだ」

「バンフキン・シザース  
陸情三課。軍部が国家予算を使いやすくするために設立した」プロ言  
い訳”。バガンタ” 戦災復興” を演じることで臣民の不満を抑制する

「」

「本日の演目は”行政指導” かい？客臣民の人気取りも大変だね？  
くっ……はーはっはっ」

ドンッ！！！！

三課一同少し静かになったと思えば、アリスが抜刀し机に突き刺したのだ。

それに続きオレルドたちも銃の準備を始める。

アーチャーに関しては何もしないが最初から備えていたということか鷹の目を鋭くして子爵を見る。

「”戦後”を喰いものにする俗物が……。—— ウェルキンス子爵ッ！貴様を”人為戦災”と見なしこの領より排除するッ！！」

子爵はさも面白くないように肘をつき、

「……………茶番と思い付き合ってたのに……………」

そう言って指を鳴らすとメイドたちが三課を囲みピストルを構える。

「もういいや。 ” 的 ” になれ！」

---

ウエルキンス領荒涼地

---

「はあ。なんでこうなるかな？」

「そだね」

アリス以外の三人は鎖で繋がれ愚痴をこぼしながら戦車の前で佇んでいた。

「見晴らしはどうだい？少尉さん！ゲームを一望できる特等席さ。  
くくくっ・・・はーっはっはっ」

隊長は現在2階のバルコニーにてメイドたちに囲まれピストルを向けられていた。

そのメイドたちの手は震えており逆に銃を向けられているアリスは平然としていた。

「兵隊があくつくつク々に狩りがいのある獲物だね」

「・・・・・・・・」

ホスロウは子爵の言葉に答えず何か考え込んでいた。

そんなホスロウにウエルキンス子爵が「どうした？」と聞く。

「戦車乗りの間でこんな話があります」

『白銀の髪に鷹の目をした赤い外套を着た弓兵と遭ったら味方だと思っ  
思っな——だが決して敵には回すな——』

「その鷹の目に映るは敵の末路・・・奴らは――」

「もういいつなんだよそのお伽噺は。それにあいつ、赤いけど外套じゃなくて軍服だ！バカバカしい」

胸のスカーフを取ると自慢げにこういう。

「貴族をとがめるものなどいないっ今はそついう時代だッ！！」

そつ言つて懐中時計を取り出し三人の男たちに言う。

「「最初に5分やる！好きなだけ逃げる！！」」

その言葉を聴いてオレルドは早速手首からキーピックを取り出す。

「じゅん」

「・・・さすがは”懲罰房からの脱獄魔”」

マーチスはそつ言つてあきれるが今回ばかりはさすがと思つしかない。

「と、なると問題は……」

「……おまえ達だったのだな……嘆願書を送ったのは」

メイドたちは驚き少し後ずさる。

けれども決して銃口ははずすことはない。

「しかしわからんな。その銃口をなぜ子爵に向けない？」

「あつ相手は貴族よ！？銃を向けるだなんて……」

アリスはじつとメイドたちの目を見ながら言う。

「『できない』と言うのか？」

そう言ってアリスは立ち上がり周りを見る。

メイドたちはいきなりの行動に慌てる。

「我が名はアリス・L・マルヴィン。拝命十三貴族マルヴィン家の

第三公女である」

「え！？き・・・貴族のお姫様！？」

アリスはそう言ったメイドの手を指差し、

「な？向けられる」

と優しい表情でそう言った。

「時間だ！さあて・・・くくっド・レ・か・ら狙おうかな？」

時計が5分を知らせ子爵機嫌がよさそうだ。

しかし突然戦車の上部から金属音が鳴り響く。

「ななっ・・・何事だっ！？」

その後も金属音が止むことなく鳴り響き続ける。

「一矢でも構わんっ！誇りのために撃てッ！！」

そうやってバルコニーの手すりに脚を掛けメイドたちに指示を出すのはアリス少尉である。

「少尉っ」

「今だ！散れっ！」

オレルドとマーチスはその言葉で左右に走り出すがアーチャーだけはその場に残りアリスを見る。

「（貴族・平民・陸情三課。確かに”どう生まれたか”ではない。大事なのは……）」

『”どう生きるか”だろう？』

「逃がすかつ砲射ファイヤ！……！」

戦車の弾頭はそれることなく大きな音をたててアーチャーのいた位置に着弾した。

「アーチャーアツ!!!」

三人はその弾頭の一撃を食らったであろうアーチャーの名前を叫ぶ。

「キヤハハツ見たか!?一撃で決めた!」

「着弾確認します」

そういつて興奮する子爵を落ち着けるようにホスロウは淡々というが、次の瞬間脳裏にあの言葉を思い出し口から洩れる。

『奴らは——真っ赤な外套を靡かせ狙ってくる——!!!』

そこには軍服ではなく、真っ赤な外套を着た弓兵がいた。

「またお伽噺かっ!いったいなんだって言うんだよ!」

「次弾をっ」

そう混乱しているうちに弓兵はゆっくりと近づいていく。

「やつが来る!!」

「早く次弾をつ!!」

この戦車は自動装填装置を使用しておりボタン一つで装填が完了した。

「ファイヤ砲射ッ!!」

弾頭はまた狙い通りの軌道を描き弓兵に迫る。

そして弓兵は吹っ飛んだ。

「やったぞ!今度こそ・・・」

だがホスロウは気づいた。

あれは吹っ飛んだのではない。

自分から弾頭と爆風を避けたのだと。

弓兵は何事もなかったように立ち上がる。

そう無傷なのだ。

彼は弓を構えてまた近づいてきた。

「次弾を……」

子爵は席に力なく腰を下ろしホスロウに問う。

「なんだありや……神代の怪物か？——ホスロウ！！アレはなんなんだッ！？」

「次弾をつ！！！！！」

子爵は慌てて撃つ。

だが今度はどうだ？

驚くべきことに弓兵は弾頭が発射されてから着弾するまでに弓から放った矢でそれを撃ち落したのだ。

弓矢で数キロある質量のものに対抗できるのも凄いが、何より一瞬しかない時間で飛んでくる弾を撃ち落すことが異常だ。

その後、何度撃つても撃ち落される。

こう何度も撃ち落されればマグレではなく弓兵の技量で為していることが嫌でもわかるのだ。

「たとえどんなに集中砲火を浴びせ行く手を阻もうと……奴は……決して歩みを止めない——」鷹の目に映る死地”に導かれるまま”負傷なき無尽強襲”を敢行する。——生を棄てた足音。——

「死を生み散らす銃爪」

「戦場のお伽噺ですよ。”901”……対一個大隊猟兵部隊（  
AntiBattalionTrooper）」

……ザッ……

すでに弓兵は戦車の目の前で片刃の長細い五尺余りの刀を構えていた。

『ゲシュペンストイェーガー  
支援無き孤高の兵隊』

それがホスロウの最後の言葉になった。

五尺余りの刀で戦車ごと切られたのだ。

それも見事な切れ味で音さえ響かなかったほどだ。

戦車の中は血しぶきで赤くなり、子爵は何が起こったのか理解できずにいた。

遺体となった身体は前のめりアクセルレバーを前に倒す。

戦車はそれに反応し前進を始める。

弓兵は突然の突進を読んでいたかのごとく上に跳び上がり戦車に立つ。

子爵はそんな光景をまるで第三者の視点で見ている。

「次弾？ そうだ次弾を……いや……無駄だ何発撃っても当たらない……俺は……俺は今まで」

『逃げる奴<sup>的</sup>しか撃つたことがない』

「わ、わかった……ゲームはオマエの勝ちだ……ハハッほらゲームは終わりだ、な？ ハハ……ハ……」

アーチャーは無言で弓を引き絞り子爵のいるであろう位置に狙いを定める。

「撃つなよ？ オイ……俺は人間だ。 的じゃない……」

そう言っ子爵は涙が溢れ震えだす。

後悔をするがもう遅いのかもしれない。

すでに弓兵は弓に手をかけて狙っているのだから。

「アーチャーア——ッ！！！！！」

聞こえたのは自分を呼ぶ声。

横を見るとマーチスが車を運転し戦車と並走していた。

そこにはアリスが身を乗り出してこちらを心配しているようだ。

「無事かっ！？心配するなッ今助けるからなッ」

アーチャーは幾分冷静になり弓の狙いを改める。

「マーチス！前に回り込んで抑え込めッ」

「無理ですッ相手は時速50kmで走る20tの鉄塊ですよ！？」

弓を引き絞り射る。

矢は戦車を突き破り子爵に………は当たらず股の間に刺さった。

「やばいです、隊長。先に落差があつてこの速度じゃ横転します！  
！」

「寄せろっマーチス———死なせんッ」

そういつてアリスは戦車に跳んだ。

「———!？」

しかし並走して走っているのだ。

思うように前に跳ばず間で失速した。

アリスは届かないことがわかるが何もできない。

何もできずにこのまま落ちてしまふのだ。

「やれやれ、世話のかかるマスターだ」

そんな声がアリスの耳に届き見てみるとアーチャーがこちらに向かって跳んでいた。

「だが、そんな君だからこそ私はマスターと認めただ」

そうやって私を抱えると頭を撃たない様に手で覆い外套と同じ赤い布で包みこんだ。

「隊長！アーチャー！」

オレルドとマーチスが二人を心配するが、こっちもけっこうヤバイ。落差によって戦車がこっちに向かって落ちてきたのだ。

「マーチスッ」

「任せろっ」

マーチスはハンドルを切り横転しないようにブレーキをかけ戦車をよける。

後に残ったのは横転した戦車とその近くで安堵する三課の二人だった。

「う……ん……」

アリスは自分を包んでいる布を取り、横たわるアーチャーを見つめる。

「エ……」

「生きている」

横たわったアーチャーは背中に大きくひどい擦り傷を負っていた。

アリスを助けようとしてできたのである。

「その背中……私をかばったのか……すまん」

そう言いアーチャーの袖を強く握る。

「なに、君が無事であるのであればこの傷も名誉の負傷というものだ。それにマスターのために身体を張れるとは存外嬉しいものだぞ」

「バカもの、こっちは気が気でないんだぞ。あまり無茶はしないでくれ」

アーチャーは嬉しそう・・・本当に嬉しそうに笑いアリスは心配で涙があふれる。

「私は泣かれるのが弱いんだ。泣き止んでくれないか」

そう言ってアーチャーはアリスを抱き寄せアリスは静かに涙を流し続けた。

横転した戦車から子爵が這いずり出てくる。

その周りにはメイドたちと三課が囲んでいた。

「キサマら……」

子爵は怒りに震え一気に吐き出すように言う。

「勝ったつもりか！？え！！オイッ。俺を退けてどうなる！？世界が変わるのか！？飢え死にする奴が減るのか！？疫病は！？野盗は！？！？せんキサマらは——」

子爵の顔すれすれをピストルの弾がとおり過ぎる。

雇っていたメイドの一人だ。

子爵は何も声が出ない。

「……みんなわかってる……——黙れバカ！！！」

そこでやっとメイドたちの覚悟が伝わってきた。

「う……撃つなッ。お、俺が悪かった！撃つなッ！！！」

『背部擦過・全身の軽い打撲』

「平和な三課”っていうのに戦車相手によくそれだけの怪我で済んだな・・・ってか全部隊長を助けたときにできた怪我だっけ？」

「それだったら無傷で戦車仕留めたってことですよね・・・報告はいいから休んでなよ」

二人が心配してそう声をかける。

まあオレルドは心配というより茶化しているのだが。

「戦って傷にまみれるのは構わない。慣れているからな。だが我が主が怪我するのは忍びない。もちろん仲間の君たちもだ。欲を言えば世の中の苦しんでいる人たち全員を救いたいと思っている。敵味方関係なくな・・・。だが私にはそれほどの力はない。だからせめて自分の周りにいる人だけでも助けたいと思っている。最もすべてを救うなど幻想だとわかつているがな。」

アーチャーは最後にそう皮肉を言い寂しい微笑をした。

「世界か・・・お前がもし世界をどうこう言うのであれば子爵と同じと罵っていたらう。だが、しっかりと周りが見えているのであればいずれ世界を変えることができるかもしれないな。いや、できる」

アリスはそう言って皆に背を向け歩き出した。・・・がすぐに立ち止まる。

そこにはステッキン曹長が膝を抱えて泣いていた。

「あ・・・」

ステッキン曹長がこちらに気がつき、

「・・・赤ちゃんが・・・あか・・・あかちゃんが・・・うっひぐ」

「・・・母親が現れた？」

「泣いて謝るから思わず許したが――ありや違うな……」

そうハンクス大尉が言って伝えてくれる。

「俺達にじゃなく赤ン坊にあやまってたんだなア……」

『戦争があつた……』

アリスが言う。

「遠くを見るな。前を見る。そこにはちゃんと在るんだ……」

アーチャーも言う。

「“戦う意味が”」

永きに渡る戦乱は社会を腐敗させあらゆる悪を蔓延させた……

――だが――それら“戦災”を討つための部隊がここに存在す

る・・・

部隊の名は——・・・

帝国陸軍情報部第3課”PUMPKIN SCISSORS”!!

## 戦災という名の戦争（後書き）

言い・言う・言ったとか書きすぎてすみません。

癖？・癖かな。癖ですね。あと主語もつけすぎた。

誰とかそんなにいわなくてもわかるし。

あと呼び方替わるけどそんなに表現効果としてとかではない。

書きやすかっただけ。

最初に言ったとおり筆が進まずかなり時間かかりました。

予知能力あるぜ。

まあ感想一件きたのが利いたな。

今度はフリじゃなく本当に時間かかりそう。

だってアリスの実家だもん。

全く考えずに書きしまったからな。

適当に纏めるか。

あとは今度こそもう一つのやつ更新する。

タイトルは決まっていて「戦場を知る懲罰部隊」

戦場のヴァルキュリア3と弓兵のクロス

こっちはアチャとあの・・・あいつ・・・エースのやつ。

この作品は主人公だすつもりでリエラとカップする。

リエラ思い出したのになぜもう一人は思い出せん。

武器・防具紹介。

・弾頭を落とした矢〃鉄の矢

備考：木・竹だと確実無理だからちよつとでも可能性のある鉄製

・片刃の長細い五尺余りの刀〃備中青江（物干し竿）

備考：さすがにそのままだと戦車ごと斬れないので身体と剣を強化してます。

・戦車を貫いた矢〃捻れた剣

備考：宝具ではなく貫通力に特化した捻れた剣

・外套と同じ赤い布〃マグダラの聖骸布

備考：ちよつとF a t eつぽさを出したかつただけ。

**其は貴きものなりて（前書き）**

前話の父親のシーン大祖父が許可して父上が反対に修正しました。

フリになっちゃったね。。。

## 其は貴きものなりて

マルヴィン家本邸

外から鳥のさえずりが聞こえ陽が昇り始めようとする朝。

アリス少尉が目覚める時間はいつもこれぐらいである。

彼女の寝巻きは白地の布でできたキャミソール型の下着だ。

とはいってもそれほど扇情的とはいえないが。

彼女の一日の始まりは伸びをして頬を叩きしっかりと目覚めてから行く、今は亡き母親の遺影にする挨拶だ。

「おはようございます。母上っ」

サツと敬礼をして誰からもお手本になるようなしっかりとした挨拶を毎朝母親に言う。

その後、身支度を済ませ食堂で食事をする。

ちなみに従者のアーチャーは大祖父が亡くなり軍に入ってからアリ

スの父親と折り合いがうまくいかず「このままではアリスにまで迷惑をかけるだろう」と言い軍宿舎に入った。

アリスとしては当然迷惑をかけてもらってもよかったのだが肉親との遺恨の種はいずれ大きな争いを生むと言って譲らなかつたのだ。

朝の食事は屋敷の主、現マルヴィン家当主の父親と共に食べるのが基本であった。

父親といつてもそこに楽しい会話もなく静かに食事をする。

ただ会話をすることがあるとすれば、

「軍人ごっこ」 いったいいつまで続けるつもりだ」

というアリスが軍務につくことへの不満だった。

「またその話ですか。武官の誉れたるマルヴィンの者が軍役に就くのは当然のことです」

アリスはその不満にいつもムツとしながらそう答える。

「貴族にはもっと相応しい部署があるだろう。それをあんなお祭り部隊に」

さすがのアリスも今の言葉には納得できず反論する。

「お言葉ですが、父上。」戦災復興” という三課の任を私は誇りを持っていきます。元来、民を救い導くことこそが貴族の務め――」

アリスは自分の言ったことに納得したのか食事を再開しこう締める。

「貴族は、もつと民との垣根をなくすべきです」

それを聞いた父親はナプキンで口を拭きこう述べる。

「……」垣根をなくす……安い考えだな。この貧困の時代に毎朝パンにありつけるお前が口にするのだから……」ことさら安っぽいわ」

アリスは食事をみてそれに気づき何か言おうとするが何も出てこなかった。

「ええっ！？隊長が遅刻う！？」

肩を上下させながら三課まで走ってきたであろうオレルドが驚く。

「あのカタブツが・・・マジかよ。こんなら、もっとゆっくりすりやよかったぜ・・・」

「オレルドさんは毎回ですね」

笑いながらそういうステッキン曹長に「毎回じゃネエ」とゲンコツを見舞う。

「すまぬっ遅れたっ」

直後に話題にあったアリス少尉が肩どころか身体全身を上下させトヘトになりながら到着した。

アーチャーは席を立ちステッキン曹長はどうしたのか尋ねるとアリスは、

「市井の者は送迎馬車など使うまい。ゼツハツ」

「お家から走って来たんですか!？」

そう言い倒れそうになるので近寄ったアーチャーが肩を支え今、汲んできた水をアリスに手渡す。

「水・・・市井の者は水を飲むのか？」

「人間と言うものは水を飲まないと一週間と生きられない。飲めるときに飲んでおけ」

アリスは素直にコップを受け取り熱で顔を赤くしながら水を飲んだ

「少尉ン家って郊外だったよな・・・10km以上あるぞ」

「また、なにかあったのかな？」

アーチャーは何もいわず彼女の目を見てまた仕事に戻った。

《帝国南部にあるS U 1 3号トンネル。戦時中に崩落したこのトンネルの復旧が今回の任務だ》

「予算と期間は書面参照。なお、今回は重機の――」

「ちよちよちよと待ってください」

ハンクス大尉が任務通達を読んでいるとオレルドが止める。

「なんだよ」

「つまり今回の任務は……」

「ま、早い話が――」

『穴掘りだ』

場所は変わりある重機の前に立っている。

「ドリル！？・・・俺たち情報部なのに・・・」

「シールド機って言うんだよ・・・」

「自走式突撃工作車試作参考—————だそうです」

それぞれの反応を示しながら感想を述べる。

ステッキン曹長は部屋で内務処理なのでほとんどの任務にあまり関係なく報告書から纏めればいいのだが、オレルドとマーチスは実動隊なので辛ければ相応に辛い。

「歩兵さんに先行して鉄条網や土嚢を排除するための車輛らしいです」

「コスト合わねえんじゃないか？」

「だから試作止まりだったみたいです」

その後、列車の乗組員がやってきて、

「現場までディーゼル列車で輸送しますので、早速準備してください」

と言われたのでそれぞれの準備に取り掛かった。

少し場は離れてアリスとアーチャーはスコップなどの工具を用意していた。

「よしよし」

多くの工具を列車に載せ黙々と作業するアーチャー。

アリスは資料を見て持っていくものを確認していく。

「アリス」

「ん？なんだ？」

二人とも手は止めず作業をしながら話す。

「今朝のことなんだが父上に言われたことが原因だろう？」

アリスは話していないことを言い当てられたのに驚く。

「ど、どうしてそれを！？」

「私のマスターは君でありマスターのことは大祖父の次にわかっているつもりだ。今は深くは問わないし一人でゆっくり考えたまえ。だが、君に実害が及ぶ場合には責任を持って私が導くからな。そのことは覚悟しておいてくれ。まあ多少の無茶なら私がフォローしよう」

「……わかった。ありがとう、アーチャー」

アーチャーはこちらを振り向かず、作業を続けている。

考える時間を与えてくれるアーチャーに感謝しつつ私は考えた。

「（工事そのものは現地の人間に行わせる手筈で我々は発注と工具の支給だけだが、これも良い機会だ。）我々も働くぞ！ツルハシを共に振るうことができると民衆との相互理解が――」

――くゆきゆう……

たぶんお腹の鳴る音だろう。

アーチャーが振り向くとアリスがお腹を抑えて顔を赤く染めている。

「……き、聞こえた……か？」

「……朝食を摂ってないのかね？」

ため息を吐きながら尋ねてみる。

「少し食べた。食べてしまった。」

「君のことだ。ダイエットなどではないだろう。それも何か思うことがあったのこと。しかし、食事を抜くことは感心しないと言って  
おこじ」

「・・・・・・・・」

アリスは何も言わない。

アーチャーも答えを求めているわけではないのでそう言うだけにとどめる。

「（多くの民が飢えて苦しんでいるというのに、私はこの18年当然のように貪ってきた・・・——愚か者だ」

移動中、皆は景色を観たり居眠りしたりと会話はなくアーチャーにいたっては姿が見えない。

しかし誰もそのことを言う者はおらず目的地に到着した。

「じゃあな後はヨロシクやんな」

「あいよ」

荷物がおろし終わると列車の車掌はそう言い軍に戻っていった。

「工作車で一気に片付くんじゃないか？」

「あまり乱暴に掘り進めると・・・ホラ、今にも崩れそうだ」

「「待てこのガキ」」

トンネルの前でアリスと話していると後方でオレルドの叫び声が聞こえる。

「おとなしくしろっての」

「どづした？」

そこにはパンを持った少年をオレルドが抱きかかえていた。

「放せよっ」

「近隣の村の子らしいのですが、労働者への配給食を・・・」

少年は暴れるが逃げられないと悟ったのか今度は文句を言う。

「ちよっとくらいイイじゃねエかよッ。兵隊ばっかイイモン食いやがって!!--」

するとアリスが手をのばし、少年は叩かれると思ったのか目をつぶるが、

「——ん・・・?」

「うむ、しっかり食べる」

とアリスは頭を撫で食べるようにいう。

少年は顔を赤くして照れている。

「隊長?」

「そつだ！村に案内してくれないか。工事の発注をしたいのだが」

「子供といえど悪・即・斬！じゃねエか？いつもなら」

「それもどうかと思うけど・・・」

「マーチスがそうツッコムが・・・」

「でも確かに・・・」らしくないね

---

トンネル近隣の村

---

「工事の依頼？」

机を挟んで村の男たちと対峙しているが、向こうのリーダーらしき

人は机に足を載せて尊大な態度をしている。

「断る」

「——なっ……」

「なんでだよ父ちゃんっ 今年は不作だから仕事が欲しいって言うって  
たじゃんか！」

先ほどの子供の父親のようで理由を話してくれた。

「5年前——この辺も戦場になってな——」

『<sup>トンパチ</sup>交戦のせいであのトンネルが崩れた。それで今回みたく村に復旧  
工事の発注が来た。俺達は喜び勇んで働いたさ。国の提示した金額  
は村が年を越すのに十分な額だった』

「工事は完成し——金は支払われなかった」

アリスたち三課は驚いたがアーチャーだけは何も反応を示さない。

「契約書に細工がしてあったのさ……。俺達が待ち望んだ金は——」

——”徴兵を免れる権利”ってのに取って代わられてた。その年は村で12人が・・・銃弾の代わりに飢えと病気で死んだ。少ないとは言わせねエ。当時の赤ン坊で生き残ったのはコイツだけだ”

村の人たちが三課を睨む。

ただ立っていることがやっとだった。

「少ないとは言わせエ。当時の赤ン坊で生き残ったのはコイツだけだ」

そういった父親を見て今度は気を落としたアリスを見て少年は外に駆け出した。

アリスは何も言えない自分が嫌で、でも何も出てこなくて立ち尽くす。

「終戦間際にまた崩れたみてエだが、タダ働きはもうご免だ」

このままではいけないとマーチスは取り繕うように書類を提示し、

「今回は大丈夫ですよ。ちゃんと労働者への報酬が組み込まれて・・・」

「いつだ？」

「え？」

「支払いはいつだ？」

そう問うてくるので、書類をめくり確認する。

「えと・・・その。着工の確認一ヶ月後に・・・」

「ダメだまるで信用できねエ」

そう言っつて男たちは三課を囲み、ジロツと睨む。

アリスは一步前に出てリーダーに申し出る。

「信用しては・・・もらえないだろうか・・・。そうだ！我々も共に働くぞ！同じ物を食べ同じ時間働く！苦楽を共にする覚悟があるんだ！」

アーチャーはそんなアリスを見て思うことがあるのだろう。

決して声はかけないが、じっと鋭い目で見つめていた。

「決まりだな。『帰ってくれ』」

トンネルの前に三課は戻り昼食を摂る。

仕事が発注できないと仕事が進められないのだ。

「ったく。大体なんで穴掘りが三課の仕事なんだよ」

「交通の回復は国益の要さ。その収益は、やがて民に還元される。工事そのものも村人への仕事斡旋になるしね」

「それにしたってよ！」

アリスは立ち上がりツルハシを持つ。

――食事には一切手を手をつけずに。

「た、隊長？」

「少しでも工事を進める」

オレルドとマーチスは慌てて止めに入る。

「ちょちょっ気持ちはわかりますがっ」

「なら、おまえも手伝え」

「ぬあっヤブヘビー!!」

アーチャーが両手に食べ物持ちアリスの前に立つ。

「食事はしっかり摂りたまえ。そんなことでは」

「あんな話を聞いた後でッ！食べられるものかッ!!」

少尉は心にあつた鬱憤をアーチャーにぶつける。

しかし、ぶつけられたアーチャーは怒るでもなくそのまま少尉をじっと見た。

その瞳はわが子を思う母のような慈愛が満ちていたがアリスはアセリでそれが見えない。

「「すっげーなにこのマシン!」「」

ふと振り返るとさっきの少年がシールド機の上に乗って被せていたシートを取っていた。

「格好いい〜戦車か?」

「あっコラガキ!いつの間に!?!」

数分後

「親父の言うコト。気にすんなよ?村のみんなだって本当はサバサバしたもんさ」

現在、アリスと少年が二人で話している。

アーチャーがオレルドたちそう促したのだ。

「恨みのブツケドコロを見付けちゃったモンだから・・・イキがつてんのさ!」

「なんだあのマセガキは」

「僕らにあの役はムリだろ？」

「一人いるじゃねえか」

そう言っつていつでも作業が開始できるよう準備をするアーチャーを指差す。

「得体の知れねえ従者様が」

「いや・・・お父上は立派だ。村のためを思えば下手は打てまい。それに彼は帝国以上に——”私”を信用できなかったようだ・・・」

『帰ってくれ——』

アリスは立ち上がりスコップを持ちトンネルに入っていく。

「ちよっ……姉ちゃん!？」

少年は慌ててついていくがアリスは大きく叫ぶ。

「私は貴族だ!半人前の貴族だっ!民の苦しみも知らずのうのと暮らしてきた!きつとそれを見透かされたんだッ!！」

アリスは必死にスコップで穴を掘っていく。

「私は……たし……は……」

アリスは食事を摂っていなかったからか、そこで力尽き倒れてしまった。

「姉ちゃん!？」

最後に瞳に映ったのは自慢の従者が自分を支え抱きかかえてくれる姿だった。

《「大祖父さまー。大祖父さまー。大祖父さまはこーんな大きなお屋敷にひとりで……さみしくないの？」

「今はおまえアリスがいるからな……それに——我々貴族というのは元々どこかしら寂しいものなのだ……」

「ん……」

アリスは意識を取り戻し辺りを探る。

自分は風通しの良いトンネルから少し離れた原っぱにいたようだ。

ふと、何か握っていることに気がつく。

見てみるとアーチャーの手だった。

「ん？起きたのかね。全く、だから食事はしっかりと」

——パン！！！！

「なぜ私はしばかれなければならん」

——ヒリヒリ。

「なんとなく」

アリスは自分の手を見ながらそう答える。

「眠ってしまったのか？」

「食事もせずにムチャをするからだ。というわけでアリス、これを食べるんだ」

「い、いらぬと言っただろ！」

アーチャーはアリスをじっと見つめる。

「私の決心は固いぞ！」

「では仕方がない。やりたくはなかったが君を思つてのことだ。そこは理解してくれよ？」

今度は、肉をフォークで刺し口元に持つていき顎を押さえる。

「あ、コラ何を……ツモゴモゴー!？」

アリスはアーチャーに無理やり食べさせられるが途中で耐えられなくなり、

「わかった。ちゃんと食べる」

ちなみにアーチャーは両頬をつねられた。

「……この国は酷いものだ。みんな”戦災”つていう病気に冒されて苦しんでいる」

「戦災が病気。民が患者。なら三課はさしずめ医者か……」

「なあ、アリス……」

アーチャーは立ち上がり村の方を見る。

「患者は医者に――自分と同じ病気に罹って欲しいと思っているかね？」

少尉はアーチャーの背中を見て自分を振り返る。

「痛みや苦しみをわかって欲しいわけではない。仲良しこよしになりたいわけでもない。望むことはひとつ――」  
「救って欲しい」  
「それだけだ。少し寂しい考えだがな」

「こんな朝っぱらから集めやがって。帰れつつたハズだぞ!!」

ズダンッ!!!

アリスが剣を抜刀し机に突き刺す。

「言いなりにならなきゃ武力行使ってか。底が知れてきたじゃねえか」

「柄拵えこそ軍曹だが・・・」

そういつてアリスは柄と剣に力をいれ

チキキ・・・カチッ!

二つが離れ中心なかしが現れそこに紋章が彫られていた。

「とくと見よ! いやしくも陛下より賜りし皇帝印。拜命十三貴族マルヴェイン家が宝刀。次期当主の証」  
”継承器”!!!」

その紋章とは皇帝家の家紋が彫られていたのだ。

「じゅっ十三貴族・・・!?」「皇室会議に列席を許されたあの  
——?」「こんな小娘がつ!?!?」

一気に部屋がざわめきだしみんなの見る目が変わる。

ただリーダーだけが少しあせるだけで止まった。

「あ、あんたがどんなに偉かるうがッ」

「この継承器かけて誓う。5年前と今回の報酬を必ず軍に支払わせるッ!!我が屋敷を競りにかけてもなッ」

「——権力かざして気にいらねえ・・・が昨日のアンタよりはよっぽど信用できそうだ」

リーダーはケツと気恥ずかしそうにそっぽを向き周りの連中も笑った。

アリスは感動に震えアーチャーの方に振り向く。

アーチャーもやれやれという仕草をしながらも顔では微笑んでいる。

「隊長!!!大変だッ」

トンネルの前に残っていたはずのオレルドが慌てて入ってきたのだ。

「あの子が工作車でトンネルの中に!!」

アリスたちはトンネルに向けて走り出す。

「なぜすぐ止めなかった!!」

「そ、それが仮眠してて……」

現場に着くと入り口は一部崩落しており、音から察するにすでに中も崩落が始まっているだろう。

「凄エ物音がして目が覚めた時には、もう入り口が……昨日やたらとアレの動かし方気にしてたけど、まさかこんな……!」

「テメエウチのガキを」

「（この音……強引に突っ込んだせいで崩落が始まっているのかん?）」

するとアリスがトンネルをふさいでいる瓦礫を登り始めた。

「少尉っ何してんすかッ!!」

「隙間を見つけた。ここから中に入って止めてくる」

オレルドとリーダーは慌てて止めようとするが、

「黙れッ我々は陸情三課だ!ハンフキン・シザーズこれは我々の仕事だッ!!」

「凄エ……」「なんて女だ……」「あれが……貴族……」

村の男たちがそつ口々に言うが、オレルドたちは気が気でない。

——  
ボン

オレルドの肩に手を乗せるのはアーチャーだ。

「アーチャー!」

「私が必ず守る」

「頼むぜッ」

アリスがトンネル内部に侵入し少しして工作車が見えた。

落盤が酷く落砂をかぶりながらも追いつく。

「姉ちゃん!!」

「大丈夫かッ!? 早くエンジンを切れ! 崩れるぞッ!!」

「かかか、からだが動か・・・」

タイミングを見計らいアリスは一気に乗り込む。

それと同時にエンジンを切る。

——  
フイーガリリイイ。

「収まった・・・か?」

「ご・・・ごめ・・・姉ちゃ・・・俺・・・姉ちゃん達・・・力に・・・なりたっ・・・くっうわああんっ」

「心配するなもう大丈夫——」

——  
ゾワッ

急に首筋に悪寒が奔り咄嗟に少年を抱きかかえて工作車から飛び降りる。

するとゴンツと大岩が落ちてきたのだ。

間一髪押しつぶされずに逃げ果せることができたが落盤が終わったわけではない。

そしてまた落石がこっちにむかって落ちてきたが体勢が悪く避けられない。

せめて少年だけでも助けようと放り投げる。

「逃げるッ」

——  
キュンッ  
——

「（捻れた剣！？）」

死を覚悟したが一条の光がうなり声をあげて岩を貫通、粉々にし通り過ぎたのだ。

「ツあいつ・・・」

「姉ちゃん大丈夫か!？」

「ああ、もう心配ない!」

アリスが向けた視線の先にはこちらを狙撃した後であろうアーチャーが残心の姿でこちらを静かに見つめていた。

数日後

事件から数日経ち工事が着工し始めた。

村の人もイキイキと働きこの調子だと予定日より少し前には完成するだろう。

「ちゃんと働いてんじゃねエか・・・ま、アクシデントとはいえ隊長の”本気”を証明した結果か。これも俺達が持ち場を離れたおかげだな」

「なに？確か仮眠がどうかではなかったか？」

「連れションしてたの。隊長には内緒だぜ？」

「……………道理でな」

後ろを見るとマーチスが「うん……ボクはなんてミスを……と、どんよりと落ち込んでいる。」

「「コラーツ！そこの3人ッ！！」」

声のしたほうをみるとそこにはアリスを中心に村の人たちがこちらを見ていた。

「駐留期間の一週間——我々も共に働くぞッ！！」

「いや、あの我々はどーんと構えてた方が」

「働いたからとて権威は落ちん！」

「そんなああ」

そう言ってアリスは大空を見ながら思う。

『救ってみせる。 ” 戦災 ” という病からこの帝国を――！』

其は貴きものなりて（後書き）

今回、話書いてて初めてアリスが18歳であることに気がついた。

20歳過ぎぐらいだと思ってたのでちょっと驚き。

8年前にアーチャーが軍に所属したから10歳ぐらいか。

ちょっと幼いな……。まあいいや。

今回戦闘がないので書いててもつまらんから結構時間はさんだ。

〓 戦闘無いから見せ場なし

更新遅れてスマソ。

いや、逆に早いほうじゃないのか？

次回は来週の……。いや今月中……。いや来月中にはあげる。と思う。

もう一つのほうが進まんのはナニソ？

武器・防具紹介

・捻れた剣〓偽 螺旋剣

備考：通称カラドボルグ？。岩盤を粉々にするのはベストかと。あと見せ場ないので宝具でちょっと華やかさを演出した次第であります。

## ● 零距離の世界（前書き）

お気に入りが大変なことにorz

重い……。

皆さんパンプキン・シザーズご存じだったのか。

原作の作者には申し訳ないがマイナーな漫画だと思っていた。

現在、漫画でいうと二巻に入りました。

ちなみに私は十巻まで読んでるのでそこまではがんばります。

そこからオリ話か、「戦災復興はまだまだ続く」ENDかです。



目を開き広がる光景は戦場。

辺り一面数キロに亘る敵が丘に佇む男に狙いを定めている。

周りを見ようともしひとりしかおらず、援軍もない。

たったひとりの相手にここまでの戦力を投じる光景に可笑しさを覚えるが仕方のないこと。

なぜならばそれだけの戦力を私が有しているからだ。

戦車の砲射を合図に一齐に攻撃が始まる。

空が戦車の弾頭により陰り、周りからも銃弾で埋め尽くされ逃げ場は無い。

そんな絶望的な状況の中で男が何か呟きながら手を高く掲げる。

すると彼を中心に花びらの形をした真っ赤で透明な膜が咲き、降り注ぐ敵の猛攻を遮る。

数分後、攻撃は止まり砂煙が高くまで上がっている。

少しして砂煙が晴れると男が確認できた。

状態は総攻撃を受けた膜に傷は無くその中心にいた男にも当然怪我はない。

男は手を下ろし弓を虚空から掴み取る。

歩兵は銃を握りなおし戦車も次弾を込める。

弓に輝く矢をつがえ天に向けると、敵も男に向かって構えた。

そして矢を放つとまた男は何かつぶやく。

次の瞬間には矢が爆ぜ網膜を焼くほどの光が世界に満ち溢れる。

歩兵はもちろんのこと戦車の中にいた者も目をやられ何も見えなくなつた。

男はまた矢をつがえ一人の兵の足を射る。

それだけで地獄絵図は完成した。

まず聞こえたのは一人の叫び声と数発の銃声。

それから歩兵の叫び声と銃声が次第に大きくなる。

砲弾の発射音も聞こえる。

目が見えないことで敵がどこにいるのかもわからず、誰かの叫び声による恐怖で引き金を引いてしまう。

またその放たれた銃弾の音や痛みでもまた然り。

密集した敵兵に逃げ場は無く、

また一人、また一人と命を落とし歩兵は男が何もせずとも自然に減っていった。

銃声が止む頃には、ほとんどの歩兵は死に生きているものも無傷ではなかった。

戦車は歩兵ほど被害はないが壊れたものがあるのも確かだ。

見えないという事はそれだけでなく、

隊列を組み直すようにも、味方がどれだけ残っているのか、またどこにいるのかわからない。

戦場を退くようにも、どこに行けばいいのかわからないのである。



鳥の鳴く声が聞こえ射し込む太陽の光がアーチャーには、まぶしく感じた。

現在、朝の五時過ぎだろうか。

この部屋に物は少なく唯一あるもののひとつ、時計を見る。

針は六時前を指していた。

アーチャーにしては少し遅いが仕事にも十分間に合う時刻である。

30分とかからない身支度を済ませ日課である猫の餌やりをするため外に出る。

猫は橋の下に集まるのでそこに行くといつもドラム缶で焚き木をして温まる人々に会う。

「よう、兄ちゃん。考え事か？それとも悪い夢でも見たか？」

思案顔をしていたのだろうかそう言われた。

思い浮かぶのは夢の最後。

アリスの笑顔だった。

「今日はちょっといい夢だった」

「ウエルキンズ子爵？・・・・・・・・・・誰っすか？」

「殺されかけたろっがつ！戦車的にされてっ！！」

頭を掻きながらオレルドがマジな顔してそう言うと、アリスが間もなくつつこんだ。

マーチスたちも流石にこれは呆れるしかない。

「・・・・・・・・あーっあーっ。ハイハイ、アイツね」

とあの時の出来事を思い出した。

「・・・・・・・・ゴホン」

そう相槌を入れるのは技術開発班主任のウェブナー技術中尉。

直接ではないが技術中尉なのでアリスやアーチャーの上官にあたる。

「問題は子爵じゃなくてね……奴の戦車だよ」

そういつて写真を取り出す。

アーチャーのつけた傷が残ったままの戦車が写っている。

「砲塔部の”自動給弾装置”——コイツは地方の一子爵なんか  
手にできる代物じゃないんだよ」

《この帝国でもいまだ研究段階の技術……それをどこぞの組  
織が完成させていたってことになる……!》

「こいつの”入手先”を解明して欲しい」

「それこそ持ち主ウェルキンスに訊くとか」

尤もなことをオレルドがいうが、

「ムリだな奴あ今、軍病院で療養中だ。なんでも精神病だだよ」

「はぁ……」

そう話しているとウェブナー中尉がマーチスに廊下を指差し示した。

「さて、そこで……だ」

ハンクス大尉が今回の任務の主旨を述べる。

「コルトウ博士!?!」

車でアリスが説明しているとオレルドがそう驚く。

そしてオレルドが顎に手をあて思索し、

「誰——?」

「貴様……たまには女の名前以外も覚えろっ!」

アリスがそう説教し、説明にもどる。

「戦車開発の黎明期を支えた偉大な「戦車の父」! 学科で習ったろ。博士ならこの戦車に関する情報も——」

そこで説明を区切りマーチスの様子がおかしいことに気がつく。

「そうした? マーチス」

バックミラーを見ていたマーチスはいきなり声をかけられたことで反応が遅れる。

「……………え？あ、いえ」

そういつてミラーに映るアーチャーをまた見る。

そのアーチャーは都の様子を見ていた。

---

数十分前

「え？アーチャー少尉がどんな男か？」

ウェブナー中尉がマーチスにそう尋ねてきた。

「どんなって……ただの気のいい奴ですよ？」

ウェブナーはタバコを取り出し火をつけ一服する。

少し吸ったところでその理由を言った。

「戦車つてのはいわば最強の陸戦兵器さ……」

《数十メートルの巨体を地滑らせ建造物すら轢殺する！肉薄されたが最後ひ弱な小動物ニンゲンごときに生き残る術はないんだ！

それを――猫の額みたいな覗視孔クラックに一閃……装甲の最も薄い天井部に一撃……まるでびつたりとくっついて撃つたみたいじゃないか。それに弾も見当たらないし……それに鉄板ごと一閃なんて……》

ウェブナーはタバコを強く噛み冷や汗を掻きながら震える。

「もう一度訊くよ？ いったいどんな奴なんだい？」

「大丈夫か？ 顔色がわるいようだが」

マーチスは先ほどのことを思い出している、アーチャーが身を乗り出し尋ねる。

そのときアリスに押し掛かっているのは「愛嬌だ。

「コ、コラ、アーチャー！重いつつ」

そんな光景を見ていると考えるのが馬鹿らしくなり息を吐く。

「気のいい奴さ」

コルトウ博士の住居、もとい研究所に到着したがアーチャーは他の用事を頼まれたらしく別行動となった。

そして他の三課の一行は早速部屋を訪ねる。

—— コンコン

「偉人のクセにまあヘンピな所に……」

オレルドがそういうのも尤もまボロさである。

「コルトウ博士いらっしやいませんか？情報部から参りました」

「ま、偏屈ジジイなんだろうーな」

「偏屈でわるかったな」

後ろからそつ言つ声が聞こえた。

オレルドが口に手をあて振り返ると初老の男性がいた

「ワシがコルトウだ。なにか用か？」

その後博士に頼み部屋に通してもらい資料を見せたのだが、

「イヤーハツハツ。教科書に載るような方と話せるなんて光栄です

っ。いや本<sup>ホント</sup>当！！」

——しゅん……

この通り空気が悪い。

「フンツ……残念だがわからんな。ワシがいた頃の軍事工房では見たことすらない設計思想だ。西方諸国連盟ネヒユロの技術交換会でもこんな技術発表はなかった……。現在の各国の技術水準を大きく上回っている」

博士を尋ねてみるも何もわからないと言われれば子爵の回復を待つしかないということだ。

「そう……ですか」

「解析は？」

「え？」

博士がそう尋ねるのでアリスは思考を中断し答える。

「この戦車どこまで解析された？」

「まだ……これから解体に入るところです」

「そうか……これからか……」

博士がメガネをかけ直した時、アリスは首筋にいつもよりだいぶ軽い疼きを感じた。

だがそれほど長く続かずアリスはすぐに正気を取り戻し、感謝を述べる。

「ご協力、感謝しますッ」

「え、もう引き揚げっスか！？ちよっ……少尉!？」

マーチスも後に続くこうとすると額に飾ってある槍に気がつく。

「（周りは銃や手榴弾なのに槍が飾ってある——ん？この槍、報告にあったアーチャーが持ってたよ槍じゃ……）」

「『ゲイボルグ』の見聞予想図だ」  
テスト・レブリカ

「”ゲイボルグ”？」

「この槍の名前だ……」

そういつて博士はマーチスに近寄る。

「昔……バカげた戦火報告があった。いわく——『天高く跳躍した赤い歩兵が槍を一投げし一個大隊を壊滅した』だそうだ。他にも戦車に近づいて刀で両断などといった報告をしたらしい。実際調査団を送り戦場を確認させると本当に壊滅していたそうだが、もち

るん本部は誰も信じない。その日は霧が濃かったため誤射による襲撃と勘違いと処理された。報告した者もちょうど戦況報告に戻った歩兵一人だったからな。その者は虚偽報告による射殺刑は免れたが精神異常と判断され退役を強いられた。私はその少し前にそいつの話を読みこころして造ったというわけだ。しかし、槍ごときで一個大隊をやれると私も思わない。やれるとすれば夢物語の英雄譚。」

『赤枝の騎士 クー・フリーン——！』

「——つまり”ゲイボルグ”というわけだ」

マーチスは口に握りこぶしを当てる。

「まあ、赤い外套を着た白銀の髪なんぞ、見かけたら目立って戦時中に噂になるだろうって」

「……え？」

驚くマーチスを気にすることも無く博士は目を見てこつ言っ。

「戦車という”鋼鉄の巨獣”の零距離キル・ゾーンに踏み込んで、戦闘行為を行える歩兵が・・・人間がいると思うかね？」

——ゴクッ！

マーチスはつばを飲み込み冷や汗を流した。

「あ・・・すみません。自分はこれで」

「ああ」

マーチスは部屋を後にし車に戻る。

「（赤い外套に——白銀の髪——！？そんな姿をする君は・・・！？）」

「遅いぞマーチス！！」

「ス、スミマセン」

車にもどると痺れを切らしたアリスたちと用事が終わったであろうアーチャーがいた。

「（じゃあキミは誰なんだ・・・！？アーチャー少尉・・・戦時中の所属部隊『901ATT』・・・）」

ん？

「（”901”？え・・・あれ！？）」

「聞いているのかマーチス！」

「あ、その」

「開発班の試験場<sup>ラボ</sup>に向かえ」

「は、はい」

こうして博士への聞き込み調査は終わったのだが・・・窓から視線を送る博士がどこかに電話している。

「そうです。例の戦車です。徹底的にお願いします」

表情が一切消えた博士が相手にそう伝えたのだった。

「そうかい……手がかりなしかい。悪いね、ワザワザ報告に來てもらってさ。いよいよ強制解体しかないか……」

そう言つて戦車に集まる整備兵に大きく声をかける。

「バールとバーナー準備しな！装甲ひつぺがす!!」

「……オーツ!!!!!!」

整備兵は元気よく返事をして早速作業に取り掛かった。

「なんか楽しそうだ」

「これが技術屋の醍醐味だからね。あっはっはっ」

「なあ姐さん。アレは？」

そうオレルドが指差すのは真新しい装甲車だ。

「ああ、今度一課に配備される新型装甲車さ」

「はーーーーっ。いいねえ一課は」

オレルドが本当に羨ましそうにそういつと、

「なに言ってるのさ。こないだ新車まわしたろ？」

「あんなのドリルじゃないっスかあ〜」

そう話していると話題の装甲車の砲塔が動き出す。

「砲塔が・・・試運転っスか？」

「妙だね？そんな予定は――」

――ガコン、パウ！！！！――ズドオオオオ！！！！！！

装甲車からいきなり弾頭が吐き出され目標となった例の戦車に当たる。

戦車を解体していた整備兵はもちろん近くで話していたアリス達までも吹っ飛んだ。

幸いアーチャーの隣にいたアリスとウェブナー中尉は受け止めたた

め怪我はなかったが周りはひどい有様だ。

工具は散らばり放題で解体に取り掛かっていた整備兵は死んではなさそうだが重傷だ。

「な、な!?」なんだい——!?!」

ウェブナー中尉は周りを見渡し状況をすぐに理解する。

「け・・・警報を鳴らせッ!!本部に連絡!C-34発生ッ!!」

装甲車はそれを聞いてか装甲車についている武器の煙幕弾を放つ。

スモーク・デイスチャージャー  
「煙幕!!」

「主任!何事です!?!」

「ゲホッゲホッなんだコレ!?!」

煙に包まれたものや息を吸ったものは目から涙が出てくる。

「——ッ!催涙成分!?クソッ!いったい何しようってんだい!?!」

するとアリスの首筋が疼く。

—— パウツ —— ズゴオオンツ

そして煙に隠れた装甲車からまた弾頭が発射され戦車を狙う。

「まさか——」

『狙いは——”戦車”か!』

「主任ッ」

「ああわかってる。衛兵ッ」

「け……煙がどンドン……」

「早く撤退しましょう!」

「(煙幕ひとつで……なんて脆い!!)こんな煙幕モすぐ晴れるッ  
!落ちて着けッ!混乱で状況を悪化させるなッ」

—— ウィイン —— ガキンツ

すると今度は装甲車の底から鉄の杭がついた装甲が出てきた。

「突入用の破砕衝角（ヘッドロー・カッター）！！」

「！！——狙いは戦車か！？完全に破壊する気だ——！！」

すでに戦車は鉄屑と化して原型を危うく留めている程度だ。

「う…………ん……………」

戦車のほうから声が聞こえる。

煙がちよつと晴れよく見るとマーチスが戦車の前で倒れていたのだ。

「マーチスッ」

身体を重そうに持ち上げ顔を上げる。

「ん……………！！」

ギョルルルルッドロロロロ。

叫び声と同時に装甲車は急発進をして戦車に向かう。

「逃げろっマーチスッ!!!」

「よせよ・・・おい・・・やめろオツ!!!」

アリスたちは兵に抑えられ助けに行くことができない。

マーチスは動けず目の前に迫った装甲車に誰もが助からないと思っ  
た。

マーチス本人さえもそう思ってしまった。

ゴシャ!!!

だが現実には違ったのである。

血が止めどなく溢れ出し辺りに赤い海が広がっていく。

「……あれ？……変だな……どうしてこんな時に」

誰かに担ぎ上げられ一命を取り留めるマーチス。

「『ありがとう』じゃなく——『大丈夫か』じゃなく——」

マーチスを左手で支え首に回すように担ぎ上げたのは鷹の目をした  
白銀の弓兵であった……

「『化物』<sup>バケモノ</sup> って言葉が浮かぶんだ……!？」

足を貫通し砲塔も彼に向く。

だが、彼もただそれを見るだけでなく右手に持っている長く赤い槍を構える。

砲塔が向き終わるのと構え終わるのは、ほぼ同時だった。

だから互いの一撃を行うのもまた一緒だった。

砲弾は彼の左額を掠め、赤い槍は中にいる砲塔土の中心、つまり心臓を貫く。

マーチスのスレスレを通過した砲弾でメガネが割れる。

それと同時に悟る。

「（そうか・・・これが  
—————  
零距離キル・ゾーン・・・アーチャーのい  
る世界・・・）」

そして砲弾による衝撃波が二人を襲う。

「（恐怖で息ができない。胃液が逆流する。手足が動かないッ。砲  
塔が怖いッ装甲車が怖いッ死が怖いッ—————でも、一番  
怖いのは・・・）」

アーチャーは短く黄色い槍を虚空から取り出し今度は手前の席にい  
るだろう運転手を狙う。

一度装甲を確かめるように槍で突く。

—————  
カーーツ

そして相手の位置に穂先を滑らせる。

「……………待つ！！！」

—————  
ゴギンツ……

装甲車から声が聞こえた。

だが、止めようにもすでに槍は振り下ろされてしまっていた。

「……犯人は2名とも死亡。ほぼ即死です」

マーチスは淡々とハンクス大尉にそう報告する。

「身元を特定できるものはありませんでした」

「目的は戦車の機密保持か……」

「はい……技術回復は、もう不可能でしょう」

「アーチャー少尉は？」

マーチスは俯き沈黙が少しの間続く。

「……幸い骨は逸れていたので……一ヶ月ほどで退院できるそうです」

そう聞いたハンクス大尉はため息を吐き安心した。

しかしマーチスの質問で一気に緊張することになる。

「『901ABT』ってなんですか？」

ハンクス大尉はゆっくりとマーチスを見る。

「もっと早く気づくべきでした。9月9日は初代皇帝が戦場で亡くなられた日。以来、忌数として戦場じゃ”9”は使わない！」

「そいつあ古典だ。最近じゃ結構使ってるみたいだぜ？」

「それでももず”頭”にはもってきません……」

マーチスは断言しハンクス大尉に詰め寄る。

「901なんてあり得ない！そんな部隊は存在しない！」

ハンクス大尉はタバコをふかせ視線をそらせる。

「存在しない————か……。そうだな……。だからこう名付けられた。」

身体まで反転させ窓の外を見る。

「『インヴァジブル・ナイン不可視の9番』……  
つてな……」

「（『インヴァジブル・ナイン不可視の9番』……！！）それは……」

—————  
バンツ

「ハンクス大尉！大変ですッ！！」

「どうした？」

「それが……ウェルキンス子爵が……軍病院内で……自殺しました！！」

「“戦車”の口封じだな……どこの組織か知らねエが徹底的にしてやる」

ハンクス大尉はこつちを睨む。

「知る」だけで命を狙われる情報もある。『インヴァジブル・ナイン不可視の9番』もその類かもな……。それでも首イ突つ込むか？マーチス准尉」

マーチスは覚悟を決めた顔で頷いた。

---

帝都中央病院

「ん……………」

アリスはアーチャーの看病していたのだが途中で寝てしまったのか自分に毛布が掛けられていた。

「エミヤ？」

そしてアーチャーの姿は無く、ただカーテンが風に揺れていた。

---

高架下

---

「ホラ、今日は病院食だ。作ってくる余裕がなくてな。だが帝都の病院だけあってなかなか美味いぞ？」

その声を掛けるが猫たちは全く寄ってこず、こちらを警戒している。

「どうした？いつもはガッツいてくるだろう？」

猫たちはととと逃げ出してしまふ。

「そうか……私から……血の匂いをするのか……」

## 零距离の世界（後書き）

ランサーの話入ったけど、本人は出ません。

世界が違っけど存在はしていたということ。

過去の英霊たちは居たことにしてください。

セイバーとかアサシンとか……。

実際には登場させないので許して。

そうじゃないと話作れん。

この小説書いてると兵器に詳しくなりそうだな。

聞き覚えのないものばかりだ。

レポートの提出期限が明後日で明日はレポート書くので小説書けません。

全く手をつけてないというオチ。

だから来週までには。

武器・防具紹介

・花びらの形をした真っ赤で透明な膜ロイ・アイアス 熾天覆う 七つの円冠

備考：闇に染まっていくアーチャーを表現するためピンクから真っ赤に。

・輝く矢ククラウ・ソラス

備考：最後に壊れた幻想でより強い光を生み出した。  
フロックン・ファンタズム

・歪んだ矢ク偽 螺旋剣（カラドボルグ？）

備考：殲滅と叫びたらコレかな。

・ゲイボルグクゲイボルグ

備考：赤枝の騎士クー・フリーンの宝具。影の国の女王スカアハにもらう。

・刀ク備中青江（物干し竿）

備考：前々回使用方法を方法記載

・長く赤い槍ク破魔の紅薔薇  
ゲイ・ジャルグ

備考：砲塔までは距離あるので長い槍を。効果は関係なし。

・短く黄色い槍ク必滅の黄薔薇  
ゲイ・ホウ

備考：運転席目の前なので短い槍を。効果は関係なし。

**闇が潜む真実と闇に陰る復興（前書き）**

このままでいいのだろうか。

批判ないからそのまま進めるつもりだが。

べ、別に感想欲しいわけじゃないんだからね！

……俺がやってもキモいだけだな。

## 闇が潜む真実と闇に陰る復興

### 第二種資料室

「フム」

スタンドの明かりだけの薄暗い部屋の中、眼鏡を掛け直し手に取っている資料を確認する一人の老人。

その老人が腰掛ける机の前にマーチスが立っている。

その資料を待つてきたのはマーチスだった。

「確かに若僧ハンクスのサインじゃな。あやつも出世したモンじゃ」

老人が眺めていた資料の正体は第二種資料閲覧許可証である。

本物が確かめた彼はこの資料室の規則を説明します。

「第二種資料は写し持ち出し厳禁じゃ。筆記用具は置いていけ。後で身体検査させてもらうぞい。」

二人は奥にある第二種資料室に向かう。

「あと表の部屋をちゃんと片しておけ。本は大事な――」

ふと老人がマーチスをみると俯いて暗い顔をしている。

「『こんな情報があればいい――イヤなければいい』そういう顔じゃな」

老人は表情読み取り語りだす。

マーチスは凶星を言い当てられドキっとし目をそらす。

「情報は公平な耳で聞くからこそ意味がある。願望で取捨選択すればほとんど正確さを失う」

老人は頑丈そうな南京錠に手をかけ扉を開く。

その先に待っていたのは軍関係者でも閲覧に大尉以上の権限が必要な資料の山だった。

「胸に不安がある愚者<sup>もの</sup>は、きつと百の資料を読んでも安心せんよ」

「このッ……バカッ！」

アリスは昨夜姿を消したアーチャーに対して怒鳴る。

「『傷口が化膿して入院延長』!? —— バカッ！勝手に病室を  
抜け出したりするからだッ」

アーチャーはいつものアリスとの違いようであたふたしている。

「弁明があるなら言ってみろッ！」

「そのだな………日課のネコの餌やりに——」

「黙れッ!!! 言い訳などするなッ!!!」

オレルドと看護師はその状況を「ひでえ……」「や」「うわあ……」  
と見ている。

その後30分ほど続いた説教も終わりアリスが帰るのだが……

「いいかつ金輪際見舞いになど来ぬからなッ。来てやるものかッ  
!!!」

ガララララ―バタンッ!

残ったオレルドも苦笑いせざるをえない。

「ま、反省しな。隊長スゲエ心配してたんだぜ?」

そういつて自分とマーチス呼び出して探すのを手伝うよう言われ  
たのを思い出す。

「ギヤーギヤー騒がれてイイ迷惑だったぜ。なあ?マーチス」

オレルドは背後の壁に寄り添うように立つマーチスに冗談を言うが、反応は薄く目をそらされ、

「迷惑……か……うん……かもね……」

と返される。

いつもと違う反応に不審に思い困惑しながらもどうしたのか訊こうとする。

「あ、戻ったわね。不良患者さん」

がきれいな担当の看護師を見て注意がそちらに向きニヤニヤと笑う。

「まったくもう、二度と個室にしてあげません。ワンツさん、隣のあなたに見張りをお願いします」

隣の病人は「はあ」と言いナースコールを受け取った。

その時、オレルドが看護師の手を取り感謝を述べる。

「コイツのことお願いしますねナースさん」

「お友達の方？ちょうど良かったわ。代わりに採尿してくださいませ？」

そう言っつてベッドの下から採尿管を取り出した。

当然いやなのでオレルドたちは颯爽と帰っていった。

アーチャーもこれには頬を掻くしかない。

すると隣の病人が突然笑い出した。

そちらに目を向けると、

「これは失敬。同僚の方に恵まれていますなあ」

「あなたは？」

「ワンツです。鞆工場で働いとります。入院して一週間だが誰も見舞いに来やしない」

笑いながらそう言っつてお腹をポンポンと叩く。

「まあ職場があるだけマシですな。胃シムが治ったらバリバリ稼がなきや」

すると採尿を試みていた看護師が採尿瓶の口を指で測り始め考え込む。

「いや……自分で採ってこよう……」

「足が悪いのにゴメンなさいね、入り口の脇に紙コップがありますから」

さすがのアーチャーでも気恥ずかしさで返事ができずすぐに廊下を杖をつきながら歩いていった。

すると角から出てきた小包を持った人にぶつかってしまった。

「おっとこりや失礼」

帽子をさっと浮かせ通りすぎる。

「じぢらじ」

その男はアーチャーの病室に入っていく、

「調子はどうだ？ワンツ君」

「じつ工場長!？」

という会話が聞こえてきた。

「ハツハツハツキミの体調が心配だね」

「そそそんなワザワザ——」

——同僚 か……

情報部資料室

「熱心だな」

オレルドが本に手を置くその先には、

「オ、オレルド」

本に穴が開くほど熱心に何かを探すマーチスがいた。

「なにコソコソ調べてんだ？」

「……オ……オレルドには関係ないよ」

言われたオレルドはため息を吐き、

「『関係ない』か……ずいぶんツレネエなあ。アーチャーのこつたる？病院での態度見てりゃ誰でもわかるぜ」

一瞬、マーチスは躊躇する態度を見せるが話し出す。

「僕は……三課が好きだ。キミとなりゆきで入った部隊だけどだんだん好きになってる。でも……アーチャーの存在が三課を脅かすかもしれない……それを調べてる」

マーチスの頭には装甲車の突進から助けてもらった時のアーチャーの表情が浮かんでいた。

「で？どこまで進んでんだ？」

「言えないよ。これはあくまで僕個人の調べものだ！」

するとオレルドは紙束を丸め始め口につける。

「「え〜・・・お仕事にお騒がせします。ここにおわすマーチス准尉は私の幼馴染みでして、実に有能な男であります。そんな彼ですが実は7歳の時、私と連れションでミミスを”攻撃”した際、なんと―――」

「わーわーやめろよっ関係ないだろ放つといってくれよッ」

マーチスは慌ててオレルドの奇行を止めようと腰にしがみ付く。

「そうさ、俺にあてメエの過去なんざ関係ネエ・・・アーチャーの過去もおまえにあ関係ネエ。放つとくのが筋ってモンだ。それをイジクリ回しとして『三課を守るため』？正義の味方気取んじゃね  
エ」

オレルドは何かに気づいたマーチスの頭に手を載せ落ち着かせる。

「そういうモンじゃあねエのさ・・・俺もおまえもアーチャーも・・・みんな三課のワッペンつけてる。『関係ない』なんていうんじやねエ。話せよ。マーチス」

それから資料室を出て廊下のベンチでコーヒーを啜りながら話を聞く。

「つまり、ほとんどわかってないわけか」

「し、仕方ないだろう。まだ3日もたっていないんだ」

そう弁明しコーヒーを一口飲む。

「『インヴィジブル・サイン不可視の9番』！公式文書には一文字も登場しない・・・そのクセ————最前線や当時の上層部ではデタラメなほどの情報が飛

び交ってた……らしい……。」

「らしい……？大尉ボスの情報か？大尉ボスは今？」

「こないだの装甲車の件で報告に出てる」

「あら？オレルドー何してるの？」

そこに現れたのは人事課の者でオレルドーにお熱な娘だった。

「中庭のバラの鑑賞会」

「フフツなによそれ。また食事誘ってね？」

そういつて廊下を歩いていった。

「誰？」

「人事課のミレイユちゃん」

歩いていったミレイユという女性のおしりを見ながらそういつと、

「……妙だな。」公式にない部隊”出身。そんなのが人事課の審査を通るわけがねエ」

「……なんで傾いてんの？」

「おしりがそこにあるからだ……。ともかく仮にもここには  
一国の軍事情報が詰まってるだぜ？」

ハッ

マーチスも何かに気がつく。

「人事課に圧力……。!?でも確かめようが……」

今度は窓を開け目の前のバラをひとつ摘み取りニッと笑う。

「任せな」

人事課

「だ、ダメよ。オレルド……もうすぐみんな帰ってくるわ。ダメッ!!」

オレルドは先ほどのミレイユという女性に巧みにアプローチをかける。

しかし、彼女も人事課の一員としてそうそう規則を破れない。

「人事課のファイル管理は絶対なの！見せるわけにはいかないの……」

「バレやしないさ。頼むよミレイユ」

「で、でも……」

そこでオレルドは少し首をふる。

そして先ほど手渡したバラをすつと取り戻し謝る。

「あっ」

「ゴメン……本当はファイルなんてどうでもよかったんだ……」

さらに言葉を続け愛を語る。

「秘密”を共有することでキミを束縛したかった。姑息な手段でキミを困らせて・・・最低だな、俺・・・さようなら」

その言葉を聞いた女性はおちた。

「み・・・みんなが帰ってくる前に済ませてね」

オレルドはバラの香りを嗅ぎながら作戦の成功を喜んだ。

「・・・えらく時間かったね。口紅ついてるよ?」

「へへッ成果はあったぜ?アーチャー編入の際ある組織から後押しがあった。戦後直後の編入もな。組織の名は\_\_\_\_\_ 『カウプライン機関』」

オレルドは足早に歩きながら上着を着てマーチスに報告する。

「てっ帝立科学研究所!? \_\_\_\_\_ そこを調べればアーチャーのことも \_\_\_\_\_」

その瞬間マーチスの脳裏に三課の制服をじっと見つめるアーチャーの姿がよぎり立ち止まる。

オレルドは突然止まったマーチスに目を向ける。

マーチスは三課のワッペンを握り締め、

「ごめん……………オレルド。ここから先は \_\_\_\_\_ アーチャーから聞きたい」

せつかく協力してくれた彼に謝ると、うれしそうな表情を返される。

「……………ああ、俺もだ! ヨシッ早速今から病院行こうぜ!」

「こんな時間にか?」

そう誰かの声と同時にマーチスの顔が彼の背後を見て唾然とする。

その声の主は今日一日ずっと二人の分を働いていたマルヴィン少尉でありジト目で睨んでいた。

「事務じむを放つたらかしてなにをしている!？」

「あ、いやっその〜」

「病院になんの用だ!？」

「ア、アーチャーの具合が心配で……そのっ傷口を汚すと——  
——夜になって容態が急変することもあるらしいし……」

——ドキドキドキ

今度はアリスが驚く番だ。

「な……に……」

——ドキドキドキドキ

「そんなわけで我々は病院に。あー心配心配」

マーチスの方を抱いてマルヴィン少尉の横を通り過ぎていくとアリスは腰に手をあてる。

「わ！・・・私は見舞いに行かぬと言ったぞ」

オレルドはそれを聞いて手をひらひら振りながら、

「ええ、ですから我々だけで！それでは失礼」

「う・・・うむ・・・」

マルヴィン少尉は汗を掻きながらやせ我慢するしかなかった。

---

帝都中央病院

---

今夜は風が強く吹き荒れ窓ガラスがガタガタと揺れる。

アーチャーの病室も例外ではなく大きく揺れていたがそれよりも気になることがあった。

カロンカロン、カロンカロン。

「どうしました？」

アーチャーが病室に備えられている呼び鈴を鳴らすとすぐに看護師が来てくれた。

「隣のワンツが戻らない・・・昼間からずっとな」

すると看護師がベッド脇のゴミ箱に何か大きいものが詰め込んでいることに気がつく。

「なにかしら？ゴミ箱に・・・靴」

「（ん？あの紙包みは・・・）」

アーチャーは昼間ぶつかった工場長の持っていた小包を思い出す。

「「いるかッ！？アーチャーッッ！！」」

「オレルドっ僕は先に屋上に——！」

アーチャーは何か悟り立ち上がる。

「な、なんです！？面会なら明日に——」

「それどころじゃねエツ！今ツ今、屋上に——」

ガチャギイイ

屋上の扉を開けると、目を閉じてしまっほど風が強く吹いていた。

目を開けたその先にはなかなか帰ってこなかったワンスが屋上の縁に立っている。

「風邪をこじらせるぞ？さあ病室に戻ろう・・・ワンス」

ワンツは振り返るもそれ以上の反応を示さない。

唯一目線はアーチャーが持つてきた鞆を見ていることだ。

「さあ。早く――」

「ハハ・・・ハハハハ！20年ですよ。20年！20年勤めて・・・一週間休んだだけで・・・解雇クビですよ・・・ハハハ」

その言葉を聞いたアーチャーは心に強く響く。

戦災復興が遅れているため不況が長引いていると考えたからだ。

「しかも退職金が靴1個！？不況！？ハハハツ『ふざけるなッ』！！」

大声を上げ全身で訴える。

それも涙を流しながら。

「その不況ん中放っぽり出されて・・・どうやって食ってけるんだッ！！」

はあはあと息を乱しながら震える身体を抱く。

「……………ろう……………」

アーチャーは何かをいうと、松葉杖をつきながら一歩踏み出す。

「ちょ……………」

「オイ、アーチャー！」

周りが少しざわめく。

「がんばろう……………もっとマシな世の中になるよう……………頑張ろう。だから！」

アーチャーは普段見られないような焦りを見せながら一歩、また一歩とワンツに近づく。

「私たち三課で戦災復興を成し遂げる！だからッ！」

「寄るなッ！……………それ以上寄るな……………」

ワンツがより縁に寄ったことでアーチャーは立ち止まる以外の選択

肢はなくなつた。

ドツドツドツドツ

心臓の鼓動は早く高鳴り焦りがさらに大きくなる。

「(遠い……助けられない……)」

ワッツとの距離は約20m。

英霊たる彼にしてみればあつてないような距離なのだが、今は足を怪我している。

せめてあと15m近ければ何とかできたのだが、そういつても仕方ない。

「(走れば届くか? ……ちゃんと走れるのか? ……クソッ! 戦場では何人も殺めているのに——人を救うことでは、なにもできない……!)」

アーチャーは悔しくて情けなくて身体が震える。

それを見たワッツは少し微笑み、

「……アンタ……いい人だね、お隣さん。……でも

「アンタにあ関係のないことだ・・・放つといてくれないか」

「・・・関係なくはないんだ」

アーチャーは歩みをゆっくりと進める。

「ずっと不安だった・・・私のような人を殺すしかできない奴が・・・三課でやっていけるのだろうか・・・ちゃんと・・・馴染んでいるのだろうか・・・とな」

その話を聞いたマーチスはさっきまでの自分の行動を恥じた。

こんなにも三課を想ってくれていた。

それがどれだけうれしいものであり、自分の行動がどれだけ彼を裏切っていたかわかったからだ。

「しかし今日少し自信が付いた・・・ワッツがオレルド達のことを・・・私の”同僚”と見てくれていた。そして何より困っている人を・・・君を助けたい」

「ずいぶん身勝手な話だね・・・」

「すまない・・・」

しかしワントンは微笑み笑った。

「ハハッ今日出会ったばかりのキミにそこまで想われていたなんてな」

頭を恥ずかしそうに掻きながら、

「それなら私を必要としてくれる職場も……まだまだあるかもしれないなあ」

ワントンはアーチャー達の方に歩み寄る。

—————  
キュ

—————  
ビュオウッ!……!……!

「え?」

ワントンが落ちる。

突風が吹いたのだ。

三課全員が駆け出しワントンを助けようとする。

そしてアーチャーが間に合い背中を押す……がそれはアーチャーが代わりに落ちるということだった。

だが、そんな状況にも関わらずアーチャーの表情は安堵と喜びしかなかった。

よかった。助けることができて。

そんな表情を見てしまった三課の二人は間一髪腕を掴むことができた。

「!?!?!?! 准尉?!?!?!」

「まとめて呼ぶなッ」

二人にかかる重みは身体を引っ掛けるところがないせいかとても重く感じ落ちそうになる。

「もういい、離せ! 私はこれぐらいでは死なん! 二人とも落ちるぞ!」

「バカやろう！7階から落ちて死なねエ人間なんているかよ！」

そして看護師とワンツが二人の腰を支える。

「頑張つて！！2人ともっ」

「頑張つてくれっっ！！」

後ろの2人がそう言いオレルドが決断する。

「握力が保たねエツー気に行くぞッ！！」

「い、いけるかなっ！？」

「知るかッいくぞっ」3”」

看護師が隣に気配を感じた。

「”2”」

「え・・・」

横を向くとマーチスのベルトを持つ頬で切りそろえられた髪が印象の女性がいた。

「1」

「どりゃーっ!」

ドザザザザッ

引き上げたものは息を乱し呼吸を必死で整えようとする。

「ウチはよ……『平和でお気楽陸情三課』だぜ?」

「それはすまないな……」

「……ねえ、アーチャー……」

「なんだ?」

アーチャーが訊くとマーチスは少し笑って、

「疑ってゴメン」

「ん?」

「な、なんでもないっ」

オレルドはふーっと思を吐き見守っていた。

「私も……スミマセン」

「そーだッ。テメエが一番悪いッ」

「そういうな。それに我々の活動がまだ甘いということだ」

そんな言葉を交わす中、看護師だけはあたりを見回し不思議に思っている。

そして不思議に思われている原因のアリスは屋上の扉の後ろでお見舞いの品を置いて、腕を組みながら

「フン……なんだ、元気じゃないか」

「――それではこれで『装甲車破損』についての報告会を閉会  
します」

その宣言と同時に扉が開かれ参加していたお偉い方が出てくる。

ハンクスも例外でなく疲れたのか両腕を拳げ伸びをする。

「ハンクス大尉」

「？」

呼ばれたハンクスはパイプに口をつけたところだった。

「上手く切り抜けましたわね。もっとも『装甲車が歩兵に撃破された』などと、誰も信じないでしょうけど？クク・・・」

その女性は白衣を着た短髪の女性だった。

「・・・誰だテメエ」

「初めまして・・・カウプラン機関医療開発部主任ミュゼ・カウプランと申します」

数日後

アーチャーが退院する日だ。

周りが驚くほどの治癒力を見せるアーチャーは二週間早く退院できたのだ。

「取り寄せたわよ。Lサイズ」

アーチャーが荷物の整理をしていると採尿管を持った担当看護師がリベンジの意味を込めて言ってきた。

「私はもう退院するのだが……」

「アラアラ勝ち逃げするつもり？ホホホ」

するといきなり近寄りアーチャーを押し倒す。

「現代医学に敗北は許されないのよ！」

「いついや、そういう問題ではないだろう！？それに今、もよおしてなどいない！」

「くっこのっ……ちょこざいな！？だがしかしッキヤアアッチ確保ッ！……！」

——ピシ——パリン

「………あんどりりーす」

アーチャーは真っ赤になり看護師は現代医学の敗北に眼を遠くさせる。

「（いきなり本気出さなくったって）」

「再入院させたそうね……………針も……………院長がお呼びよ  
!」

**闇が潜む真実と闇に陰る復興（後書き）**

感想ありがとう。

感謝の気持ちを捧げる。

今日は他に伝えることはないです。

## 908HTT（前書き）

昨日感想の返信機能知った。

書いてくださった方、返信しましたのでご覧ください。

地下水路

ハアハアハア

呼吸が激しい2人の男。

彼らは服から察するに軍人なのだろう。

「ちくしょう……ちくしょう……」

「オへの……ウヘが……ウヘが……」

そのうちの一人は、頭に包帯が巻かれ右半身は黒く炭化している。

右半身とは顔も例外ではなく言葉が上手く発音できないでいた。

「触るなっ……崩れて傷が深くなるぞ!」

もう一人が右手を押さえようとしている男に注意する。

右手はすでに治癒不可能なほど焦げており中指にいたっては第二関節

節で途切れている。

「――！！あっああっあ」

「しっかりしろって！」

その現実を知ったからか男が急に震えだした。

もう一人の男が必死に彼を落ち着かせようとするが震えは止まらず、残った左手を伸ばしてくる。

肩を掴もうとして伸ばしてきたと思っただが、そうはならず後方を指差した。

男は悟った。

自分の状態がわかって取り乱したのではない。

”奴”が来て脅えていたのだと。

「――」

すぐ後ろまで迫っていることが振り向かずともわかった。

男は静かに銃に手に取り、ゆっくりと振り向く。

そこには全身を包む防火服を身にまとった大男あくまが立っていた。

手には火炎放射器を持ち背中にその燃料となるタンクを背負っている。

「この……金魚鉢野郎！」

男は込められている銃弾を惜しみなく撃つ。

「（『陸情一課の隊員はベッドじゃ死ねない』……覚悟はしてたさ！）」

その全部が近距離にいた大男にあたるが、防弾仕様のようで効き目がない。

持っていた銃の弾が切れ今度は大男が構える。

「（ナイフで刺されて死ぬ。銃で撃たれて死ぬ。けどよ……けどよ……）」

ガシヨンッ

大男はスライドアクションをしてガスを送り込み引き金を引く。

「（燃やされるってなんだよ……）」

—————  
ゴオオオオオ

吐き出された火は男を包み込み、服と皮膚が焼け落ち、倒れこんで水の中に浸かったが消えることはなく悶え苦しむ。

大男はその悶え苦しむ男に近づき、また、放射器を向ける。

「「寒イ……」」

大男はスーツのせいで声がかくぐもっている。

—————  
ビュゴオオオオオ

引き金を引き水の中で暴れる男をさらに焼き払う。

「「寒イ。寒イ。寒イ」」

それを見ていた包帯の男は次は自分だと恐怖で涙があふれ出していることしかできない。

動かなくなったことを確認すると、思ったとおり包帯男のほうを見る。

「「寒イ・・・デモ・・・」」

放射器を顔の前面に向けスライドアクションを起こす。

「「人間ヒト・・・焼クト・・・少シダケ・・・少シダケ・・・」」

包帯の男に逃げる術があるはずもなく引き金に手が掛けられ、

「「心、温カイ」」

ビュゴオオオオオ

背中の子には”908HTT”の文字が刻まれていた。

帝都 陸軍情報部 中央管理局

「お返しします」

マーチスが差し出したのは第二種資料閲覧許可証だ。

前回の一件によりマーチスには必要なくなったものである。

「もういいのか？ 『不可視の9番』<sup>インヴィジブル・ナイン</sup>・・・ハッキリさせんじやなかったのか？」

ハンクスは紙を手に取りペラと翻す。

「へっ……やっぱり仲間を疑うのは気が引けるか……」

そう言われるとマーチスは首を横に振り、それから頭に手をあて笑顔で話す。

「仲間を疑うには、まず仲間にならないと」

「……」

ハンクスは少し眼を見開いてその言葉を聞くと先日の出来事を思い出した。

それはミュゼ・カウプランと名乗る者から資料を渡され説明を聞かされた時のことである。

その内容はハンクスにとって思うところがあるらしく、今も少し考え込んでしまっている。

しかし三課の仕事がきているのでそう長く考え込んではいられなかった。

「よし、じゃあ今回の任務だ」

「うわ・・・本当に住み着いてる」

辺りを見ると至る所にランプが掲げられ明るく灯られた空間に人々が住み着いていた。

「・・・うむ。帝都なら職がある・・・そう信じてやって来た人々だ」

軍人がやってきたことにより多少ざわめいていたが少しすると誰も気にしなくなった。

「でもなかった・・・職も屋根も・・・どこにも行けぬまま、彼らは地下にもぐった」

そういつてアリスたちは黙り込み目的地まで歩いていくのだが、

「いい加減にしてくださいっ」「」

突然、怒声が聞こえそちらを向くと管理局の制服をきた男達が女性を絡んでいた。

「へ！不法住民が。ここは俺達水道管理局が仕切ってるんだ」

絡まれている女性は長い髪が艶やかとして美しく、しかしまだ少し幼さを残した18前後と言ったところか。

「だ、だからって」

「へっへっへっ。シヨバ代だよ。シヨ・バ・代！金がないなら体で払うのがスジってもんだ」

そう言っつて女性の豊かに育った胸を見る。

にへっ

「美味そうじゃねエか・・・」

管理局の男とオレルドが同じ顔をしてニヤける。

しばらくして知らない男と一緒にニヤけることに管理局側が気が付く。

「キミ、カワイイねエ名前は？」

「うわ！なんだデメエはっ」

すると今度は彼らの背後で足をザッと開きアリスが文書を前に突き出す。

「陸軍情報部第三課パンプキン・シザーズ小隊だッ！！ただ今よりこの地下水道から難民を誘導する！！」

「パンプ・・・軍隊か？」

「ま、待ってくれ！追い出されたって行く所なんてないんだ！」

ある一人の発言をはじめとしてみんながざわめき出す。

「誘導」と言っただろ。この度国営農場が設立されることになった。

貴君らにはそこで生計を立ててもらおう！」

「働けるのかつ俺達!?!」

「へッお上もやってくれるじゃねエか！」

そのことを聞いた者たちのほとんどは喜び早速の準備を始めた。

「オ・・・オイッおまえら勝手に――」

管理局の一人がそういつて引き止めようとするとスツとリーダーが手を挙げる。

「くっくっくっ地下水道コウから離れられるワケがねエさ――  
だろ?」

その言葉を聞いて他の奴もニヤける。

「見るよ。早速・・・」

「なんでよ、お父さんっお仕事が貰えるのよ!?!」

先ほど絡まれていた娘が必死に父親を説得するが乗り気ではないよ

うだ。

『どつして』ここを出たくない』なんて!』

その言葉でアリスたちも気が付く。

「隊長つなんかあつちの集団が―――」 『俺達は出ていかない』  
「―――」

そこには全く先程と変わらず生活をする集団がいた。

「くつくつくつ軍隊なんかお呼びじゃないってよ!とつとと水道局俺達  
の敷地から出ていきな!」

アリスたちも無理に引き連れていくことはできず「ぐ・・・」としか言えない。

するとアーチャーが誰にも見えないように柄の短い細身の剣を投げる。

その剣は管理局のリーダーのポケットを掠め消えた。

そして掠ったポケットには穴が開き、そこから風邪薬のような包み  
が大量に落ちほとんどが水の中に沈んでいった。

「え？……あ——っ！！なんてもったいない！！」

そして陸地に残った数個のうちのひとつをアリスが拾い上げ中から粉を取り出す。

「風邪薬——……というわけでもないようだな。さて説明してもらおうか」

帝都 陸軍情報部 中央管理局

バンッ

「「どういうことだっ！？ハンクスッ」」

「なんだよ、うるせエな。相変わらず・・・」

ハンクス大尉がコネリー少佐に向かって文句を言う。

コネリー少佐はそのことにはどうでもいいのか詰め寄りやって来たわけを話す。

「水道局にちよっかい出したろっ！！」

「戦災難民の誘導だ」

「群生地コロニーなら他にいくらでもあるだろッ。地下水道おそこは一課ウチが内偵中  
だったんだ」

するとハンクスがポケットからあるものを取り出す。

「じゃ、やっぱり知ってたのか。麻薬コケインのこと」

コネリーは急に黙り腕を組んで座る。

現在、三課には誰もいないのでハンクス本人がコーヒーを入れることにした。

「ふんっ麻薬捜査は三課の仕事ではあるまい！」

「戦災復興さ。水道局（奴ら）は麻薬をバラ撒いた。テメエの庭に迷い込んだ……脆弱な難民達にな。社会不安のどん底に晒されている連中だ……麻薬はあつという間に広まったはずだ」

普段見せないような雰囲気を身にまといながらハンクスは続ける。

「中毒にされちまった人間は——麻薬を買うためになんでもやる。そう……なんでもな。麻薬は復興（コイツ）の邪魔だ。三課（ウチ）が潰す！」

そう言って手に持っていた麻薬を握り締める。

「……連行した局員は？」

「鋭意取り調べ中だ」

今頃、アリスが「キリキリ吐けええ〜〜」と暴れアーチャーが止めているだろう。

そう想像していたらコネリーが立ち上がり、先程とは違い遠くを見ながら忠告する。

「一つ言っておく。民営水道局ミヨン社は――軍に毎年多大な寄付をしている」

そして、三課の出入り口に歩いていき、扉を開け羽振りのいい老人と入れ違いになる。

「大事な客だ」

そう言っつて三課を後にした。

「どうも、ウチの局員がご迷惑をおかけしたそうで……局長のアルバート・ミヨンです」

「なぜ釈放したんですっ！」

アリスは納得いかないとハンクスに抗議する。

「保釈金、積まれた」

「……それは難民達の……血で出来た金です！」

アリスは歯を食いしばり振り返ってどこかに行こうとする。

「水道局に乗り込む気か？三課俺達には通常犯罪に対する捜査・逮捕権なんてないぞ」

それを聞いたアリスは立ち止まるしかない。

「現行犯以外はな」

ハンクスはなんでもないかのよう机に肘をつき書類を眺めながら言う。

カッカッカッ

廊下を足早に歩き車に向かう。

「アーチャーには、まだ話してなかったな。部隊名の由来を……」

「ああそうだったな」

「うん、実はな——」

ドロドロドロ——キィッ

前から車が止まる音が聞こえた。

そこには車を整備してくれたであろうウェブナー中尉と車を運転するマーチスが待っていた。

「よっお待ち！」

「2号車の調整終わりました」

——  
地下水道  
——

「な、なあ……もう少し安くないか？」

男が管理局の者と何か売買している。

「オイオイ、難民密は他にいくらでもいるんだぜ？」

——  
カッ  
——

「!?!?」

いきなりその者たちにライトが当てられ眼を瞑る。

そのライトは三課の2号車、水陸両用車のヘッドライトによるものである。

2号車のボンネットにはアリスが堂々腕を組み仁王立ちしている。

「なっ。お、おまえらッ」

車に乗るオレルドは手帳を取り出し何かを読み始める。

「えーこの度、国营農場の設立により難民を……行間。あーあれはなんだーまやくだー」

と、かなり棒読みだが偶然を装う。

「確保——っ！」

「なにーっ」

アリスがそう言うとアーチャーが素早く動き、赤い布を巻きつけ一瞬にして管理局を捕まえる。

この時、難民のほうは逃げられてしまったが。

「へ、ムダムダ。どうせすぐ釈放だぜ」

管理局のリーダーは自慢げにそう言って見せるが、

「ならば何度でも縄を打ってやる」

この反応には管理局も唾を飲まざるをえない。

---

それからと言うもの金を積み重ね積放しては麻薬売りの現場を押さえ  
管理局を捕まえるということが繰り返された。

その時、もちろんコネリー少佐にハンクスは何度も訪ねられたり、管理局側の警戒も厳しくなったが、それでも三課は逮捕し続けた。

---

バシバシ

「顧客は減る一方ツ！いらぬ支出は増える一方ツ！おまえら能なしかつ」

机をステッキで何度も叩きながら怒りを顕わにする。

「あ、その、局長には感謝してます！捕まってもその日内に出してくれて・・・」

「フン！口の軽いオマエらが一言でも――」

雰囲気<sup>き</sup>が急に重くなる。

「一言でもワシの名を出せば・・・軍部にも逮捕権が発生するか  
らな」

「そ……そんな俺達が局長を売るわけがねエッ！！チンピラだった俺達を見捨てなかったのはアンタだけだ！」

それを聞いた局長は少し微笑み立ち上がる。

「そうか……ならワシのためにもうひと働きしてもらおうか」

「あ……ああ！」

ガシヤッ

箱を開け中には新品であろう銃が詰まっていた。

「うるさいハエどもを……処理してこい！」

各々が銃を手に取り確かめる。

「凄エ……払い下ろしじゃねエ……新品だ」

「あの麻薬といい局長。いったいどこから――」

そうリーダーが訊こうと顔を上げると局長の顔は闇に潜む悪魔のように冷たかった。

それを見てしまったら何も言えず子分を引き連れて行くしかない。

「よ、よし。ホラ行くぞ」

「あ、ああ……」

——  
ボタン

「ふん……アイツらも使えんな。なら——」

局長は奥にある扉を開く。

「おい、ハンスとか言ったな。貴様にも働いてもらっぞ」

部屋の暖炉の前には一課の連中を焼いた巨体の男がいた。

「……寒イ……」

2号車で地下水路を突き進む。

今日は取引する連中をまだ見かけていない。

するとアーチャーがアリスに尋ねる。

「アリス、この前言いかけていた話の続きを聞かせてくれ」

「ん？ああ・・・マーキュリー号の話か。最近見かけないのは、その・・・アイツちょっと精力旺盛でな・・・一課の伝令犬を片っ端から――」

真っ赤な顔をして説明するのだが残念ながらアーチャーの求めている情報と違う。

「いや、そのことははっきり言ってどうでもいい。私が訊きたいのは部隊名の由来の話だ」

トロロロ・・・

車のエンジン音だけがこの空間を満たす。

全員、壁しか見えないのに景色を観る。

「それならそうと先に言えっつ!!」

「勝手に勘違いしたのはそっちだろう!」

ズキンッ

アリスの首筋に悪寒が奔ったと同時にアーチャーが彼女を抱き寄せ姿勢を低くする。

キーンッ

「くそっ外した!全員出るッ!!」

車の正面からゾロゾロと銃を持った管理局が出てきてこちらに向かつて構える。

「転進!!!!」

アーチャーがマーチスにそう叫ぶ。

ドンドンドンドンドン

それに反応したマーチスはハンドルをきり一斉射撃の前にわきにあった路地に滑り込めた。

しかしその先にも待ち構えられており今度は隠れられそうなわき道はない。

「もらった」

ドンドンドンドンドン

もうだめかと思われたときアーチャーが立ち上がり強く車の後方を踏むように蹴る。

すると車体の前面が持ち上がり、即席の盾が出来上がった。

そしてアーチャーは弓を引き管理局の人間を狙う。

その射たすべての矢は外れることなく銃口に入り銃を使えなくしていく。

マーチスは管理局の者を轢かないように運転士通り過ぎようとハンドルをきっていく。

「ふう、なんとか乗り切れたな……あら、これは姐さんに怒られるぞ……」

車の後方部はアーチャーの靴跡がくつきりと残っていた。

「命が助かったんだ。怒られるぐらいなともない。だろ？」

「だろ？って俺も怒られるのかよ！..！」

「当然だ。命を救ってやった礼はしてもらっぞ？」

「.....」

「少尉？」

2人が言い合っているとマーチスがアリスの様子がおかしいことに気づく。

「奴らの銃.....旧式には見えなかった」

「そういえば.....確かに」

「（むしろ——いや.....早計か）.....なんでもない、脱出に専念しよう」

「はい」

とりあえず脱出に専念するということ決まり進路を決める。

「そういえば、さっきアーチャーに抱き付かれてましたね、隊長」

「あ、あれは私を守るためにしてくれたこと。べ、別に他意がある  
とか思っちゃ」

——ざわっ

「止めるっ！！！」

アリスの急な命令にマーチスがブレーキを踏む。

「少尉、どうし——少尉!？」

アリスは俯き首筋を押さえる。

「（なんだこの感じ。以前どこかで……）」

「大丈夫かね？アリス」

「……あ」

そう言っアリスはアーチャーの方へ振り向く。

「(コイツだ・・・コイツと水門で別れた時と同じ感じだ――！)  
」

――！？

「・・・・・・・・・・新手・・・・・・・・？」

マーチスは前方の明かりをみてそうつぶやく。

「あの武器は・・・・・・・・」

ゆっくりと近づいてくるその姿は不気味以外の何者でもない。

「「寒イ・・・・・・・・寒イ・・・・・・・・寒イカラ・・・・・・・・オマエ達焼ク・・・・・・・・少シダケ・・・・・・・・心・温カイ!!」」

## 908HTT（後書き）

前半アーチャー空気だな……。

まあ仕方ない。

原作主人公が無言だとアーチャーも無言だからな。

しかもマーキュリー号の話省いちやったし。

武器・防具紹介

・柄の短い細身の剣〓黒鍵

備考：使用後わからないように消しました。

・赤い布〓マグダラの聖骸布

備考：男が使っても一般人なので絶大な拘束力。ちなみにフィッシ  
ユは心の中で言っている。

・矢〓普通の矢

備考：技術があればなんでも出来る。

## 単眼の火葬兵（前書き）

最近、小説との倦怠期。

書きたいけど時間限られてるから他のこともしたい。

まあしたいことがゲームかニコニコ動画なんですけど。

作品としては今回から一度登場した武器・防具は名前を出します。

毎回同じことしてるとさすがに鬱陶しいし。

## 単眼の火葬兵

「戦時中に一時期、試用されただけでそのまま廃止になった……ハズだ」

—————  
ゴオオオオオ

マーチスがそう説明する間もゆっくりと三課の方に近づいてくる。

その手に持つ武器からする音は不気味以外のなにものでもない。

「あれは……『フレイム・スロウワ火焰放射兵装』」

「火焰—————？」

オレルドが冷や汗をかく。

今までそのような武器を聞いたことがなかったからだ。

マーチスは敵の兵装の熱が感じられるほど近づいてきたことに焦りを感じる。

「元々は藪ブッシュやバリケート……進軍に邪魔な障害物を—————  
却処理するための工兵装備だけ……」  
焼

「ドリルマシンよか、よっぽど便利じゃねーか・・・なんで廃止に？」

「気付いたんだろ。やっちゃいけない殺し方が―――できてしま  
うことに・・・!!」

オレルドは顔を青くしながら「聞くんじゃなかった・・・」と愚痴をこぼす。

「こと、帝国において人道を悖<sup>も</sup>る戦いは禁忌だからね・・・」

「話は後だ!!」

スツとアリスが手を挙げマーチスの説明を遮る。

そして火焰兵の雰囲気が変わったことに全員が感じ取る。

「来るぞ」

ゴオオオオオオオオオ

その言葉の直後、火焰放射器から火がうねりをあげアリスたちにむかってくる。

幸い、アリスが注意したのでマーチスはそれに反応できハンドルが  
きれた。

「よっしゃ！このままスリ抜けちまえ！！」

今回も管理局の逮捕を目的として来ていたので対抗できる装備など  
あるはずもなく一旦引くことを選んだ。

火焰兵の側面から抜け道に入ろうと車を走らせる。

ヒュボツ——ゴオオオツ！！！

しかし、火焰兵が火炎放射器を水面につけるとあたり一面に爆発が  
起こり行く手を阻まれてしまった。

「熱チヂツマーチス！バツグバツグ！」

「水面に……燃料を撒いていたのか！！」

その熱さといったらフロントガラスが急な温度変化についていけず  
亀裂が入るほどだ。

そしてアリスたちの前に現れたのは”炎の障壁”

つまり後方からも追っ手が来ているため逃げ道はない。

「とんでもねエ野郎だぜ……ってか熱くねエのか？」

「……………」

オレルドがそういうのは火焰兵の姿は熱でゆがんで見えるからだ。

それを見たアリスは無言でそれを観察し少しして汗をかきながらも微笑む。

「よかるつツ」ここを通りたくば我を倒せ！』そう言っただな！？」

アリスは誇らしげに抜刀しやる気満々のようだが、オレルド達にしてみれば厄介が増えるだけだ。

なので飛び出して行こうとするアリスを押さえ込む。

「言ってない！そんなコト！ひと言もツ！…」

「ええい話せつ挑戦を逃げたとあつては——」

—————  
バシャバシャバシャ

今度は背後から足音が聞こえる。

さっきの管理局の者が追いついたのだ。

「いたぞ！コツチだ！！」

やる気満々のアリスを抑えると共に背後の敵に注意を向けなければ  
ならないオレルドは「わー！！」と焦る。

ゴオオオオオオオ

「す……スゲエ炎だな……」

管理局のリーダーがそっぴいその横にいた男が火焰兵に近づく。

「あ、アンタが足止めを！？局長も人が悪いな。ハハッ！こんな隠  
し玉があるなら、初めからいっといてくれよ。ハハハッ」

頭に手を置きながら仲間と違って挨拶をする。

だが、

じゅっじゅっ

火焰兵がそちらに振り向きじっと見たと思ったたらお腹に火炎放射器

を押し当てる。

「……………あれ？」

ブスブスブス　ヒユウウウボアアアアアアア  
アア！！！！

「……………！！？ツ」「……………」

三課、管理局、関係なく火焰兵の突然の行動に驚く。

「く、くそっこいつも敵か！？やっちまえッ！」

管理局は火焰兵を敵と認識し持っていた銃を構えるが、引き金を引くより早く火焰兵が炎を撒き散らす。

その炎は近くにいた者たちを飲み込み服に火が燃え移る。

「この火……………！？消えねエぞ！！！」

「燃料が絡み付いて……………！！熱ッ！」

男達は必死に炎を払い消そうとするが全く消える気配がない。

実はこの火炎放射器、燃料も同時に撒いているので布や肌に染み付き水の中でも消えることはないのだ。

——  
ジジ・・・ドンツ!!!

突然ひとりの男が持っていた銃が引き金を引いていないのに発砲され味方の一人の心臓を撃ち抜く。

炎が銃弾に引火したのだ。

撃たれた方の男は背後の撃った者を眼を大きく見開きながら睨み崩れ落ちる。

「ち・・・ちが・・・弾が勝手に・・・」

そしてそれを皮切りに次々と管理局の持つ銃が暴発を始め、流れ弾にあたり絶命するものが現れる。

火焰兵にもあたるのだが防弾仕様なので怪我をすることはない。

「!?!」

サッとアーチャーがアリスの前に移動する。

アリスが「どうかしたのか？」と尋ねると「いや、流れ弾にあたられてはかなわんからな」と皮肉を返される。

「そんな間抜けなマネはせん」とアリスは言い返すがアーチャーは笑っただけだ。

「い……息……キ……が……!!」

中には銃弾にあたらずに済んだ者もいるがこちらは火が口元に回り吸った息により肺を火傷し息が出来ずこちらも絶命するしかなかった。

バシャバシャ……バシャ

火焰兵は倒れた男の頭を火炎放射器で押さえ込んだまま生き残ったものを見る。

生き残ったものから見える光景はまさに地獄絵図。

火を纏った人がもがき苦しんでいるのだ。

「温カク……ナツテ……キタ……」

「ヒ……ヒイイイ！」

その声を聞いた管理局の者は恐れおののき逃げ出す。

ガッ

リーダーも逃げようと駆け出すのだが、追いかけてきた火焰兵に襟を掴まれてしまった。

「はぁアア!!」

「「全員……始末……逃ガスナ……命令……」」

「『命令』!? いったい誰がそんな命令——」

「やめたまえッ! もう十分だろう」

アーチャーが黒鍵構え呼びかける。

「アーチャー! ためらうなッ! ソイツは隙を見せていい相手じゃない!」

そう叫ぶのはアリスでありオレルド達と管理局の者を救助している。

そしてその言葉と同時に火焰兵がアーチャーに向かって火を噴く。

「クツ!!」

アーチャーは後方に跳び、着ている三課のコートを脱ぎ翻し炎を防ぐ。

だが、周りの炎がより強く燃え上がりこのままでは三課も熱で倒れてしまう。

そう考えたアーチャーは弓を構え狙いを定める。

「仕方がない。このままでは被害を増やしてしまうだけなのでな。まずはその兵装を破壊させてもらおう」

するとアーチャーを見た火焰兵が動きを止める。

「901 A B T・・・ソノ外套——901」

「!？」

その内側には聖骸布を着込んでいたのだが、まさか自分を知っているものとは思わなかったので驚く。

そして火焰兵は掴んでいたリーダーを放し、その手は自分を指差す。

「『オレ……』908』。オレ……オマエ……仲間!」

「なんだ? いったいなんの話をしてるんだ!？」

遠くで事を見ているアリスには何を話しているのか聞こえない。

だが、アーチャーの表情を見ればただ事ではないことがわかってしまっただ。

---

バシャバシャバシャ

先程逃げた者達が戻ってきた。

「お……おまえらっ。助けに戻ってきてくれたのか」

リーダーは自分がいないことに気がつき戻ってきてくれたのだと思  
い涙を流す。

「あ！？んなわけねエだろ！」

しかし返ってきた言葉はそんなものではなかった。

「鉄柵が降りてんだよ！クソツさつきまで開いてたのにつ！！」

その時、リーダーの頭には先程火炎兵が言った言葉がリピートされる。

『逃ガスナ。命令』

「おい！コツチはいけそうだぞ！」

男が違う出口を見つける。

—————  
ゴゴゴゴゴゴ

「ん？」

出口の先を見れば凄まじい水の放流が迫ってきていた。

ボバツ!!!

出口の前に立っていた男達は水流の勢いに吞まれ溺れる。

「くそつ火の次は水かよッ」

「『命令』——？まさか……」局……長」？

対峙する2人は未だに微動だにせず睨み合う。

正確にいうなればアーチャーは睨み、火焰兵は見つめているといったところだ。

「901は疾うに捨てた。私はもう陸情三課の一員だ」

そういつと弓を収め、お腹を押さえアリス達の方に駆け出す。

放流がすぐそこまで迫っていて、まずは逃げるのが先決とアーチャ

Iは行動を起こすのだった。

帝都 陸軍情報部 中央管理局

現在、アーチャーがいるのは医務室。

なんのためにかと言うと実は先の作戦中に負傷していたのだ。

怪我は流れ弾による腹部の銃創。

向かってきた流れ弾からアリスを庇ったのだが、普段ならばあんなミスはしない。

防ぐにしても手はあったが、熱による急激な湿度の上昇が銃弾の軌道を変えたのだ。

ここに来てても鍛錬を欠かしたことはないのだが。

いや、これは腕が落ちている云々ではなく意識の問題だ。

三課に配属され、アリスと共に在れる事が意識せずとも舞い上がり

せていたのだろう。

それにあの場でアリスに負傷したことを言わなかったのは、心配させたくなかったと同時に遠ざけられなくなかったからである。

「（全く私は何をやっている）」

そう自分を叱咤し意識を改める。

自分は従者であり、共に在れずとも陰ながら守る自信はある。

逆にそうしなければ巻き込んでしまつ可能性があるのだ。

「（いずれ私はいなくなるだろう。ならば、近くにいることはせず遠くから見守るべきなんだろうな）」

——  
コンコン

「なんだ・・・まだ死体じゃないのね・・・」

アーチャーが思考していると入り口に白衣の女性が立っていた。

彼は彼女を知っている。

「…………カウプランの助手か——」

「今は私がカウプランよ。被験マルタ体」

「— 姐さん（ウェブナー中尉）…………さらに怒るだろーな—」

オレルドたちは現在、ひしゃげた鉄柵に引っかかる2号車を見る。

タイヤは取れ表面の走行はボロボロだ。

「仕方ないよ。非常事態だったし」

オレルドたちが思い出すのは先の脱出だった。

あのときは生き残った局員はもちろん負傷した局員も逃がすため—

刻も早く鉄柵をどうにかしなければならなかった。

そして2人が少し歩いていくと難民が住んでいる空間に辿り着く。

「難民に被害がなかったただけでも僥倖だよ……」

難民はかなり減り残っているのは数えられるほどだ。

「難民誘導ますます急がなきゃね……」

「つつてもあと残ってるのは——」

「………うん……麻薬欲しさに誘導を無視している人達だよ……」

そう、残っているものは麻薬中毒者とその家族だけである。

その中には弱って衰弱しかかっているものもいる。

「中毒が進む前になんとかしなきゃ——ってオレルド!？」

「マリエルちゃん!」

オレルドは突然手を振り、管理局から助けた娘に駆け寄った。

前とは違い背中までであった髪の毛は首元ぐらいできれいに切りそろえられている。

「やっぱり！俺のコト覚えてない？水道局員に絡まれてるトコ助けて」

「あ……………」

「慎ましくも名前を訊くだけで立ち去ったオレルド准尉！」

「覚えてます。イヤラシイ目で『美味そうだ』って」

オレルドは壁に手をつきうな垂れる。

「……………オレってヤツは……………」

「あ……………気にしてませんから……………」

そう慰めてくれるマリエルに調子を取り戻し、苦笑いしながら話題を変える。

「髪——切ったんだ？ハハ……………ますます可愛くなった！」

「……………」

オレルドはその時、彼女がした表情を見て凍りつく。

そして真剣な顔になりしつかりと立った。

俯きながら涙があふれる彼女は身体を震わし、けれど必死に言葉を紡ぐ。

「……よ……良かったあ……男の人に誉めてもらえるなんてあ……本当にこの髪……髪——おかしくないですか？」

「……」

オレルドはそつと手で彼女の髪をすかし、

「ホントによく似合ってる」

その言葉を聞いた彼女は涙が止まらなくなり手に持つ封筒を握り締める。

そんな彼女をそつと抱き寄せ頭を撫でる。

「（父親の麻薬を買うために……髪を売ったのか……）」

そしてオレルドは菌を食いしぱりその先のテントにいてであるう父  
親を睨みつける。

「（マリエル……すまない……）」

そう思いながら包みが開いた麻薬を見る男性。

——  
バンッ

その麻薬の上に大金が入った財布が投げられる。

突然のことで男性は驚く。

「頭金だ。受け取りな」

周りがざわめき出す。

投げた男、オレルドは札をヒラヒラさせながら立っている。

「残りはローンな」

「なっなんのマネだッ」

投げられた方は何がなんだかわからず怒鳴る。

するとオレルドはマリエルを抱き寄せた。

「オメエの娘を買おうってんだよ！麻薬金が欲しいんだろ！？」

抱き寄せられた彼女も啞然とする。

オレルドの顔は普段の顔とは違い悪党のような顔だ。

「バカにするなッ娘を売る親がいるかッ」

「遅エよ。コイツはもう髪を売った。体の一部を切り売りしてんだよ。ニヒヒ・・・」

そういつて嫌がる彼女の耳元を舐める。

周りは呆然とし何も言葉にできない。

「いやっやめてっ」

「くっくっくっ。美味そうな体だぜ」

それを見ていたマーチスはため息を吐き頭を抱える。

「早速まな板シヨーといきますか!」

—————  
ビリィィッ

そついうと服の袖部分を引きちぎり緩んだ顔をして舌を出し押し倒す。

「い……いやあぁあッ」

すると今度はマーチスが財布をオレルドの前に投げる。

「イカすオンナじゃねーか……オレツチも混ぜな!」

すると2人は目で語り合っ。

「（・・・知らねーぞ。ってかどんなキャラだよ）」

「（うん・・・あきらめた）・・・オイオイあんたらシヨ―をタダ見る気かい！？シヨ―は見たいが金はない！金は欲しいが働かない！ロクデナシばっかだな」

「娘の稼ぎっぷりをたっぷり拝みな。くっくっくっくっ・・・」

その言葉に父親はこぶしをギュツと握り締め、

「娘に触るなッ」

—————  
バキッ！！！！！！

オレルドを思いっきり殴る。

「今さら父親面かよッ」

—————  
ゴッ！！

また殴り胸倉を掴む。

「うるさいっ！家を喪した俺には・・・もう”娘”しかいないんだッ！」

それを聞いた彼女は目を見開く。

ドガッ!!

「俺達を……役立たずみたい……」

今度はマーチスが周りの住人に殴られリンチに遭う。

「働けるさっ!ちゃんとっ!明日からでもッ今日からでもッ!」

「娘のためなら、なんだってできるッ」

その言葉を聞いたオレルドは殴られ続けながらもマリエルのほつを見て微笑む。

「薬だつてやめるッ!聞いてるか!オイ小僧ッ!」

そしてマリエルは感謝の気持ちを込めて手を合わせ涙を流した。

その後方でずぶ濡れの男がその様子を見ていた。

管理局のリーダーである。

そいつは自分の両手を見て悲しそうに佇んでいた。

帝都 陸軍情報部 中央管理局 中庭

「それで話とはなんだ？」

現在ベンチに座っているのはハンクスとコネリーだ。

あたりに人は見当たらない。

ハンクスはコネリーを呼んだわけの一つを手渡す。

コネリーが受け取ったのは封筒だった。

「？」

「今朝、三課宛<sup>ウチ</sup>に届いた」

——カシヤ

「警告のつもりらしい……」

中から出てきたのは二つの階級章だった。

コネリーは一瞬呆然とするがそれをギュッと握ると歯を食いしばる。

「内偵失敗……か」

コネリーの頭に浮かぶのは内偵任務を与えたラルフとスマイソンの姿だ。

「なぜ、三課宛に？」

「庶民にゃ一課と三課の区別なんて付かんだろ」

「……なるほど……」

コネリーは立ち上がり去ろうとする。

「一応、礼は言っておく」

ハンクスはコネリーが帰える前にもう一つの呼んだ理由を言う。

「オメエ……なにか隠してないか？」

するとコネリーは立ち止まる。

「おまえら一課は言わば国家公安の頂点組織だ。あからさまに麻薬があるとかわかっていながら、お行儀良く”内偵”？……らしくねエじゃねエか」

「知らんな……失礼する！」

そういつてコネリーは立ち去りハンクスはあとを見送った。

するとコネリーに近づく部下が何か話しかけている。

ハンクスは声は聞こえないが部下の口元を読み取ってみる。

『 ショ・ルイ――ミツカ――』

「（『ショルイ……』――？『書類見つかりませんでした』――  
か……なんのことだ？）」

――  
陸情三課  
――

――  
ぐでん  
――

「ヒ―ハ―」

「フヒ―フヒ―」

オレルドたちはなんとかあの場から逃げ出したのだが顔中ボロボロである。

「……なんだコリヤ？」

「それが……」

「マーチスノオレルドにヤラれた」

「ケンカだそうです」

「……でこちらさんは？」

ハンクスは「イイ齡して」とあきれながら、なぜここに知らない人がいることを尋ねる。

「はい……名前はメッツ。麻薬の一件証言するそうです」

アリスが紹介したのは管理局のリーダーだった。

数分後

「それで2週間に1度……いつもどおりなら今日の夜局長は水道局の人払いをするんだ」

メッツが知りえる情報が佳境に入るとブツの入手先の話になる。

「次の朝には必ず新しい麻薬が配られてたから。だから・・・それが取引の日なんだと思う」

「さすがに昨日の今日では取引はすまいな」

「いや・・・たぶんいつもどおり取引はあるよ・・・」

メッツの声が震える。

「俺達が怪我したりとか死んだりとか、局長は気にしないから・・・」

アリスはじつとその話を聞く。

「俺・・・チンピラだったんだ。職もなくて・・・先もなくて・・・盗んだ食いモン物陰で齧る。そんなネズミみたいな毎日だった・・・でも、あの日局長に会って・・・局長は俺みたいなのを何人も面倒見てて。でも・・・俺・・・気付いちまった・・・局長は、給料をごまかせる学のない奴ばかり集めてたんだって」

そう語ると床に涙が零れ落ちる。

ては、ギョツと握られ力が入る。

「へへっチンピラはしょせんチンピラだよな。今だって密告して仲間、裏切って・・・コソコソしてまるつきりネズミみてエだ。やっぱネズミは一生、日陰でチューチュー鳴くしかできねエのかなあ」

そのときにはメッツの顔は涙や鼻水でぐちゃぐちゃだった。

それを後方で見ていたアーチャーは無言だが眼には強い光が宿っていた。

「三課が大尉と私だけの頃・・・そう。隊章も無き設立当初だ。憤慨の日々だった」

アリスは廊下にかかる隊章を見て語りだす。

『任務を全うせんとする度に現れる”障害”・・・そのほとんどが私利私欲のために民を貪る”人為戦災”だった。奴らはいつも手の届かぬ所にいた・・・。金で・暴力で・権力でその身を幾重にも守っていた。そう・・・まるでブ厚い南瓜カボチャの皮のように・・・。』

・”刃”が必要だった。万聖節の前夜に南瓜カボチャに細工を為す鋏

”南瓜カボチャ抜き鋏”のような頑健で強大な刃——！！！！

「だから我々は名付けたのだ。いかな外皮をも切り裂き断ち割るために。だから我々は名乗るのだ……そう——！」

『誇りをもって”パンプキン・シザーズ”の名をッ！——！』

アーチャーはその言葉を聞き三課のワッペンを握る。

「その小隊長である私が言おう——」

——ポン

アリスはメッツの肩を叩き、

「アルバート・ミヨンの外皮を食い破ったのは、紛れもなく——  
メッツ。おまえだ！」

その時、メッツはふっと肩の荷が下りたような気がした。

「ネズミの牙も、侮れん!!」

「オ・・・俺を逮捕しないのかよ」

「取引まで時間がないっ。悪いが警察にでも自首しておいてくれっ  
!..!」

「（駄目だこの女——俺が逃げるなんてまるで思ってたねエ・・・  
逃げられねエ・・・）」

そう思うとまた泣けてくる。

しかし今度の涙は言わずもがな感謝の涙だ。

「アデデ・・・」

「無理するなよ・・・最後は僕に分まで殴られてたじゃないか・・・」

隊長が行くとなつてはその部下も行かなければならないのだがオレ  
ルドは特に怪我がひどい。

「少尉<sup>アリス</sup>。こんな時に悪いがちょっとオレルド貸してくれ」

オレルドは自分に何の用があるのだろうかと疑問にもつ。

「オレルド。オメエ一課に知り合いいたよな。個人的な」

—————  
ギョルルルツルツ「ドロドロロ……」

「なあアーチャー……」

車に乗り込みしばらくするとアリスが話しかけてくる。

「あの男となにを話していたんだ？」

「……」

アーチャーは答えることなく無言を貫く。

しかし、アリスはそれだけで悟ったようだ。

だから、追求はしない。

かつてアーチャーが自分にそうしてくれたように。

「……そうか」

「『書類』？」

メッツはあの後、三課に残りハンクスの質問に答えていた。

「うん……書類というか。俺達全員こんなの持たされてましたけど……」

そう言って手帳には少しブ厚いノートを懐から取り出す。

「大尉<sup>ボス</sup>！なんか妙なカンジだ・・・」

オレルドが一課から個人的な知り合いから情報収集し帰ってきた。

「あ、お帰りなさ・・・くっ口紅が付いてる！？なんでです!?!」

「<sup>クレイモア・ワン</sup>実動第1小隊が出動してる。完全装備で」

「<sup>（</sup>陸情一課『第1の大剣』”皆殺し”の強襲制圧部隊  
!!!・・・キナ臭くなってきやがった<sup>）</sup>」

「お……お待ちしておりました」

そういうのは局長のミヨン。

彼の後ろには火焰兵が火炎放射器の炎を消して控えている。

「我ら皆——銀の車輪の下に」

そしてその言葉を受ける三人の影があった。

## 単眼の火葬兵（後書き）

アーチャーの制服が燃やされてからは、予備の制服を着ています。

武器・防具紹介  
特になし。

## 第1の大剣vs斬り裂きし者

——寒イ——サムイ……——サムイ……

——寒イ——寒イ——サムイ——『サムイ』

炎の中にひとり佇む”801”

あたりには骨組みだけの建物や人だったものが転がっている。

「出る。結社の若僧をお出迎えだ」

「（ワカル・・・コノ感じ。”奴”来ル・・・）」

思い出すのは真っ赤な外套を身にまとう兵士・・・いや、騎士と呼ぶべきか。

「（<sup>タタラ</sup>火神ノ焰スラ殺ス・・・紅き騎士——！！）」

数時間前

「908? ああ——いたわね。そんなのも・・・」

医務室で話し合つのはアーチャーとミュゼ。

現在、アーチャーはミュゼに身体のサンプルを取らせている。

そういう契約なのだ。

現在の血液採取で全てが終わりアーチャーは服を着る。

「保護液”の開発をしたから覚えてるわ」

「保護液？」

「908の実用化には問題があったのよ。どんな防護服を着ても超高熱の炎は彼ら自身に被害を与える。そこで考えられたのが”保護液”。高精度の断熱効果がある、この液体を防護服内に満たすことで彼らを炎から守る」

「そんな便利なモノがあるのか」

「嘘よ」

ミュゼはサンプルをアタッシユケースに入れ鍵をかける。

そして微笑みながらアーチャーに聞かせる。

「その嘘で908の服を着せた」

その時、908が言っていた「サムイ」という言葉を思い出す。

「ではなんだ。”保護液”というのは」

「温感を鈍らせるただの麻酔薬よ。彼らは”火傷”を自覚できないだけで――」

『防護服の下の皮膚は……きつと今頃……』

続きを言わなくても容易に想像できる。

皮膚は剥がれ落ち筋繊維が丸見え、いやそれさえも状態が良ければだ。

――ドンッ！

アーチャーが壁を叩く。

「ヤツは……自分の体がどうなっているのかも知らず……炎を使っているということか!!」

「『アルト・シユミート・イエーガーアルト・シユミート単眼の火葬兵』 Al t S c h m i e d は単眼単足の炎の神……共和国の民謡では”一本ダタラ”。干魃かんぼつで民を滅ぼす――潤いを忘れた日照りの神よ」

---

「ト」

「戻ったわよ」

「こんな時間までどちらへ？」

ミユゼが帰ってくるとその助手がなかなか帰ってこないことを心配していた。

「分析班に廻しといて」

そういつて机に置いたアタッシュケースを指差す。

「なんですか？これ」

「被験体<sup>マルタ</sup>の一部よ。血、皮、髪、爪、筆り取ってきたばかりのね」

助手のアタッシユケースを持つ手が震える。

「そうね……きっと明日の朝には――908の死体サンプルが手に  
入るわ」

---

ガシヤン

突然の金属音で我に返るアーチャー！。

アリスは現在、脚甲と呼ばれる鉄の覆いをした靴を履いている。

「正念場だぞ。ポーっとするなアーチャー！」

「撃ち合いになりますか？」

「多分、な。経験上……」

するとアリスは正面の車に座るアーチャーが強く腹部を握っていることに気がつく。

「おい、オマエ……お腹から血が出てないか？」

その時、初めて自分が銃創のあとを握っていることに気がついた。考え事をしているうちに無意識で痛いところを押さえていたのだから。

一応、弾は取り除いたが縫うと動けなくなるので当て物をしたただけで済ませたが逆効果だったらしい。

「いや、なんでもない。たぶん局員の死体を運んだときについたのだろう」

そうごまかそうとするが、

「バカ、おまえのその制服予備だろう。作業が終わってから着たものにどうやって血がつくんだ！！それに押さえていた手にまでついてる。見せてみる！」

バツが悪そうな顔をするがそれも一瞬でまた無表情に戻る。

「本当になんでもない。それに君は早く準備をしたまえ！」

それでもアリスは引かず無理にコートを捲り上げる。

「!?!」

そこには真っ赤に染まった包帯が巻かれていた。

「……どこで怪我をした」

「いや、少し油断していてね。だが、このぐらいの怪我ならば戦闘に支障は――」

「どこで怪我をしたと言っている!?!」

突然の怒号に遠くで迎賓館を観測していたマーチスも振り返る。

アーチャーがなんでもないと合図を送ると心配そうにしながらも、また観測に戻った。

「……………銃が暴発したときだ」

「……………!?。あの時か!」

アリスが思い出すのは908が放った炎によって管理局の銃が暴発したときのこと。

あの時、私の前に立ったのは、すでに流れ弾が飛んできていたからだ。

しかし、アーチャーは銃弾が命中したことを隠し、平常を装い皮肉で私を煽ってごまかしたのだ。

その後も908との交戦を交え、救出の作業も行っていた。

すべては悟らせぬために。

「どうかしたのか?」

「いや、流れ弾にあたられてはかなわんからな」

「そんな間抜けなマネはせん!!」

「（すでに私はアーチャーに助けられていたのか……）」

アリスはそんな現実を知ると申し訳なくなった。

自分がまだ未熟であるが故に起こった怪我。

「アリス。これは私の従者としての務――」

「違う。これは私の未熟さが招いたことだ」

アリスはアーチャーに寄り添い傷口を撫でる。

「（私が近くにいればアーチャーが怪我をする。私さえ傍にいなければアーチャーも怪我することが無いのではないか？）」

アリスはそう思った。

今まで三課の活動をしてきて、アーチャーが怪我したのは全て仲間を庇ったこと。

相手が戦車だろうと怪我をする事は無かった。

逆に私が戦車に飛び移ろうとしたときや、マーチスが装甲車に轢かれそうになったときに大怪我をしている。

仲間がアーチャーを傷つける。

「（！？）」

アリスは気がつく。

彼は誰かのためなら自分はどうなってもいい。

言うなれば自分の命の勘定が入っていない。

「（・・・そうか。確かに一緒にいては傷ついてしまう。だが誰かがそれを止めなければ彼はまた知らぬ誰かを救い傷つく。今の私はまだ力不足かもしれないが、いずれエミヤに背中を預けてもらい、その考えを変えてみせる！」

そう思いアリスはアーチャーの眼を見る。

彼の眼は真っ直ぐだが自身のことを何か隠しているように感じる。

アリスはそんなアーチャーに自分の口から語ってもらいたいと思った

「私はアーチャーと一緒にいない方がいいと思う」

「！？」

いきなりのことのでアーチャーは戸惑う。

確かに自分もそう思った。

だが、こんなに早くその時がくるとは思ってもみなかったのだ。

アーチャーは瞳を濁らせ無表情になる。

「だが」

「ん？」

「それ以上に共に支え合いたいと思う。オマエが私を守るのではなく、オマエと背中を預け合いどんな困難にも乗り越えられるようになりたい。だから私を背中を預けるに値すればもう一度契約してくれ。今度は”共に在る”だけでなく、”共に支え合う”という契約を。」

その言葉にアーチャーは心からの笑みを浮かべた。

「私としては今でもかまわん。君が話した三課の名の由来を聞いたとき覚悟を知った。その思いは尊い。私にはもったいないぐらいにな」

「茶化すな。それに思いだけでは足りない。力も見てからにしてくれ」

「茶化したつもりはないがわかった。アリスの力を見せてもらおう。だが、これは持っていてくれ」

そういつてアーチャーが取り出したのは宝石のペンダントだった

「いいのか？これはオマエの大切なお守りだろ？」

私がまだ小さかった頃このペンダントが欲しいといったらこれだけは譲れないものだと言われたのだ。

「君の覚悟を知り認めた証だ。それに君に持っていてもらいたい」

そういつてアーチャーが首にかけてくれる。

「そうか。では肌身離さず持っていよう」

そういつてお互い見つめあった。

「あの〜」

「「！？」」

マーチスが観測が終わり戻ってきたのだが……。

「準備できましたか？」

「す、少しまで。もう終わるところだ」

「私はすでに完了している」

「なっ！ずるいぞ！！」

そういつて戦いの前とは思えない空気が流れるのだった

「わ……” 我ら皆——銀の車輪の下に”」

「……」

ミヨンがそう挨拶をするが返事が返ってこない。

挨拶をされた三人はそれぞれ仮面を被っており真ん中の白いスーツを着たものがリーダーのようだ。

ミヨンがもう一度挨拶を試みる。

「” 我ら皆——銀の——」

すると白いスーツの男はミヨンを通り過ぎ908の前に立つ。

ミヨンはそれが面白くないらしい。

顔を歪めているとピエロ調の仮面を被った黒いスーツの女性が笑う。

「クッククック。それは” 同志” の間でのみ交わす言葉ですわよ？  
ミヨン様」

するとさらに顔を歪ませ白いスーツの男を睨む。

「変わりないかハンス。つまらない仕事をさせているな」

「オマエ居場所クレタ・・・俺、感謝」

ダンッ

「そんなポンコツっ私の方がよっぽど役に立っているハズだ！地下にあなた方の麻薬をバラ撒き——ご希望どおり書類も作成している—」

ミヨンは最初は杖を振り回し怒りを顕わにするが懐から書類を取り出すと不敵に笑う。

「・・・・・・・・ベルネア」

「——はい」

白いスーツの男が名前を呼ぶと黒いスーツの女ベルネアがアタッシュケースを持ってミヨンに近づく。

そして書類を受け取りアタッシュケースをミヨンの胸に投げ渡す。

「ハアイ。次のノルマよん」

肩に手を回し耳元に顔を近づける。

「あなたは言われたとおり、麻薬を配ってれば、い・い・の。水道局長様」

そう挑発的にいって手をヒラヒラさせ元の位置に戻る。

——  
パンッ

突然の銃声と同時にベルネアの帽子の鍔が打ち抜かれる。

「……………おい」

彼女が振り向くとそこには、

——  
ガシャガシャガシャガシャ

管理局の男達が壁沿いに並び銃を構え三人を狙っていた。

「今……銃声がしなかったか？」

アリスが迎賓館の方を見る。

距離としては大体2 kmぐらいだろう。

「アーチャー。口論は後だ」

「別に私は口論したつもりなど――」

「マーチス早く出せ!!!」

「いつもは人払いしてるんだが、さすがにそろそろ成果ってものが欲しくてねエ……」

そういつてミヨンは手に持つ彫刻がきれいな銃をベルネアのあごに当てる。

「確かジャックJACKという名だったな……コロツキJACK……くくく  
っお似合いだな……」

そういつて白いスーツの男JACKをからかう。

「どうだろうジャックJACK君。そろそろ私を本部に推薦してくれてもいいんじゃないのかね？そう——『銀の車輪結社』に——」

ミヨンの顔はさらにニヤけ顔を濃くする。

「局長なに言ってるんだ！とっととやっちまおうぜ！」

同員が騒ぎ出す。

「コイツ地下で俺達を焼き殺そうとしやがった！水責めもコイツらの仕業なんだろ！？局長そう言ったよな！！」

場を埋めつくほどの殺気立った連中が今にも引き金を引きそうである。

「さあコッチを向いて返事を聞かせたまえ。彼らを止められるのは私だけだ」

「グラン」

「はっ」

JACKがそう言うともう一人の体格のいいスーツの男グランが一礼し、歩き出す。

「おい！勝手に動くなっ！！」

「構わねエ！コイツからやっちまえッ」

するとグランが持つアタッシユケースが開きそのまま盾のように構

える。

中には形は四角く表面が丸い何かが六つ入っている。

「なんだあ？」

—————  
「ウオッ！！！！！！」

そのうちの一つがいきなり弾けとび、中に詰まっていた何百個の鉛の玉が同員を襲う。

一瞬のうちに同員のほとんどは絶命するか重傷を負った。

「同ちよ・・・」

「たすっ」

「ギヤアアアアア」

その後もまた違うものが弾けとび同員達は確実に減っていく。

「あ・・・あ・・・」

「じゃあそろそろ、髪の実任取ってもらうわよ」

「なっ!？」

その言葉を聞いてベルネアのいるはずの右を見るが、おらずいつの間にか背後を取られミヨンの顔を特殊な武器で捉えていた。

「今すぐJACK様から銃口を下ろしなさい。でないと……」

その武器は普段は四角い板のような形をしているが彼女が取っ手の引き金を引くと三枚の刃が三方向に飛び出した。

その刃はミヨンの目元ギリギリで止まる。

「ナマス斬りにするわよ？」

「いや……その……なんだ……」

歯切れの悪いミヨンに彼女が逆の手でもう一つ同じ武器を取り出す。

「お、おまえらッ！早く銃を捨てんかッ！」

その発言後すぐにJACKに土下座する。

「（おしまいだ……『結社』に歯向かって失敗した……殺される――）」

ミヨンは震えながらJACKという男に申し上げる。

「この度は……とんだご無礼を……その……」

「では2週間後にまた」

「（！？）」

JACKは何事も無かったかのようにそう言って立ち去ろうとする。

「私を許して戴けるのですか！？」

ミヨンはうれしくて顔を上げるとJACKは振り向いて、

「……………」許す？——今……おまえ、なにかしたのか？」

そこには仮面で表情は見えないが凄まじい圧力があつた。

「私が振り向くまでも間、おまえに……なにができたのか言ってみる」

「……………私……は……………これ……からも……………麻薬を配り続けます……それで……精一杯です……………」

ミヨンは力無くそうつぶやく。

そうすることしかできなかったのだ。

それを聞いたJACKは引き挙げる。

「引き揚げだ。ベルネア”書類”を」

「はい」

その書類が手渡される瞬間、JACKの手が止まる。

「JACK様？」

——ミシッ——ミシッ

「囲まれた」

グランがそう言ったと同時に装甲車が壁を突き破ってくる。

そこにいた局員は人形のように吹っ飛んだ。

そして次々と窓から兵士が突入してくる。

JACKはその兵士の腕の紋章を見て思った。

「（陸情一課……『クレイモア・ワン第1の大剣』——！！）」

陸情一課『第1の大剣』。

彼らは全身装備で身にまとい顔でさえフルフェイスプレートで覆われている。

「書類を探せッ！！抵抗者は排除！！」

「抵抗確認、排除」

「抵抗確認、排除」

「抵抗確認、排除」

命令された隊員は局員の生き残りを見つけては傍に銃が落ちているだけで抵抗とみなし殺していった。

いや、手を挙げ無抵抗を示しても彼らに関係なく、抵抗とみなされ排除されていく。

「書類”確認できませんッ”

「確認できません」

「くそ、いったいどこに―――」

―――ガララララ「ガン！」

ひとりの隊員の足元にアタッシュケースが滑り込んでくる。

「(・・・?)」

そのアタッシュケースを怪しんでいるといきなり開き中から手榴弾とスモークグレネードがたくさん入っていた。

「にげ―――」

―――ドゴオッ!!!!!!!!!!!!!!

爆発が起こりあたりが煙に覆われる。

「くそッ何人が吹っ飛ば」

——  
スパッ

ベルネアが捕らえきれない速さで2人の隊員の首を落とす。

やられたことさえも気付かずに絶命するほどだ。

「JACK様。お急ぎを！」

「……ああ」

JACKが見る視線の先には908が隊員を燃やしながらもミノンを守っている姿だった。

「なんなんだコイツ」

「徹甲弾持ってこい！」

一課の部隊が距離をとりながら908を追い詰めようとする。

「なぜ・・・私を・・・」

「オマエヲ守ル——任務。早く立て。モウスグアイツ・・・  
アイツラ・・・来ル!!」

「アイツら?」

パン——パンパン

「なんだいったい!？」

アリスらが迎賓館に到着し、銃声がひどくなっていることを確認する。

壁には大穴が開いており窓もほとんどが割れている。

「ひいい……………」

大穴からひとり管理局のものが逃げ出てきた。

パン——ドサツ——パンパン

一課の部隊員がその管理局員を撃ちまた中に入ってしまった。

よく見ると遺体が大穴の先にたくさん転がっている。

「強襲制圧部隊……………素人相手に——！！！」

するとアリスたちに気づいた一課が近づいてくる。

「ここは一課の作戦区域だ」

「早々に立ち去れ！」

「……………マーチス」

アリスは顔を俯けマーチスを呼ぶ

「あ……相手は一課ですよ？」

「「マーチスッ！……！」

「は、はいいつ

——ゴッ！……！

マーチスは一課の静止を振り切りアクセルを強く踏む。

「くそッあいつらっ

「至急本部に連絡——作戦区域に侵入者アリ！」排除”の許可願  
う！……！」

「侵入者は友軍兵士ツ情報部第三課実動小隊……！」

「とっ止まれ」

一課が屋敷の中に入られまいと銃を構えるが友軍への発砲許可が出  
ていない。

アリスたちはそのまま突き進み侵入を果たす。

「パンプキン・シザーズ！……！」

一課が入ってきた三課を囲む。

だが、アリスはそんなことは気にせず叫ぶ。

「責任者を出せッ!!今すぐこの虐殺をやめろオッ!!」

「なんだおまえら。ここは一課の――」

マーチスが奥の部屋で炎が立ち上がるのが見える。

「少尉!908を発見!」

「アーチャーは908を追え。マーチスはそばにいるだろう!ミヨンを確保しろ」

「アリスはどうする?」

――「コッ

アリスが車から降り2mはあろうか何かが入った入れ物を持つ。

そして何十人はいるであろう一課の元に歩いていく。

「この痴れ者どもを諫めねばなるまい」

それを聞いたアーチャーも車を飛び降りアリスと逆方向を向く。

「アリス。想像するのは常に最強の自分だ」

そう伝え908のところに向かう。

くっくっくっ

一課の連中が笑い出す。

「同僚なら手は出せないと思っているのか？」

「少尉ッ（ダメだ・・・僕じゃ止められない・・・アーチャーどうして・・・少尉を置き去りに——！！）」

そう思いハンドルを叩く。

「なんでだろうな・・・今日初めてアーアイツチャーが・・・私を信頼してくれたように思う」

アリスは振り返らずにマーチスにそう伝える。

「……………御武運を」

「ゴン」ギヤギヤギヤギヤ

アクセル思いっきり踏み込んで車を回転させ、周りの兵を引かせる。

「コイツっ」

そして速度がついた車が向かった先は奥の部屋の扉。

そこでハンドルを切り即席の車のバリケードを作りその勢いでマーチスは奥の部屋に侵入する。

「本当にな、エミヤ……………おまえが来てからこっち……………」平  
和でお気楽”だった三課<sup>ウチ</sup>が荒事ばかりだ……………」

「くそッあのメガネ。通路を塞いでいきやがった。装甲車！破<sup>ヘッ</sup>碎<sup>シ</sup>衝<sup>ロ</sup>角<sup>カ</sup>で……………」

「ガッ！！！！ゴッ！！！！」

車の近くにいた兵が倒れる。

そこにはアリスが立っている。

「そも、拜命十三貴族とは、多大なる功績を収めた者に与えられる  
字」<sup>あひな</sup>

そう言い入れ物から何か取り出し始める。

「我がマルヴィン家の字は”L”<sup>レイ</sup>」。『斬り裂きし者』”L”<sup>レイ</sup>」  
——!」

取り出したのは持ち手が真ん中にあり両刃がついた武器。

「戦場<sup>いくさば</sup>にありて常に先陣の路<sup>みち</sup>を切り開く騎士の字」

『おまえが私に——私に戦場を与えた!!』

アリスの眼は鋭くもきれいに輝き武器を振るう。

「臆さぬならばかかってこい!!」

「ぶはっ！やっこの服脱げるのか」

「停戦サマサマだぜ！」

ハンスと同じスーツを着た男たちがそのスーツを脱ぎだす。

彼ら908部隊は停戦の知らせを聞きスーツを脱ぐ許可を得たのだ。

「早く脱げよハンス。わははは！」

「アウアウ」

「相変わらずトロイな。あとオマエだけだぞ」

ハンスがスーツを脱ぐのを手こずっていると背後からそつと手が近づいてくる。

その手がハンスの首に回され背後にいた男に引き寄せられる。

「みんな知ってるか？コイツ、<sup>ハンス</sup>16にもなつて……オンナ知らねエんだとよ」

「……ぶ、ぶわっはっはっはっ」「」「」

それを聞いたみんなが大笑いしハンスは顔に手をあて恥ずかしがる。

「帰ったら紹介する約束なんだよな？な？」

みんな本当に楽しそうに笑いバラした男も「スマン。スマン」と謝りながら笑う。

そしてハンスも笑い出すと。

——する……ポチャッ！



「逃げる……ハンス……」

ハンスが振り返るとそこには、

「畏だ！！この服を脱げば……死ぬ！！！！」

先ほどまで話していた男の肉が薄っすらとついた骨だった。

「どうした、逃げんのかっ」

その言葉で正気に戻る。

それを見たミヨンはまた歩き出す。

「ワシはもう腹を決めたぞ！ここはなんとか逃げ延びて……必ず軍に仕返ししてやるッ」

「「今、名前ハンス——呼ンダ……」」

「あん？いつもそう呼んどるだろうが。ポンコツとも呼ぶが……」

「「今ノハチヨット……908ノミンナミタイダッタ」」

そう、うれしそうにハンスは語る。

ミヨンは少し照れながら「フン、気持ち悪い奴めっ」と罵った。

「地下水道への抜け道？……そうか、水道局だもんね」

「迂闊だった。これ以上アリスと距離を空けるわけには……」

マーチスがその言葉を聞いて軽いため息を吐きアーチャーの胸を叩く。

「信頼したなら心配するな！少尉なら大丈夫」

マーチスにしては意外な意見を聞きアーチャーは少し驚く。

「少尉は友軍でしかも貴族！」排除——つまり自発的な発砲には”許可”がいる。いくらコネリー少佐でも上への手続きに1時間はかかる」

そしてマーチスは懐中時計を取り出して時間を確認する。

「少なくとも1時間——一課 奴らは少尉に発砲できないんだ。それまでに戻れば大丈夫」

そういつてマーチスは先に階段を下りていく。

アーチャーはそれに続く。

「(でも・・・独りで1時間は戦えない。すぐにへばる。それでいい。無抵抗なら拘束で済む。でも・・・あそこにいるのは・・・アリス・L・マルヴィン。あの人だから)」

今も戦っているであろう少尉を思い浮かべる。

「(やりすごせただはすの悪に剣を突き立てる人だから。剣は・・・棄てない!!)」

そう思いアーチャーと共に全力で908の元に走る。

「くそっ女の斬撃じゃねエぞッ!」

ひとり足を負傷した兵がそう焦る。

「あの剣・・・M<sup>ミーネ</sup>? h n e だな」

「副長!」

「戦場の主役が騎馬だった頃の剣だ・・・」

副長と呼ばれた男はM? h n e について語る。

「騎馬は弱手側の攻防に弱い・・・愛馬の首が邪魔をして咄嗟に剣を振れないからだ。そして生まれたのが双剣『M? h n e』・・・振らずとも・・・厚みと重みで突き落とせば殺せる剣」

「ヴォンッ」ダズン

アリスは剣を倒すように振り敵の武器を叩き斬る。

「それを振るうがマルヴィンか」

そういうと肩についているナイフをもっひとつ引き抜く。

「確かに女の剣ではあるまいよ」

副長が前に出て一対一になる。

相手は二刀流だ。

奇しくもアーチャーが得意とするスタイルだった。

ただ違いは左手は逆手にナイフを握っている。

「ゼーハアツ、ゼーハアツ」

アリスは肩で息をして苦しそうだが大きく息を吸い込むとまた綺麗に構える。

「副長つ。くっ……”排除”の……少佐の許可はまだか!？」

「珍しく貴様から尋ねて来たかと思えば―――部隊を引き上げる  
?笑わせるなっ」

フンツと鼻息を吐き否定の意を込める。

現在この場にいるのはコネリー少佐と一課の部隊員、ハンクス大尉  
にオレルド准尉だ。

「振り下ろせば止められぬ!故に大剣!<sup>クレイモア</sup>!国家公安のため我々は3  
か月前からこの時を―――」

ボス

ハンクスが手帳を机に投げる。

「欲しかったのはそれだろ?」

熱く語っていたコネリーが無言になる。

パイプで手帳を叩きハンクスが続ける。

「正確には、コイツを基に編纂した”書類”。帝都地下大水道を”ひとつの国”に見立てた――『麻薬市場の実験情報！』」

無言だったコネリーが語りだす。

「地下難民の数、どれほどのものだと思う。数百、数千・・・もしかしたらそれ以上――広大な地下水路は今や小さな帝国だ。三課は誘導して救った気ているのは、ほんの一部にすぎん」

そいつって右手を後ろにいた隊員に差し出す。

すると何かを取り出しコネリーに手渡され、それを机に積んでいく。

ハンクスが持ってきた手帳と同じものだ

だが血がいたるところに付着している。

「私も初めは驚いたよ。この手帳には麻薬を販売した相手の性別・年齢・体型・売った分量と回数。あらゆる情報の素材がある」

そしてコネリーは狂ったかのように笑い出す。

「「その統計たる”書類”——利用価値は計り知れん」」

「……軍で麻薬市場を運営しようってのか？」

これにはオレルドも驚かざるを得ない。

「停戦によって軍の財源は減少の一途だ。金のなる木が必要なのだ」

—————  
カーンツ！！！！！！

ハンクスがパイプで机を思いっきり叩く。

「知らねエよ。俺ア三課の仕事を果たすだけだ」

ハンクスが凄みを利かせてそう言うがコネリーも負けてはいない。

コネリーは少し笑うと表情が変わる。

それは人の狂気が集約された顔だった。

「フツ。先ほど本作戦における”排除”を友軍に適用できるよう申

請しておいた。引くのはおまえだ。ハンクス。上層部には十三貴族を快く思わぬ御仁も多いぞ?」

ふーっ……

それでもハンクスは気楽にタバコをふかせながら、背もたれにもたれかかる。

それを見てコネリーも冷静になる。

「オメエ大事なコト忘れてるぜ。ミヨンにや背後組織がいる」

「フン、麻薬組織のひとつやふたつ——」

「さて、それだ。このシケたご時勢のに麻薬でもなく、麻薬で得た金でもなく”情報”に価値を見出す奴らだぜ?ただの麻薬組織なんかよ」

それを聞いたコネリーは真剣になる。

「最新の武器を支給する手口……心当たりがなくもない」

「心当たり?」

そう言ったハンクスは書類を差し出す。

「排除命令は却下しろ。サインひとつ分くらいはコッチの情報わけてやるぞ」

---

迎賓館

「くそっ排除命令はまだかッ!？」

現在二人の一騎打ちという構図になっているが、排除命令が出た瞬間撃てるように周りは銃を構えている。

二人とも実力はほぼ同じといったところで少しアリスが剣の質量で押しているぐらいだ。

だが、アリスの息は乱れ始め、もうすぐ決着がつく。

「（辛かるう……よくもここまで振り続けてくれたものだ……」

アリスが剣を掲げ今度は倒すのではなく振り切る。

「（だが……！）」

——ゴッ……！

剣はナイフの鏝に引っ掛け強引に軌道をそらされる。

その勢いで地面に深く刃がめり込んだ。

「！」

アリスは次の手を出すため剣を持ち上げるが引っかかり持ち上がらない。

「剣の重さが仇だッ！！」

副長は逸らした方とは逆のナイフで切りかかる。

その刃はアリスの顔を捉えた  
かのように思われたが、  
アリスは身体を反転させ交わす。

ゴッ！！！！

そして、そのまま足で地面に深く刺さった刃を蹴り上げたのだ。

その刃は防御に入った副長の二つのナイフごと仮面を断ち切る。

刃は顔にも届いており血が噴出す。

「（そ……）」

アリスはバランスを失った剣を手元で回し反対側の刃をワザと地面にめり込ませる。

「（そのための脚甲か！！）」

そしてまた、踵で蹴りこみ前にいる副長を肩口から脇下まで斬りつけた。

ドシヤアッ！！！！

「ふ……副長オッ」

「ゼーハアツヘアツゼーハアゼーハツゼー」

アリスは顔から滝のような汗をかき身体を震わしているが剣はしっかりと握っている。

「私は……一時期……貴様より強い二刀使いを……師事  
にしていたことがある……。その者の太刀筋とは……。かな  
り違うが……。貴様はまだ……甘い……」

アリスは決して誇っているのではなく、ただ経験の差だという。

「大した……。ものだ……」

「搬送だ。急げっ」

「もはや保つべき面目はないが、悪足掻きに一矢報いるとしよう……」

アリスが周りを見る。

すでに皆は撤収の準備を始めていた。

「雄獅子の仕事は追い立てること。真の狩りは待ち伏せた雌獅子が

行っ  
」

「（――別働隊！？）」

「雌獅子は容赦がないぞ」

担がれた副長はそのまま失神する。

アリスはアーチャー達が行った方を見た。

「なんとか追いつきはしたが……」

アーチャー達は幸いにも908とミヨンに追いついたのだが様子がおかしいので柱に隠れ身を潜めている。

「また発作<sup>それ</sup>か。早くせんと追いつかれるだろうが……！」

「サムイ。サムイ」

距離は20m。

マーチスの銃で狙うには少し遠い。

「《ここから狙えるかい？》」

「《必要ない。一騎打ちで決着をつける。奴とは話さなければならぬことがあるからな》」

「《—————！？無茶だ。いくらアーチャーでも炎には分が悪い！  
！》」

「早くせんかつ！！！」

いきなりのミヨンの怒号に会話が中断される。

「本当に置いていくぞ、ハンス！」

「大丈夫……治マッタ……」

「せめてその重そうな服を脱いだらどうだ」

「脱イダラ死ヌ。908ミンナ服脱イダラ崩レテ死ンダ。ダカラ俺、停戦後3年間……ズットコノ格好……。食事、排泄、

器具使う。コノ先一生「コノママ」

その話を聞いたからかアーチャーは通路の正面に立つ。

「投降しろ、908」

「軍かつ!!」

「知り合いにカウプランの女がいる。貴様の体をもしかしたら治せるかもしれない。だから」

「ガシヨン!!!」

908は火炎放射器に火を通す。

「コノ服ヲ着テ俺ノ体……」熱サ”消エタ。”温カサ”消エタ。”寒サ”消エタ。”ソシテ心カラモ……”熱サ”消エタ。”温カサ”。ナノニ!!!”寒サ”ダケ消エナイ」

アーチャーの瞳に光が消える。

「サムイ、サムイ、心……サムイ……ミンナガイレバ……温カッタノニ……ミンナ……モウイナイ。」

「会イタイ……ミンナニ会イタイ……」

908は炎を強く噴かす。

「炎ノ中ナラミンナニ会エル。ダカラ焼ク。人間ヲ焼ク。『人間焼ケバ……少シダケ心温カイ』」

アーチャーはコートを脱ぎ赤原礼装になる。

「ここからは私が三課では救えない。少しだけ名を取り戻そう」

「なんじゃあの男は!?!」

「『死沼へ誘ウ鷹ノ目』……奴ヲハ——赤イ外套ヲ翻シ静カニ奴ヲ狙ツテクル……」

干将・莫耶を取り出し908を見る。

「先手は貴様にやる。だが、その時覚悟はしてもらおうぞ」

—————  
ゴオオオオオオオオオ!!!

908が炎を噴きつける。

アーチャーはそのとき手榴弾を取り出し炎に投げつけ煙幕を張った。908はそれでもやめず煙さえも燃やし尽くすように吐き出し続ける。

送ったガスが切れ一旦止める。

煙が晴れるとそこには大きな岩を削っただけの斧剣があった。

「ど、どこから取り出したんじゃ！」

ミヨンがいつの間にかあるその斧剣に驚く。

その斧剣の後ろからアーチャーが現れ、100kgあるつ物を手に取る。

「こんな形でしか救えなくて本当にすまない。」

そう言うと片手で持ち上げ頭の上に持っけていき独特な構えをとる。

908はスライドアクションをしてまたガスを送る。

「ナンドデモ焼ク」

ゴオオオオオオオオオオ！！！！

また、炎が放たれるが今度はその炎に向かいアーチャーが一步踏み出し敵を葬る呪文を紡ぐ。

「アーチャーっ！！！！」

『セッター・ナインライブスブレイトワークス  
是、射殺す百頭』

「901……ABT……」

マーチスはその光景が信じられないでいた。

「（炎を……九つに分けた剣圧で吹き飛ばすなんて！！）」

アーチャーは斧剣を棄て駆ける。

そして近寄り柄の長い折りたたみ式ボルトクリッパを懐から出し  
908の胸を貫いた。

「ア・・・デ・・・防弾・・・服ナノニ・・・」

ズキンッ！！！！

貫いた体を今度は壁に押し付け爪を開く。

ビキメギメギ！！

「ホ、保護液・・・ア・・・ア・・・」

「本当にすまない。だが、これで苦しむのは最後だ」

その言葉を最後に爪を最大にまで開き、手に儀礼用の小剣を出し突き刺す。

そしてアーチャーが呟く様に何かを告げると908は眠るようになり力尽きた。

そのままボルトクリッパを引き抜き908を壁に預ける。

「動き止りました」

「狙い頭部、徹甲弾撃て！」

ガキユン!!!

「「「「!?」「」「」

一課が急に現れ、後方から908に狙いを定め撃ってきた。

それは鉄をも貫く弾で死んだ908に防ぐ手立てはない。

いきなりの発砲に驚くマーチス。

しかし驚いたのはマーチスだけではない。

アーチャーでもない。

一課の連中だ。

隊員が狙った弾を中華剣で逸らされたのだ。

それもこちらに背中を向けたまま).....(で。

「くっ！斉射」



「おいおい、ミヨンにも当たってねえか？」

「誰だあ？撃つたの」

そのうちのひとりが胸に手を当てる。

「（我ら皆——銀の車輪の下に）」

数十分してアリスが武器の入れ物を杖のようにしながらアーチャーたちの下にたどり着く。

そこにはミヨンと908の遺体が滑車に積まれ布がかけられていた。

「あ……少尉——」

マーチスが少尉に気がつき近寄る。

アーチャーがどこにいるか尋ねると指をさし教えてくれた。  
壁に寄りかかり遠い目をしている。

アリスは近づいてアーチャーに話しかけようとした。

「アーチ……………」

けれどアーチャーの瞳を見たらできなかった。

その瞳は悲しみに染まっていたから。

「そうか……………よく休むようみんなに伝えてくれ」

ハンクスがコーヒー片手にステツキン曹長に告げる。

ステツキンが部屋から出て行くと暗い窓の外を眺めた。

「ふー。停戦から3年も経つってのに、なんでこんなにあちこちで銃声が鳴りっぱなしなんだ」

## 第1の大剣vs斬り裂きし者（後書き）

正直、前半のアーチャーとアリスの絡みやりすぎた感ある。

本当はちよつと「スマン」「いいさ」ぐらいで終わるうと思っただけ  
ど収集つかんかった。

弱手側は剣を持ってないほうです。

今回、休養期間もらいます。

たぶん一週間ほどになります。

うまく書けなかったのでちよつと日を置いて冷静になります。

### 武器・防具紹介

- ・ 大きな岩を削っただけの斧剣「バーサーカーの斧剣
- 備考：是、射殺す百頭を使用して炎をなぎ払いました。
- ・ 柄の長い折りたたみ式ボルトクリッパー「三式装甲剥離銃
- 備考：装甲に穴あけたかったので原作の物を使いました。
- ・ 儀礼用の小剣「アゾット剣

備考：呟いたのは洗礼詠唱。 ” この魂に憐れみを（キリエ・エ  
レイソン） ”

### 参考資料

- ・ Wikipedia
- ・ アニメ・漫画・ゲーム・特撮・必殺技辞典

## 小さな戦場

机の上に書類が置かれている。

そこにカウプランの助手が主任のミュゼを探しにきたようだ。

部屋を見回っていると彼女は書類封筒を見つけ、中身を見たくて仕方ないようだった。

「主任っ！どこですか！？主任っ」「」

遠くで自分を呼ぶ声が聞こえる。

ミュゼはある物から目を離し後ろを振り返ると、丁度自分を呼んでいた助手が部屋に入ってくる。

「あ！こんな所にいらつしやっただんですか！？」

そう言われると興味を失くしたようにまたあるものを見る。

「見ましたよっコレ！主任の6年前の研究レポート！！凄いじゃないですか。コレ！」保護液」

そう捲くし立てると封筒に入っている書類を取り出す。

「痛覚の緩和”に一時的な”皮膚呼吸の代理”！研究が完成したら皮膚損傷患者の治療環境が一変しますよっ！！」

ミュゼは興味がなさそうにつぶやく。

「それ捨てといて」

「え……あの……でも……」

「そんな研究カウプランは必要とはしなかった。ま……似たようなモノは作れたけどね」

ジキキキッ

遺体袋のジッパーを下ろす。

「!?!」

助手は中身を見て驚きミュゼは深く顔に笑みを刻む。

「お帰り908。<sup>マルタ</sup>カウプランの箱庭へ」

DISSECTING ROOM

そこは解剖室であった。

帝都 陸軍情報部 中央管理局 三課

『水道局の一件以来——なにやら三課<sup>みんな</sup>の空気が重いです』

そう思うのは出来事を書面でしか知らないステツキン曹長。

彼女が周りを見るとマーチスは無言で書類整理を行い、オレルドはコーヒー片手に上の空。

それを注意するアリスさえも何か考え事をしている。

『特に――アーチャーさんの重さはダントツです』

棚に入っているファイルを見ているアーチャーの背中は負のオーラでいっぱいだった。

『なんとかさせねば――！』

――プランA：ルナティック・ダンス凶喜舞踏会

「――というわけで、みんなで踊って楽しくなれるダンスなぞ考えてみました。」

そう言ってノートいっぱい描かれたダンスの構図をマーキュリー

号に見せる。

「なお『結構恥ずかしいのでは?』という弱点が懸念されるため、  
三課物置当実験場にてテストプレイを行います」

すると、キュツとネクタイを締め足も踵を揃え準備を整える。

「パ・パ・パ・パンプキン」(出だしは思い切りが肝心)

腕を腰の辺りまで伸ばし軽く揺らし体を少し倒す。

「ラ・ラ・ラ・パンプキン」(おどけた仕草でハートをCatch)

今度は手を人指し指だけを伸ばし頬にあてる。

「シィザ・アアア・アアズ……(低音)——(魂を抑圧、そ  
して……)」

腕をクロスし前に屈む。

「しぎ・あーずー!! (高音)—— (解放)」

一気に体を起こし指はピースし高く腕をあげる。

この時、片足も後ろに上げるのを忘れてはいけない。

「……………よっ予想以上にハズかしい!?これは……………永久封印  
せねば……………ば……………」

その時、アーチャーが扉を開けファイルを持って覗いているのに気づいた。

その顔は目を見開き反応に困っていた。

「!?!?!?!?——チガチガ違うんですアーチャーさんっ!ひかないでっそんな目で私を見ないでっ!」

「し……………信仰は、人それぞれだからな……………」

————カラララ……………ピシヤ

「(ガーン!!)」

プランB：男の事は男に尋け！

「  
——というわけでアドバイスなど」

「んなモン放つときゃイイんだよ」

オレルドはめんどくさそうに拒否する。

「大体なんで俺なんだよ」

「オレルドさんは”自分上手”ですから」

一瞬オレルドが固まる。

「オレルドさんほど”自分”を気持ち良く生きてる人、他にいません。ですからその極意などを・・・」

「ふん」

「ぶつくつくつく。オレルドはマイペースだから」

マーチスがそう茶化すとオレルドはため息を吐き立ち上がる。

「おい、アーチャーちょっと付き合え！」

「ん？どこへだ」

「元気の出る店」

「（……………元気の出る店）」

オレルドは振り返ってステッキンにニヤける。

「男なら誰でも」

ステッキンは赤くなり、

「……………ダメダメのダメーッ！！！！」

————— 13……………30 プランB ————— 爆散

「（仕事しろよ）」

「・・・・・・・・」

---

情報部庁舎内食堂

---

「オレルドさんはセクハラすぎますっ」

「おまえセクハラの意味知ってんのかよ？」

「セクハラしやらすめんとっ」

「おまえホントもう帰れ」

現在、アリスとハンクスを除く三課のメンバーが昼食を摂りに来たのだがオレルドがアーチャーを見るとやはり落ち込んでいるようだ。

「（確かに重症だな・・・）」

全員が机に着き食事を始めるが・・・

「「「(お・・・重い)「「「

「あ、あのですねっ最近アーチャーさん」

「地下水道で」

アーチャーの眉が少し動く。

「地下水道でオメガがなにしたかったかは知らねエよ。だが任務は果たしたんだ。難民を誘導し麻薬経路も潰した」

「・・・そうだな。全く君の言うとおりだ。気を遣わせてしまつてすまない」

何事もないようにアーチャーはそう締め食事を再開する。

しかし、その言葉には何も解決になっていない。

アーチャーの真意が見えないのだ。

「何人だ？」

オレルドが顔に怒りを貼り付けていう。

「何人助けりやアーチャー様の合格もらえますかね？」

「(・・・オレルドさん?)」

「おやおやなんと無様な罵り合い！やっぱり三課か！」

声を掛けてきたのは一課のワッペンをつけた連中だ。

「一課がなんの用だ？」

「ん？しかしワッペンが違うぞ」

「彼らは『クレイモア・ワン第1の大剣』じゃないよ」

そのワッペンは大剣ではなく曲剣が2本組み合わせたデザインだった。

「フ・・・フン！確かに『第1の大剣』には入れなかったけどね。見るよっこの『第2の曲剣』の隊章を！」

彼らは自慢げに隊章を見せ付けてくる。

「敵の防壁盾を優れた知力でかいくぐる！その一撃はまさに曲剣！！  
蜂の一刺！！情報戦の雄！！」

「お知り合いですか？」

「士官学校の同期だよ」

「こちとら帝国陸軍の威信をかけた任務の毎日だったのに——いいよなあ・・・三課は平和でお気楽で。”戦災復興”だったっけ。もう5人や10人は助けたのか」

ガタッ

オレルドは席を立ち相手がめんどくさいのか去ろうとする。

「おいおい逃げるのか！？意地ってモンがないのかねエ？アッハッハッ——」

ズビシ

「パンプキン・シザーズ！！」

ステッキンがいきなり相手の両耳らへんを水平チョップしたのだ。

場の空気は一瞬で凍る。

そして全員が思う。

「「「（もしかして——技の名前か!？）」「」」

「な……な……なにをするかさ……」

「コラーっ弱い者イジメは許しませんよ!？」

「確認しとくが『弱い者』って俺のことじゃないよな？」

オレルドはステッキンに確認すると無言で見られる。

「な……なんだよ」

「すみません。オレルドさんがそんなに落ち込んでるだなんて、知りませんでした」

オレルドは固まり、アーチャーが少し驚く。

「オレルドが？」

「まあオレルドさんはさておき」

「（さておき？）」

「三課のことを悪し様に言うのは許しませんっ!…!」

その声に反応し周りで食事していた軍人がガヤガヤし出す。

仕舞いには野次が飛び笑いものにされていく。

それは一課の連中にも及んだ。

「謝罪するならば良し！さもなければもう一度この必殺技をお見舞いしますよ？」

「こ……の……恥ずかしいんだよッこのガキっ！」

ついに耐えられなくなった1課はつかみにかかるが……

————ゴッ！——！

オレルドの蹴りのカウンターが見事に顔に入る。

「あぁっ！ラーン！？」

「ダメだ白目むいているっ」

「やりやがったな！？」

三課は囲まれ関係のないマーチスやアーチャーまでもとばっちりを

受ける。

「どっつするのね」

「逃げるっ！今日は顔にキズ作りたかねエからな！」

ステツキンを担ぎマーチスと机の上を走って逃げる。

「待てやコラアッ！」

「また三課おまえたちかつー！」

そうやって出口まで行くが、

「アーチャーさんがまだ中心にー！ー！」

周りに囲まれ逃げ場のないアーチャーがたたずんでいた。

「コイツからやっちまえー！ー！」

全員が一斉に襲い掛かるが、

「キッ！！！」

「「「うっ！」「」「」

周りにいた連中は一瞬で沈黙した。

「はて？私は何もしていないのだが、彼らが急に倒れてしまった」

その場にいる全員に聞こえるようにそう言う。

実際、周りで野次馬をしていた連中はアーチャーが何かしたようには見えなかった。

アーチャーを監視していた一課の隊長を除いて。

「ちくしょう！あいつがやるってんなら付き合っでやるぜ！」

オレルドは担いでいたステッキンを放り投げ中心に戻る。

「そいつあ心の病で療養中だっ！リンチるんじゃ……ねエッ！」

ドガ!!

飛び上がり残っている連中に蹴りを入れる。

「お祭り部隊がなにを粋がってんだか。身のほどをわきまえろっての」

そして野次馬は金を取り出しある人物に渡す。

「俺は一課を応援するぜ」

「俺も一課に！」

「さあーハツたハツた。今んトコ三課のオッズは16倍だよ」

その人物とはウェブナー中尉だった。

「ウェブナー中尉っ!?!」

マーチスはその存在に気がつき声をかける。

すると近寄ってきたマーチスに耳打ちをした。

「「ネジュー少佐課長に呼び出されてね。」装甲車」の一件——根掘り葉掘り聞かれたよ」

その言葉にあのときの出来事がフラッシュバックする。

「安心しな。アーチャーあいつが装甲車アレを仕留めたってことは喋っちゃいない。むしろ奴さんの関心は——」

「「作業員——！？どうして今頃・・・」

マーチスが深く考え込みますが、

「——さてね。それよりアンタも男なら」

——  
ドガ！！！！

「とつとど加勢してっい！」

「はっはっはっいっ！——！」

「アンタはいいの！」

そういつて鍋を被りお玉を持ったステッキンを引き止める。

「でもでもでも！」

「そろそろ時間だ」

—————  
バン！！！！

「「コラーツおまえらなにをしているッ」「

食堂に入り込んできたのは通報された保安課の連中だ。

「保安課！！！」

「「全員拘束—————！！！！」」

「勝負は引き分け<sup>ドロ</sup>。親の総取りつてね。あっはっはっ」

ウェブナーは懐に掛け金を詰め込み思いつきり笑っている。

拘束された中にはマーチスがあり、逆にアーチャーは姿を消していた。

「マーチスさん突っ込み損ですね……」

「いいのいいの、お仕置きだから。アイツ最近、車壊しすぎ!」

「あのウェブナーとかいう女傑、なかなか手強いすな」

頭に包帯を巻いた一課の副長がそう言うど・・・

——ギロ・・・

「失敬」

隊長が睨むので笑みは消さないが一応謝っておく。

この部屋にいるのはコネリー少佐と隊長、副長の三人だ。

「彼女は元々兵器局の人間だからな。おいそれと拷問するわけにも  
いくまい」

コネリーはそう呟き隊長に聞く。

「それで……彼女の先ほどの供述————どう感じたのかね」  
ウェンナー

「水道局事件との関係————ですか？」

コネリーは無言で続けるように促す。

「あくまで私見ですが……今回押収した水道局員達の銃——  
オートマチック自動式小銃として————ほぼ完成の域にありました。弾丸の規格  
ネビコロが西方諸国連盟のものとは合わず、押収したわずか300発の試射で  
ジャミング・ゼロしたが……”作動不良なし”————十分制式レベルです」

「まだ各国が自動式小銃の今日に、か……」

「オーダーメイド手製一品なら複製もできるでしょうが……大量生産である精  
度は保てません」

コネリーは椅子に深く腰掛け考える。

「それを量産してみせる技術制度……（なるほど、確かに）  
————ハンクスの話に通じるものがあるな……」

前回の事件の際、部隊を引き上げる代わりに受け取った情報だ。

戦車の自動装填といい、自動式小銃といい筋は通る。

「……よし退れ」

「もうひとつ報告が」

「ん？なんだ」

隊長がまだ話があると資料を取り出し読み上げる。

「三課所属のアーチャー少尉についてです。前回の水道局での作戦、部下からの報告で火焰兵を近接戦闘で打倒し、また隊員が放った徹甲弾を剣によりはじき、一斉掃射もまた同様にはじいたそうです。そしてこれは噂の域を出ませんが、装甲車を破壊したのもアーチャー少尉によるものだ」と

「なに？」

「そこで先ほど私が少しですが監視したところ、彼は『第2の曲剣』の隊員との乱闘時に圧倒的な技量を持って退けました。その技術を見るだけに私と同等かそれ以上かと」

「……最近、三課に入った若造かと思えばそんな奴だったとは——わかった。そいつの過去を調べろ。」

「ネリーは命令すると退がっていいと手を振る。」

「あの自動小銃『第1の大剣』<sup>ウチ</sup>に回せませんかね」

「む?」

副長が隊長に提案する。

「近接戦の場合、我々の銃より共和国の輪胴弾倉の方に分がありません」

「敵性技術を賞賛するな」

「なればこそ——」

ふわっ

すぐ横を女性の軍人が通る。

身長は自分の肩ほどしかないがその金色の髪に見覚えがあり、思わず副長は振り向いてしまう。

「……………ほう。あれがアリス・L・マルヴィン。おまえの自慢の二刀を折った相手か」

副長は頭の包帯を外しその姿をよく見る。

「なんと……………あれほど小柄だったとは」

「フム……………彼女の剣で死者は出ていない……………不問に付してもよからう」

「公にすれば恥をかくのは我々ですしね」

「……………」

オレルドたちは保安課にしょっぴかれていき、現在ステツキンとアーチャーの二人だ。

アーチャーは先ほどよりはマシになったがやはり暗い。

「曹長」

「はい？」

「オレルドは——なにを落ち込んでいるのだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ステツキンは無言で歩く。

「私は自分のことばかりでな・・・他人を思いやるつもりが結局は自分の一人よがりだ。きつとそれだから・・・三課の一員として助けられなかった。後悔はしていないが、これからもこんな助け方しかできないと思うと自分に嫌気が差す」

自分の気持ちをそう吐露しステツキンに聞いてもらおうと彼女は突然歌いだす。

それは陽気な歌で子供たちに聞かせるような歌だった。

しかし、その歌は・・・・・・・・

「共和国の……歌!？」

「びっくりしました？」

「敵性音楽ではないか。誰かに聞かれてもしたら――」

幸い廊下を歩くのは二人だけで聞いているものはいなかった。

「私、軍楽隊にいたんです。歌は好きでしたたくさん歌いました。……でも……共和国の歌も好きなんですよ。でも敵性ナン  
ト力で勉強させてもらえなくて。でも情報部だったら、いろいろ大  
っぴらに調べられるんじゃないかな、なんて。それで頑張つて入っ  
ちやいました」

そういつて少し前を先を歩いていたステッキンが振り返る。

「みんなみんなどうしようもないくらい大事な――自分のための理由で三課にいるんです。自分のコトを考えるのはダメじゃないです。もっともつと考えて一番納得のいく自分でいるべきです。」三課の上官”はそう思いますよ？アーチャーさん」

それを聞いたアーチャーはステッキンを通り過ぎ先に行く。

「今はまだ・・・よくわからないが。しかしとりあえず、オレルドに今の気持ちを伝えよう。それが一番納得できるからな」

ステッキンは満面に微笑みそれを見送る。

そして廊下の角で見えなくなりそうになったとき、アーチャーが振り返った。

「それとさっきの歌、とてもよかったよ」

ステッキンは少し赤くなりながらもまたはにかんだ。

「今日だったのか」

オレルドがトラックの前に人々が集まっていくなのを見守っている  
アーチャーが声をかけてきた。

「地下難民が国营農場へ移る最後の便」

「ま、今んとこ国营農場もこれでイッパイだからな」

「オレルドさん！」

二人が話しているとひとりの見覚えがある娘が声をかけてきた。

「マリエル！」

「もしかして見送りに来てくれたんですか？」

そういつて近づいてくるとオレルドの顔にできたキズに気がつく。

「その傷、まだ治ってなかったんですか!？」

彼女は先ほどの乱闘でできた傷を勘違いする。

「あ、いや、これは違うんだ！ホント」

そういつがマリエルは頬に手をあて撫でる。

オレルドはちょっと湿った空気を吹き飛ばすように彼女の手を握る。

「…………お父さんと仲良くな！」

「…………ウン！」

涙を流しながらも笑顔で去っていく彼女を見届けながらアーチャーに話しかける。

「食堂のこと悪かったな。ちょっとイライラしてたんだ」

《貴様らが救った気にいるのは、ほんの一部にすぎん！》

「何人助けたの助けがないのって数ばっか見てやがる。玉入れの玉じやねエんだぞ。千人いて……1人しか助けられなかつたら”失敗”なのか！？助かったそのたった1人に—— 『おまえは助かったけど意味はない』 って言うのか！？……………なんてグルグル考えちまってな」

語り終わるとマリエルが父の腕を掴みこちらに手を振っている。

尤も父のほうはそっぽを向いているが。

「けど、ま、いいや！」

オレルドは笑顔で手を振り返す。

「……その考えはなかったが、やはり私は全員助けたい」

「そうか……じゃ、また近い内ケンカになるな」

笑顔で自分に振り返られるとこちらも皮肉気に微笑み返す。

「……あぁ！」

『あれからアーチャーさんは少しずつ明るくなっています。私はなん  
お役にも立てなかったけど、みんなが元気ならそれでよし!』と』

「大尉、ちよつと相談が……」

『そついえば最近……アリスさんに様子が——……………  
……………え!?!』

「なんで入っちゃいけないんだよ?」

「え、つと、ですからその……」

ステッキンが3課の三人を入り口で足止めする。

「三課の未来にとってスゴく大事なお話の最中というか」

「あーん?」

オレルドはステッキンに近づき疑いの目を向ける。

「つまり……………ですね」

「……………なっ……………」

「そうか、アリスもそんな歳か」

「結婚します」

「そんなにイイイイイ！……！」

オレルドたち二人は驚き、アーチャーはなるほどと納得していた。

「マーチス。この書類頼む」

「ハイ」

「マーチス。このスプレーちゃんと出ないぞ？」

「どれ？」

「マーチス。警備の手伝い頼めるか？」

「わかった」

『マーチスさんはすごいです！私の何倍も仕事の要領が良くて——  
——みんなが頼むと——いえ、頼まれなくなっちゃって次から次へと  
テキパキ片付けちゃいます。それもたつたひとりで！！言うなれば・  
・・うーんオレルドさんは”自分上手”だから・・・——！』

「ダメだよ。よく振ってカクハンしなきゃ」

シャカシャカシャカシャカ

「発表！マーチスさんには”一人上手”がお似合いです！」

—— シャカシャツ！

周りが凍りつきオレルドは青ざめ、ハンクスはコーヒーを飲むのを止める。

「ヨ！帝国一の一人上手！」

『最近なぜかマーチスさんが重いです。男の人ってムズカシイなあ・  
・・・・』

## 小さな戦場（後書き）

今回からInterviewが入りました。

あとちよつとずつ原作乖離。

大筋は変えませんが、原作10巻あたりで変わり始めます。

更新感覚は好きなきに書くようにするのでかなり空いたりします。

そのほうがいい作品かけるような気がするんだ。

## 叛乱の予兆（前書き）

毎週火曜日・水曜日は基本投稿できません。

まあ・・・今回はかなり休んでたけれど。

## 叛乱の予兆

マルヴィン邸 日没

外がすでに真っ暗な中、雪が降る中一台の馬車が邸宅の前に停まっている。

馬車に乗る騎手は寒い中もつすぐ出てくるであろう主を待つ。

「お嬢様、馬車のご用意が」

「うむ・・・では行ってくる」

「外は雪が降っている。この上着も羽織りたまえ」

その声が聞こえてきたのはアリスとアーチャーだ。

アリスはいつもとは違う礼装軍服を着ておりその上にアーチャーがかけたマントを羽織っている。

アーチャーも服装は特徴的な執事服でも豪華な造りをしていた。

昨日は珍しくアーチャーがマルヴィン家に泊まり従者としての役割を果たしていた。

それ以外にも執事から頼まれ、コックに料理の味付けや使用人に掃除の仕方などを指導していたのだ。

もちろん文句を言うものはおらず、逆に手際のおよさが皆に好まれた。強いて言えば、夕食を口にしたアリスの父はアーチャーの存在に気がつき、眉を少し寄せたことぐらいだ。

そこから一夜明け少し整理をしていたら現在に到る。

「ありがとう。さあ行くかうか」

アリスが上着に対してお礼をいい、馬車の前まで来る。

だが、普段と違いアーチャーが馬車の扉を開けようとしなない。

振り返ると彼はヤレヤレといった顔をしていた。

「「「こん~~~~の~~~~」」」

——  
グイッ

背後にいたアーチャーがいきなりアリスを引き寄せると馬車の扉が勢いよく開く。

「バカ娘ッ！！！」

そこからこれまた勢いよく足が飛び出してきたのだ。

幸いアーチャーが引き寄せていたので蹴られることはなく雪ですべることもなかった。

「な……なにをなさいますか姉上っ！！！」

「お黙り！」

馬車から出てきたのはアリスと同様の金色の髪を後ろでまとめている女性だった。

「それが乙女の格好かああ！！！」

彼女はマルヴィン家次女のエリスでありアリスの姉の一人だ。

「まあ怖いエリスちゃん」

馬車からまた一人降りてくる。

黒髪が美しく頬に手をあて発言するのはマルヴィン家長女のソリス

である。

「でも……可愛いアリスちゃんの顔に傷でも付いたらどうするつもり？」

ソリスはエリスの耳元で冷たく囁く。

これにはエリスも顔を背けざるを得ないが一応言い訳をしておく。

「フ……フン！アーチャーもいたから大丈夫よ」

「頼るのはかまわんが、もっと穏便にできんかね」

「あら、お久しぶりね。私とは八年ぶりぐらいかしら？」

先ほどのことはなかったかのように挨拶する姉に少し恐怖を覚えるエリス。

「そうだな。元気そうで何よりだ。それにまた一段ときれいになった」

「あら、お上手ね。あなたはあの頃と変わらずに若々しいわね」

「そんなことはないさ。もうおじさんといわれても仕方のない年齢だ」

肉体が老いることはないが、長い年月を過ごしていると精神が老いていく。

肉体に引っ張られることもあるが、数百年という年月を精神が記憶しているのだ。

「エホンツ……これは歴とした軍の礼装で——」

「それで男が墜とせるかッ」

「そつ……おと……」

アリスはこの切り替えしには滅法弱い。

幼い頃から男として育ってきたのだ。

これはマルヴィン家に男児が恵まれていなかったことにある。

三人の女兒が誕生し父はまだ幼い三女アリスにマルヴィン家を継がせようとしたのだ。

アリスも嫌がることなく逆に乗り気で一生懸命がんばってきた。

そんな訳で普段は淑女あるいは主として扱ってくれるアーチャーでさえ鍛錬となれば戦術を全力で叩き込んだ。

「そんな気は毛頭ありませんっ」

「……はあ！？アンタわかってんの？『舞踏会』なのよ！？」

「『舞踏会』？」

ハルクスはコーヒー片手に休む理由を聞いているとアリスにしては珍しい言葉が出てきた。

「はい、毎年招待を断っていたのですが今年は応じてみようかと」

「そりゃ構わんが……貴族の舞踏会っつていやあ——」

「……ああ！そうですね確かに――各家々が結婚相手を見繕う――それが舞踏会の一面ではありますが――」

腰に下げている短剣の柄を強く握る。

「私には既に婚約者フィアンセがおりますのでその者と結婚します」

――ガタ……

背後の扉が開きちょうどオレルドたちが戻ってきたところだった。

アリスは一瞬アーチャーの姿を見て固まる。

対するアーチャーがアリスに近寄り肩を叩く。

「君に婚約者がいたことは知っていたが、まさかもう決心がついていたとは思わなかった。だが、これもめでたいことに変わりない。舞踏会には私も従者として参加しよう。アリス」

「!?!?……ああ、ありがとう……」

アリスは力なくそういうとアーチャーを通り過ぎる。

アーチャーは少し緊張してるのだろうと思いいハングスに自分も休むことを告げる。

「聞いてのとおりだ。オレルドッおまえはその間、隊長代理だった！マーチスは補佐ツ怠けないよう見張ってる！！」

足早に三課を去り最後に”そろく”とアーチャーを振り返ってみるが、普段と特に変わった点は見受けられなかった。

「（なにを逃げているんだ私は……）」

「件の婚約者だって来るんでしょっが！」

その言葉で意識が戻る。

いつの間にか手を姉のエリスに掴まれ屋敷のほうに引っ張られていたのだ。

「愛想尽かされて婚約破棄されたらどうすんのよっ。ホラ、着替えにいくわよ」

「いや、しかし武門の誉れたるマルヴィン家の者として――」

「……またそれ？バカ娘！」

引っ張っていた腕を急に離し立ち止まる。

姉に対してこれは禁句だったかと口を閉じるアリス。

すると今度はソリスが近寄ってきた。

「わかってあげて。『アリスとお揃いのドレスを着るんだ』ってとても楽しみにしてたんだから。それはもう子供のようにつ」

「ぎゃーーーーー！っつ！……！……！」

ソリスが知られたくないことを語っていくのでエリスは慌てて止めに入る。

ひと段落つきエリスが語りだした。

「……だ……だってアンタいつも『仕事仕事』って、一緒にパーティ出るなんて初めてじゃない」

それを聞いたアリスはエリスをじっと見つめる。

「でも……イヤならいい！アンタが”家”を大切にする子だつてわかってるもん」

「着ます」

涙ながらに語るとアリスはそう答えた。

聞き間違えではないかとアリスのほうを今度はエリスがじっと見る。

「姉上達と同じドレスを”着ます”」

場所は変わり現在アリスの部屋にいる。

「ど……どうでしょう」

そして姉が持ってきたドレスを着込むと一回転し、どこか変ではな  
いかアリスが尋ねる。

その姿は普段の力強いイメージのアリスから可憐な一人の淑女、い  
や、お姫様へと変身していた。

「素敵！」

「ま、まあ悪くないんじゃない？私の選んだ服だし……」

そう二人の感想を聞くと従者の意見も聞きたくなるが現在従者は部  
屋の外で待機している。

婚約者がいる女性の部屋には従者でも男が入るのはよくないだろう  
と遠慮したのだ。

少し残念に思いながらもアーチャーのことだ。

こちらからどうか求めずともすばらしいと褒めてくれるだろうと考  
え姉に向き直る。

長女はそんなアリスの表情を見て見ぬフリをし、アリスの首にかか  
った2つのペンダントを取り外した。

「あ、姉上っ?」

それらを母の写真の前に丁寧に置いた。

「これから殿方と会う娘の胸元にぶら下がるなんて、そんなヤボお  
母様だって望んでないわ」

ひとつは母の形見かなにかのようだ。

「それにこれはアーチャーがつけていたものでしょう?どうしてあ  
なたが持っているか知らないけど、それこそ身に着けているなんて  
ダメ。それに赤い宝石のペンダントは純白のドレスに合わないもの」

もうひとつはエミヤが自分を半分認めてくれた証だった。

「初めての三姉妹揃っての出陣を——家で見守っていて頂き  
ましょっ」

姉たちが自分を中心に顔を合わせるように母の前に並ぶ。

その意思を汲み取りアリスは母のペンダントを置いていくことにしたが……。

「……………姉上。母のペンダントは置いてきます。それが母が私に対しての気持ちであるのなら。しかしこの宝石のペンダントは片時も手放してたくはない。これは彼と私との関係を示すものですから」

アリスは再びペンダントを手に取りじっと見る。

エリスはワナワナと震えソリスは真剣に見つめる。

やがてソリスは少し困ったようにため息を吐いた。

「……………わかったわ。ただし、見えないところに身に着けなさい。そうね……………腰のリボンに引っ掛けてスカートの中ならいいわ」

「ありがとうございます。姉上」

そうお礼を言いスカートをたくし上げ紐を通した。

「ちょ……ちょっと！！関係つてなに！？その言い方！明らかに主従関係超えてるわよね！？あのクソ従者！！アリスに手を出したのね！？」

突然、大声で怒鳴りだしたかと思えばそんなことを言ってくるエリス。

「ふふふ……。ついにアリスちゃんにも春が来たってわけか。その相手が従者なんて。お父様が知ったらなんていうか……。ふふ」

雰囲気は全く変わり今度はアリスをからかうソリス。

「そ！？そんなつもりはありません！ただ私と彼が対等な立ち位置に」

「対等な立ち位置ですって！？やっぱりあのクソ従者！殺す！」

「罪な人ね……。ふふふ」

「おい、そろそろ時間」

ゴスッ！！！！！！！

タイミング悪く時間を知らせに扉を開いたアーチャーに向かって先ほど馬車で見せた見事な蹴りが炸裂した。

---

食糧配給支給任務場所

---

「ジャガイモ剥けたぞ」

現在配給場所で、せっせと準備をしているオレルド。

ここには、配給を受けようと集まった人々でいっぱいだった。

マーチスはその人々を整列させ、ステッキンは食事を作っている。

今回、アリスとアーチャーが抜けたことにより人手が足りないのでステッキンが出てきてくれたのだ。

彼女は別段文句も無く、逆に普段できないことなので喜んでいる。

その後、整列の目印を立てたマーチスは今度は配り手に回った。

「ねえ・・・何か少尉の様子がおかしくなかった？」

「いつ？」

ジャガイモの皮を黙々と剥きながら話を聞くオレルドは振り返る「  
ともしない。」

「ホラ、結婚を打ち明けた後、僕たちを見た時さ」

「アーチャーを・・・だろ？」

特に大きなリアクションも無くそう返すと、マーチスは少し頬を赤くした。

「た・・・例えばさ――アーチャーのこと・・・好きだったとか」

「・・・どうかな。そう見えるけどちょっと違う気がする・・・。  
惚れたハレたっていうんなら――大して心配も要らねエんだろ  
うが・・・隊長の場合もっとスキサシならない感情を抱えちま  
ってる気がする――」

「なんだとコノヤロウツ!!!」

突然の怒声に二人は聞こえてきた方を見ると男性ふたりが言い争いをしていた。

「割り込むなっつっつてんだ!」

「オメエこそ二回も三回も並んでんじゃねエ!」

オレルドはヤレヤレといった感じで歩み寄っていく。

「ハイハイそこまで!くだんねエ、ケンカすんなよな。大人が」

「軍人はスツコンでろっ」

「おまえらはイイよな毎日イイモン食えて!あそこにいる連中とにも変わらねエよっ」

そう言つて男が指差すのは遙か遠くに見える豪華な館であつた。

現在その館には輝かしいばかりの光が灯っている。

「『舞踏会』!?!いい服着て、いいモン食つて、いい酒呑んで……それも配給受ける俺達に見せ付けるみたいに……!!!」

「……………そりゃまあ腹立つわな」

オレルドはその光景を見てあきれろしかない。

「どうなんだよっえ、おい!!」

「ああもう俺に言つなよ。なんなら今から直訴に行くか?」

——しん……………

その一言を聞いた集まった全員が静まり返る。

「べ、別にそこまでは」

「……………あ、ああ!」

「カツとなて悪かったな!」

オレルドはそんな様子をおかしく思う。

いくらなんでもここまでおとなしくなるはずないのだ。

「大丈夫だった？」

「ん・・・まあ（なんだ？今の反応・・・）」

「すみません・・・いつもは違う公園なんです、上の方から急に場所の変更を告げられて。舞踏会の日・・・本当、間が悪いわ」

いつも配給をしている福祉団体の女性にそう言われる。

そもそも、彼女らがいるのに三課が加わるのもおかしい話だ。

「いや、悪いのは軍人さ。福祉団体に物資の支援しかできない・・・」

—————  
ホワワーン

オレルドがその女性の手を握り締める。

「そんな・・・ジャガイモ剥きまでしてもらって。とってもお上手」

「ハハツ懲罰房で何万個と剥きましたからっ」

「（少尉達・・・今頃会場に着いたかなあ・・・）」

先ほど出た館の内部では、クラシックの演奏や豪華な食事、来賓によるダンスで楽しまれていた。

そんな中、突然玄関ホールへと続く扉が開かれる。

そこから現れたのはマルヴィン家の三公女であった。

「マルヴィンの三公女だ！」

「？上の2人は嫁いだと聞いておりましたが……」

「いや、嫁ぎ先がマルヴィン姓を未だ名乗らせているそうです」

「ああ……十三貴族の親類だと主張しておるわけですか？」

「では、あの三女が次期当主！？」

「いや、実に面白い噂が――」

皆の好奇心な視線が三人に向けられるがその三人に変わった様子はない。

「うう相変わらずこの空気はムカつくわ。ヒソヒソと」

「最初だけよ。すぐ収まるわ」

「・・・・・・・・・・」

二人の姉が小さな声で話している間、アリスは食い散らかされた豪華な食事をみて残念に思っている。

「（民が苦しんでいるこの時代に豪華な食事、さらには食い散らかすとは）」

「これはこれは噂に名高きマルヴィン家の三公女！」

現れたのはぶくぶくに太った背の低い中年の貴族だ。

その背後には背の高い護衛の二人が付き添っている。

「ドレスで三公女揃い踏みとは珍しい！ぶわっはっはっ」

「誰よ、おっさん」

「パウソ候。我が国の経済管理庁の長官です」

アリスがエリスに説明する。

パウロ候はかなり酔っているのか顔を真っ赤にし、手にはピザのソースがたっぷりとなっていた。

「ぶわっはっはっ。次期当主とお会いするのは初めてですな。よしなに。おお！こりゃいかんっ。いやいや、今夜のピッツァは秀逸ですな！」

パウロ候が手を差し出すと自分の手が汚れているのに気づいたのかその手を”じゅぱじゅぱ”と舐めた。

「では改めて」

「はあ……」

す……

その舐めた手をもう一度差し出し握手を求める。

求められたアリスは何の抵抗もなく握ろうと手を差し出すが姉2人は素早い動きで止めに入ろうとする。

だが、その前にアーチャーがアリスの差し出された手を握り後ろへ抱き寄せる。

「ようやく見つけた。三人でさっさと会場に入ってしまうから探すのに苦労した」

アーチャーはアリスに語りかけ手を離す。

「これはパウロ候。手がまだ汚れていますよ。お拭きしましょう」

懐からハンカチを取り出し手を拭いていく。

そのパウロ候の背後には置いてあった花瓶を手に持ったソリスと振りかぶっていたエリスがいた。

それを見てパウロ候は手を握り二人は反転して体操していたかのように振舞い誤魔化す。

「我が姫君」

「レオニール殿……」

アリスが声のしたほうを振り向くとそこには顔立ちのいい気品あふれる男性が歩み寄っていた。

「レオニール・テイラー！」

「今年は三つも事業を成功させたそうよ！」

「美形でその上仕事もできるなんてステキ」

「まさに政財界の”若獅子”<sup>レオ</sup>！！！」

その男性の登場に会場の女性陣が一気に歓声で湧く。

レオニールはアリスの前に立つと手を握り礼をする。

「口惜しい・・・なんであんな小娘なんか」

「あ！でも例の”噂”！私達にも機会<sup>チャンス</sup>がありましたよ」

ヒソヒソとアリスを嫉む女性たちを背にレオニールはアリスと話す。

「姫君あちらでシャンパンなどいかがですか？」

アリスは背後に控えているアーチャーを見る。

「私はお邪魔のようだ。姉たちのご相手を請け負おう」

「まるで私たちがじゃじゃ馬みたいね・・・まあいいわ。後でちやんと報告するのよ」

「しっかりね。フフッ」

そう言われては何も言うことができずアリスはレオニールと場所を移すこととなった。

「（・・・・・・・・・・アーチャー）」

心の中でなぜかアーチャーに呼びかけてしまいが、彼は二人を相手に何か話していた。

「そのドレス、とっても似合っておいでですよ姫君」

「レオニール殿」

「なんですか姫君」

突然アリスは立ち止まり語り掛けてくる。

「”噂”は聞いておられるのでしょうか？」

レオニールも立ち止まり振り替える。

「私はもうすぐあなたにとっての”姫君”ではなくなる。私、アリス・L・マルヴィンはおそらくあと数年の内に——”次期当主の資格を剥奪されます”」

アリスは真っ直ぐに彼の瞳を見て言った。

「……弟君の噂は本当でしたか」

「お披露目こそまだですがもう5歳になります。今の母が弟を産んだ時から、父の心は決まっていたようです……。アレンが当主となればマルヴィンは婿を取る必要がなくなります。そしてテイ

ラー家も私を迎えたとして得はありません。今ならばまだテイラー家の家名に傷が付きません。これは私の独断ですが――」

「婚約を破棄しろと?」

アリスは何も言わずじっと彼の目を見つめるだけ。

「なんと傲慢な……これが十三貴族ですか」

「はい、これが十三貴族です」

尚もその目をじっとみるアリスの姿を見て彼も無言になるが、

――フッ

「衝撃です」

彼はそう言っつて微笑むとテーブルのワインを手取る。

「傲慢な物言いよりも――憎むべき弟君のことを愛しげに話すことよりも――たった独りで全ての恥を被ろうとしていることよりも――私との縁をまるで惜しんでおられぬ顔が、この優男には衝撃です」

「え、あ、いや、レオニール殿は十分魅力的です」

「ハハ、結構、この追求はやめておきましょう」

手に取ったワインをグラスに注ぎながら笑う。

「ですが一つだけお答えください。いずれは弟が当主になると知っていたながら、なぜこれまで次期当主として情熱を保ち続けることができたのか」

「?・・・なぜもなにも今は私が次期当主ですから」

「イヤ、ですが数年で失効なのでしょう?」

二人とも互いが言ったことに疑問を持つがアリスが悩みながらも答える。

「問われている意味がよくわかりませんが————やがて失うものに意味がないのなら、あなたの命もまた無意味でしょう。時か、病か、刃か、いずれは奪われる。ならば今すぐ死にますか?同じことです」

その答えにレオニールは目を見開きアリスを見る。

そして今度は大声で笑い出した。

「くくっあっはっはっ！キミは本当に個性的だ」

笑われたアリスのほうはなぜ笑われているのか理解できないでいる。すると彼はスツとグラスを差し出し優しく語り掛ける。

「婚約破棄などんでもない。他の誰にも渡すものと決心致しました。『我が姫君』」

「いや、アルコールはちょっと。本当に」

「貴女を介抱したいのですよ、姫君」

————— ドガシャン！———

大きな音がした。

その音に振り返ると、パウロ候がシェフを怒鳴り散らしテーブルをひっくり返していた。

「パウロ候？」

「どうされたのですかパウロ候」

「どうもこうもあるかつ。このカナツペが美味いからレシピを訊いたんだが、ドングリで作ったペーストだとぬかしおった！ドングリだぞ！！！」

シェフのほうは両膝をつき帽子を両手で抱え込んでいる。

「なにぶん材料不足でして・・・それにちゃんと下拵えを――」

――グシャツ！！！！

「あぁっ！」

「ドングリなんぞ動物の食いモンだろうがっ！！」

落ちているカナツペを踏みつけ憤慨をするパウロ候。

周りはそれを食べた者に話しかけている。

アリスはその光景をみてイライラが募りついにその二人に駆け寄っていく。

「貴様つ二度と帝都で仕事できると思っな！！！」

「そ、そんな」

シェフは悲観に暮れる中、目の前の落ちたカナッペに伸びる手が見えた。

パリッ――モグモグモグ――ゴクン

「口に入れたときの風味、噛んだときに広がる味わい、そして自然に入っていくのどごし。並みのシェフには到底出せない逸品だ。それにドングリとは考えたな。しっかりと下搾えすれば苦味は抑えられ甘みがよくわかる」

「な……なんだ貴様」

「失礼。ドングリのカナッペなどそうお目にかかれないのでね。つい手が出てしまった」

「落ちたものを食べるなど貴様は――」

――パリッ――モグモグモグ――ゴクン

「ウム！アーチャーの言うとおり見事な味だ。よかるつつウチで雇ってやる」

「な……」

食べたのはアリスでありシェフを褒め称える。

パウロ候は思いもしないことに動揺している。

「こんバカ娘————ッ!!!!!!!!!!」

——————  
「スパーン!!!!!!!!!!」

「拾って食べるなんてダメよ?」

アリスは二人の姉に責められ、エリスは頭をはたく。

「しかし姉上つ。このカナツペは材料の乏しい中、シェフが技巧を凝らした逸品で——————」

「カナツペは良くても床が汚いの!!」

「これもアーチャーの影響ね・・・信頼してアリスのそばにいることを許したのに・・・」

「それはすまないとしか言いようがない。まさか私もこんな行動をするなど思ってたくな——————」

「謝る必要はないぞ!私が見たいように——————」

「まだ、説教は終わってないわよ!——」

そんな光景を見たレオニールは窓に寄りかかり雪の降る景色を見る。

「（陸情三課、アリス・L・マルヴィン——この寒々しいだけの世界でキミはいつたいなにを見たんだい？）」「

---

森林某所

---

男たちが必死で食事をしている。

食事にはなかなかありつけないというのに味わうこともなくそれを飲み込む。

その男たちの周りには銃や鉈などの武器が置かれていた。

全員が食べ終わる時、ひとりの男が立ち上がり帽子を脱ぐ。

「諸君っ！最期の食事は終わったか！？」

「ああ！！あの舞踏会の灯りを見てハラ決めたぜっ！」

「このままじゃ……このままじゃいけねエっ……！」

口々にそう言つと武器を手取る。

そして最初に立ち上がった男が懐から大きな封筒を取り出した。

「ここに同志から贈られた書類がある。経済管理庁長官パウロ侯爵の横領記録だ！明け方には各通信機関に送られる手八ズだ。だが、それだけではダメだっ！あと一刺しが必要なのだっ！その一刺しになるのではないかっ」

横にいた男も立ち上がり言う。

「きつと我々は捕らえられ処刑されるだろう。だが、ただ一刺し！

」！

「「「「「「「「  
舞踏会ダンスにいるパウロと貴族どもにただ一刺しを！！」

」」」」」

## 叛乱の予兆（後書き）

最近更新してなかったのは単に書くモチベーションが上がらなかつただけです。

ゲームしたらすごいハマって抜け出せなくなったりとか……。

これからもがんばっていきます。

## 押し寄せる声（前書き）

祝・お気に入り1000人突破& amp; p・PV1000・000アクセス  
ス！！！！

超うれしいです。

感想も8人書いてくださいましたし。

更新した日はユニークが851人とすごいことになってきました。

本当にありがとうございます！！

押し寄せる声

Interval

「パウロ侯爵の横領を証明する書類だと!?!」

一課のコネリー少佐は部下からの報告を聞き声を荒げる。

「はい、先ほど大帝都新聞社『臣民』から密告が」

「すぐに情報統制に入れ!」アックス・フォース「第4の巨斧」を展開して警察機構を使用。帝都全域の通信・報道機関を臨検しろ。同型の封筒は全て回収し開封を認める!」

「了解しました」

「現在の侯爵のスケジュールは?」

「舞踏会に出ております。書類を廻しますか?」

コネリーはその問いに顎に手を当てて考える。

「見事なものだ」

「は——?」

質問の答えではなく賞賛の言葉を述べるコネリーに一瞬呆けてしま  
う部下。

コネリーの目はメガネに跳ね返る光の反射で見えない。

「国民の氣勢を左右する経済管理庁の情報は鉄壁。それをいったい  
どうやって入手できたのか……。侯爵殿の命よりよっぽど興  
味深い」

コネリーは部下に向き直り命令する。

「最終的に犯人を捕らえられればそれでいい。護衛より包囲網を優  
先しろ。いろいろと取り調べするためには——”侯爵殺し”く  
らいの罪状が欲しいものだな」

コネリーは頬を吊り上げそう言った。

療養のため預けられた大祖父の家で、私は世界中から集められた英雄物語と出会った。

むつかしくてよくわからない本も多かったけれど、私はどんどん英雄達の世界に引き込まれていった。

だって——英雄は本当にいるんだって知ってたから。

その私の最も敬愛する英雄が優しい貌で哀しい貌で”遺した言葉がある”

---

「せっかくの舞踏会踊りませんか？姫君」

レオニールからのダンスの誘いだ。

姉達は多くの男性から申し込みを受けているが二人とも迷惑そうにしており、アーチャーが代わりに断りを入れている。

それでも散らない男たちに飽き飽きしているといったところだ。

パーティに来ている女性は口元をジュリ扇で隠しアリスを睨みつける。

「あ……いえ、しかし私は舞踏の嗜みなど」

「お教えしますよ。さあ、もっと体を寄せて……そうそう」

レオニールは小さなアリスを引き寄せ腰に手を添える。

「お上手ですよ、姫君」

ぎゅむっ

「あ、申し訳ない」

レオニールの足を踏んでしまい素直に謝るアリス。

それを見た女性たちは踊りひとつできないのかと笑う。

「（そういえば、アーチャーと練習したときもよく踏んでしまったな・・・）」

幼いころ、貴族の嗜みとして練習したのだが繊細な動きが難しくうまくいくことはなかった。

けれどそれを叱られることはなく、「ダンスは貴族の嗜みだが今は楽しければいい」とアーチャーはエスコートしてくれた。

ただ無邪気に手を取り合ってアーチャーと踊ることは楽しかったと記憶している。

「小鳥が枝にとまったからといって、痛がる大樹がおりましようか。数ある靴の中からこの爪先を選んで頂いたこと・・・感謝します。小鳥のような姫君」

「・・・ああ！レオ様」

その言葉を聞いていた女性たちは自分に言われたわけでもないのに顔を赤く染めうつとりとした表情をした。

アリスの姉二人はそれをじっと聞き無表情だ。

「あいつもしかして、マ」

「お黙りなさい」

アリスはブーツとし、レオニールを見上げている。

レオニールはその顔を見て尋ねた。

「なにかお悩みごとですか？」

その言葉でアリスは我に帰る。

「それは——”私より少し高い長身の男”？」

アリスは心を見透かされたような感覚になった。

「視線を追って気が付きました。時折、姫君は私ではなく——私  
を通り越して誰かを見上げている、と」

男は少し得意げに語り、アリスは彼の大きな背中を連想する。

「きつとその者は先程あなたを引き寄せた従者なのでしょう」

そこまで語るとレオニールは気が付く。

アリスの目が今にも雫があふれそうなほど哀しい色をしていることを。

彼女は彼と繋いでいた手を解く。

「巨きな男、そう思っていました。何度も助けられ頼りになる。何事にも立ち向かい乗り越える。屈強な心の持ち主だとも」

彼女の顔は次第に俯いていき彼から表情を窺えなくなってしまった。

ただその声色は沈んでいることがわかる。

「……でも本当は――」

彼女が思い出すのは水道局の事件。

一課を足止めしアーチャー達と落ち合った時だ。

「強くなんかない。巨きくなんかない。本当は……本当は……

！……」

——ギリ……

歯を食いしばり顔を歪ませる。

『アイツは——アイツは争ったりなんか……できる奴じゃないのに——!』

——  
配給所近くの森林  
——

「ったくよ!!俺だって寒いんだってエの!」

ぶつぶつ文句を言うのはオレルドであった。

雪がまた降ってきたので焚き火を用意してほしいと配給者が言ってきたのだ。

自分たちで用意しろと言いたかったのだが、遭難されても仕方ないので薪拾いをオレルドに任されたのだ。

ちなみにマーチスとステッキンは後片付けの手伝いをしてる。

「ん？なんだ？」

オレルドが見つけたのは先ほど言い争いをした男達が、集まって何か話している姿だ。

その手には武器を持っており今からどこかに出発するところのようだ。

——ザクッ

「！？」——ウオツと危ねエ！！！！」

先ほどまでオレルドが居た場所にシャベルが振り下ろされていた。

「な、なにすんだデメエ！！」

「見られたからにはおとなしくしてもらっせ！」

そこには二人の男達が工具を構えて立っている。

「……えいと、穩便にすみませんか？」

「やっちまえ！」

「なら……逃げる!!!」

オレルドは男達から逃れようと走り出す。

当然、逃がさないようにと男達は追ってくる。

「ハア、ハア……配給所までちょっと遠いし……しかたねエ……」

——  
ゴン!!!

オレルドは背後まで来た男を少し振り返り確認すると、木の枝に手をかけ逆上がりの要領で、男を蹴り飛ばした。

「グハツ!!!」

「なに!?!」

オレルドは着地すると追ってきたもうひとりの男は戸惑ったが工具を握りなおし、また襲い掛かってくる。

「う……ウオオオ!!!」

「やめとけよ。軍格闘術の成績は——” 中の下 ” だったけどな・  
」

蹴った男が落としたシャベルを拾い上げる。

——  
「バツ!!」

積もっていた雪を相手にかけ目潰しをした。

「わっぷ!?!」

「路地裏の卑怯喧嘩なら!!!」

——  
「コッパアアアン……」

シャベルを振りかぶり、男の足を一気に刈り上げる。

——  
「ドシャ!!!」

「常勝無敗だぜ」

「テメエツやりやがったな——」

ザシュ！！！！

「……………」

男の顔すぐ横にシャベルがつき立てられた。

「三課の課長の話だと、塹壕で一番人間を殺した武器は、ナイフでも銃剣でもなく”シャベル”だったそうだけ？」

男の胸に足を置き語る。

「試してみるか？」

男は歯を食いしばり顔を背ける。

「ホ……………で？結局、さっきのやつらはなんなんだ？」

「……………あれは……………」

「どうだ？マーチス」

「……うん」

マーチスが手にするのは男達が持っていた書類。

それは配給者ごと<sup>き</sup>が持つて<sup>い</sup>るはずのないものだった。

「確かに、この数字が本当なら——パウロ侯爵の横領を立件できると思っ<sup>つ</sup>」

「……これを含めて写しが50。それぞれ複数のルートで通信・報道機関に配信……手際の良さもそうだが——こんな情報どうやって手に入れた？」

オレルドが聞くも答える気はないよう<sup>で</sup>そっぽを向く。

「……いいけどよ。これ失敗するぜ？ここまで大物の不祥事<sup>スキャンダル</sup>だと、国家公安を盾に陸情一課が動く！『国民をみだりに不安にさせない』<sup>タテマエ</sup>って理由で郵便物は押収され各通信機関にも圧力がかかる。

事件はそのまま”闇から闇へ”だ」

「ふっへへ」

「……なにかあるのか。そういえばさっきの武装した連中が……まさか!?」  
「マーチス!!車の用意だ!」

オレルドはこの重大さに気がつき動揺する。

「へっへっへ。気が付いたか。そうさ、今夜舞踏会を襲撃する!!」

「なに考えてんだッ」

「事が大きくなればパウロも隠蔽できまい!!バカ貴族どもを道連れにできるならっ処刑も覚悟の上だ!!」

オレルドは用意された車に乗り込みながら叫ぶ。

「処刑ですむかッ!おまえら一課に拷問されるぞ。家族も友人も一人残らずッ!!」

今度は縛られた男が動揺する。

「か・・・家族は関係ないっ！！」

「一課ヤンがそんなの知るか！」

「これほどの情報漏洩——一課かれはどんな手を使ってでも真相究明にかかると。貴族が一人でも血を流せば一課かれはその口実を得るんだ」

これを聞いた男達の顔は絶望の色に染まった。

「家族は・・・家族は関係ないんだ・・・」

「急ぐぞマーチスッ！」

アクセルを踏み込み先ほどと変わりなく光を放つ屋敷に急ぐのだった。

---

舞踏会会場

「うーん・・・すみません。延々と愚痴を零してしまっただようで

す

頭を抱え恥ずかしそうに謝るアリス。

現在二人はダンスの輪から離れ、壁に寄り添うように立っていた。

「ハハハッ！少々妬けますね・・・従者とはいえ男のことで悩まれるのは」

「また、そのような――」

「姫君」

声色が変わり空気が張り詰める。

「今夜、姫君を寝室までお送りしてよろしいか？」

その横顔は真剣そのものでふざけている様子など微塵もない。

ぐいっ

「他の雄を駆逐して、若獅子は王となる」

アリスの手を握り膝をついて目線を合わせる。

その目は混じり気がない純粹な色をしていた。

「……………ずっと不思議でした。あなたの言葉には裏うそがない。打算がない。嫌味がない。そう————本当に無色で”あなた自身”さえもなかった」

アリスは握られた手を離し、自分の胸に持っていく。

「ですが今のは良かった！雑談上の男にさえ勝者でなければ気が済まない！剥き出しの”レオニール・テイラー”の言葉だった！」

アリスが笑顔で言う言葉にレオニールは言葉がでない。

それほどまで、また”衝撃”だったのだろう。

「「あっはっはっ。すっかり遅くなってしまった」」

少し遠くから聞こえた声に目を向けると一人の初老の貴族が来賓に囲まれて談笑している。

「あれは……」

「ホースト侯爵ですね。あの柔らかな人柄は万人を魅き付ける。彼は政治の重要なポストに推す人間も少なくないそうです」

レオニールはホーストを見た次に面白くなさそうな顔をしているパウロを見る。

「無用心な……そんな大物が護衛も付けずに」

「ぶつくつくつ。それを言うなら姫君こそ！」

「私は自分と姉上達の身くらいなら——」

ズクンッ！

首筋に走る感覚。

そして窓から微かに何かを引きずる音が聞こえたがアリスしか気づいてないようだ。

その窓に一人の女性がもたれかかる。

「窓から離れるオ！！」

ガシヤァン!!!!!!!!!!!!!!

窓が一斉に割れ声に驚いた女性も振り返る。

ガラスの破片が服を切り、窓には梯子が架かっていた。

バン!!!!!!

今度は正面の扉が開き農機具や武器をもった平民が押し寄せてきたのだ。

「「「「「キヤァァァァ!!!!!!」」」」」

平民の男達は次々と会場に入ってきて貴族を囲む。

「な、なんだコイツら!?!」

「おいっ!ここは平民おまえらが入っていない場所じゃないぞっ」

一人の貴族がオドオドしながらそう言う。

パァンツ!!!!!!

あたりは静まりかえり悲鳴さえ止んだ。

平民が天に向けて銃を撃つたのだ。

「これは……正義の行いだッ」

——ピク

アリスがその言葉に反応する。

その隣にはアーチャーと姉達がいつの間にか控えていた。

「経済管理庁長官パウロ侯爵！！貴様に制裁を加えるッ！！」

その言葉であたりがざわつき一斉に全員がパウロを見た。

「なっ！？」

パウロは顔を青ざめ護衛の後ろに回っていた。

同時に貴族の視線により平民はパウロを発見する。

「そこかあつー!!」

ふたりの平民が斧や鋤を振りかぶり駆ける。

しかし、護衛の二人は動揺した素振りもなく腰に手をかけ……

「死ねエエツー!!」

——ぐるん——ドカツ——どど——!!

「ぐっ!!」

アリスがその二人の平民の前に躍り出たのだ。

姿勢を低くし走ってきた勢いで片方を投げ飛ばす。

その投げ飛ばす方向にもう一人がおり、まきこまれた。

動作は流れる河のように淀みなく、そして凜と立つ。

「今、正義と言ったか」

貴族達は女性が殿方を投げ飛ばしたことに動揺し、姉とアーチャー

は頭を抱える。

ギリツ……

「なんだ小娘……その男はな経済管理の職を利用して……大金を横領したんだ！」

手に持っていた封筒に入っている書類をその場にばら撒く。

それはオレルドたちが見た資料だった。

「毎日毎日豪勢に遊んで暮らすためにな。これはその証拠だッ！」

アリスはその一枚を拾い目を通す。

「侯爵？」

「で……でっち上げだ！！貴族わたしが嫉ましいだけだろっつー！！」

「ああ嫉ましいさ！！ロクに食えねエ平民おれたちの子供はすぐ病気に罹る。そのまま逝っちまうこともザラだ！！それを貴族おまえらはまるでゴミみてエに……」

そっいつて平民達は豪勢な食事を見る。

「パウロだけじゃないッ！貴族おまえらども全員が制裁の対象だ！！」

リーダーは銃に魂を込め火薬をつめる。

「だがな……まずは貴様だ。パウロッ！」

「ひっ！」

怯えるパウロは護衛の男に隠れる。

その男に向かって銃を構える。

「貴様はもう……俺達の一生分は食ったろ？」

「早まるなッ！！ここで撃てば、家族にも咎が及ぶかもしれん」

男の顔に力が抜ける。

「いねエよ」

今度はアリスの力が抜ける。

「息子は去年、風邪で死んだ。ガリガリの死体だった。小麦の袋より……軽かった」

男の目から涙が溢れ出し顔が大きく歪んでいく。

それを見たアリスも顔に力が入り食いしばる。

「すまん」

——ぐいつ!!

「あ……姉上？」

手を急に引かれ振り向いた先にはエリスがいた。

「今のところ狙いはパウロ侯の命。でも、その後はわからない。出口までは私と姉さん、アーチャーで守るから……後は優男を頼りなさい」

レオニールを見ると頷いてこちらを見る。



「「やだよつ中尉にイビられるんだから」

「「って前！前・・・」

———— ドカツ！！！！！！

別の扉から車が突っ込んできた。

陸情三課のメンバーだ。

「く・・・雪でグリップがッ」

「避けるオオツ！！」

「「ウワー！！」

———— ドンッ！！！！

アリスの目の前で誰かにぶつかりようやく車が止まる。

「オイツ誰か轢かなかった・・・か」

軍が貴族や平民を轢いたとあつては面目が立たないのである。

「いや・・・なんとか大丈夫みたい」

「もう少し安全に登場して欲しいものだな」

アリスの前に立っていたのはアーチャーだった。

彼は車の前に移動し地面に槍を突き立て車を止めたのだ。

「私が居なければアリスが轢かれるところだったぞ、まったく。」

そう軽口を叩いて槍を車に載せ消す。

全員がその光景に信じられないでいたがレオニールだけは少し違う点で驚いているようだ。

「おおよく来てくれた」

パウロが車に寄っていき手をかける。

「さ、早く私を乗せてここから――」

――ドンッ

オレルドが足を掛け書類を手にした。

「あんたを助けに来たワケじゃない。逆だ」

「くっ……またその書類が、それが本物だという証拠があるのか！」

「あるよ」

冷静にマーチスが言う。

「書類は50枚50部。内49枚は”写し”だけど、たった1枚は経済管理庁の印が入った”本物”だ。きっと盗んだ50枚の原本を1枚ずつ分配したんだよ。つまり50部どれもが”偽物”でどれもが”本物”。それによればあなたは先月だけで、7千万もの税金を横領したことになる」

パウロは青ざめるがそれでも何とか言い返す。

「我々が管理している膨大な数字をつ、そんな書類を一目見ただけで判断できるかっ」

「いるんだよ。三課には……2桁の足し算間違っクセに……うのは得意なのが」

今頃寒がっているであろうステッキンを思い出した。

「ま、続きはゆっくり本庁で――」

――ザッ

「おまえら三課だな」

「確か三課に逮捕権はなかったはずだが」

丸眼鏡をかけた二人のパウロの護衛が立ちはだかった。

「（バレた……）」

「（バカ犬が……ここで逮捕してみせなきゃ収まりがつかねエだろうが……!!）」

マーチスはうな垂れ、オレルドは舌打ちをする。

「どけエっ!!!!軍人はすっ込んでろ!!」

銃を向けられたオレルドは素直に手を上げた。

「おつっ 全員血祭りだ!!」

一斉に駆けてきた平民にアーチャーは構える。

「(さすがにこの人数では守りきれん。せめてマルヴィン家だけでも守るしか……)」

——バシィッ!!!

「「やかましいッ!!!」」

アリスがパウロに向けて手袋を投げた。

そして怒号により平民達も立ち止まる。

「確かに三課に逮捕権はない。ならば”侯爵”よ。今この場でアリス・L・マルヴィンが……”貴族”として決闘を申し込む!!」

## 押し寄せる声（後書き）

今回もルビが多いです。

携帯ですとかなり読みにくいですね。

それとちょっと短めのようです。

毎回メモ帳に保存しながら投稿し、いつも大体17KBぐらいです。

今回は16KBでした。

最高は第10部で35KBです。

このとき、話分ければよかったと反省しています。

これからもパンプファンとがんばります。

**協奏曲を舞う主人と狂想曲を踊る従者（前書き）**

前の小説と連ちやんで書いてます。

報告はあとがきで。

協奏曲を舞う主人と狂想曲を踊る従者

会場が静まり返る。

彼女が言った言葉が原因だ。

『決闘』

貴族同士が何かをかけて戦う神聖な儀式

現在では見ることもなくなった儀式を彼女はパウロ侯爵に申し込んだのだ。

「決……闘？」

パウロは確かめるように口ずさむ。

「ぶわっはっはっ。これはいい！ルールはなんにしますかな？腕相撲？それとも鬼ゴツ？」

パウロは決闘の意図を読めずにただ笑った。

アリスはそれでもただ真剣に彼を見て答える。

「……………剣で」

「まさか……………」

エリスが言う横でソリスがそっとテーブルに近づく。

そしてアリスはドレスのスカートに手をかけた。

「やっぱり!」

シパッ!

ソリスはテーブルクロスを料理を落とすことなく引き抜く。

そしてアーチャーも意図が読めたのかアリスを背にテーブルクロスを持つ。

バッ!

そして三人で壁を作り外からアリスを見えなくした。

周りからすれば何をしているのかわからない。

「君はスカートの中にそんなものを仕込んでいたのかね」

アーチャーがあきれて言うのは、足にいつも提げている剣を縛り付けていたからだ。

「コレも譲ってくれなかったのよねえ……」

「そりゃま仮にも皇帝印——”肌身離さず”が基本だけどさ」

「コレも？他に何かあるのか？」

「え？ああ、あなたが良く知ってるものよ。いつプレゼントしたの。あの”ほ・う・せ・き”」

「なに？あれを身に着けているのか。そこまで持ち歩かなくてもいいのだが」

—— シャオンツ！

テーブルクロスの上は地に落ち、鞘から剣を抜く。

「アーチャー—— おふたりの命—— 代わりに守りきれ」

それは決闘に敗北してしまったときの保険。

つまり自分は死ぬかもしれないと言うことだ。

姉は悲しい顔をする。

「待たせたな侯爵」

—— ジャキツ！

「ななっ！？一体どこから！」

侯爵はようやく決闘の意図を知り慌てる。

「……………！よかろっつ！ならばこの2人が私の剣だ！！！」

しかし、彼は二人の護衛を指差しそう宣言したのだ。

「2対1か……………ふざけるな」

アリスは心のそこから言葉を吐き出し構えをとる。

「私が希んだのは侯爵キサマを含めた3対1だ」

「—— なっ!?!?」

その言葉にパウロは驚き護衛はニヤける。

「待ちたまえ」

アリスの前に立つのはアーチャーだった。

「彼女達を守るのはいいが、私のマスターはアリスだ。君が戦うと言うのに私が戦わなくてどうする」

「駄目だッ。おまえはもう戦わせないッ」

「? —— なにを言って……!?!?」

「下がれッアーチャーッ」

突然、スーツの上着を被せられかけアーチャーは一步下がる。

「ゴカッ!?!?!?!」

「くだらねエ」

——ジャラッ——ゴリッ

アーチャーが立っていた地面には鎖でつながる棘が付いた鉄球が振り下ろされていた。

「3対2でいこうぜ……」

「脱穀棍——!!」

アリスは武器を確認し護衛を見る。

「真鍮製の丸眼鏡。よもやとは思っていたがやはりそうか……」

『ローデリアの近衛兵』

「ローデリアってあの農業国のか？」

オレルドがマーチスにたずねる。

「ローデリアの歴史は農民内乱の歴史”その鎮圧経験を下地にした、要人護衛専門の傭兵舎があるとは聞いてたけど……」

「専門家なら空気読めつての」

オレルドは先程失敗した逮捕を考え平民を見る。

殺気立った平民が今にも貴族を襲いかかりそうだ。

「じゃあいくぜ！」

——ジャラツ——ゴカツ！

アーチャーが横に避けると背後にあったテーブルにあたり真っ二つに折れる。

テーブルを折る感触にニイッと笑う。

「（あんなもの……くらったら……）」

アリスがアーチャーを心配そうに見るとこちらを見る。

「(君はもう片方を頼む。ただし危なくなったらすぐに呼べ)」

アリスはアーチャーから伝わる目線を読み取った。

その後、アーチャーはアリスから離れるよう壊れた窓から外に出る。

「逃げてんじゃねエよ」

男は追いかけるように窓から出て行く。

アリスはアーチャーにまた信頼をしてもらえた。

では、逆にアーチャーを信頼し期待に応えようではないか。

「指揮官向きのいい声をしている。さすがは我等ローデリアの国の先王が  
『高貴なる炎』の称号を授けた一党の女だ」

そう言いもう一人の護衛が腰から引き抜くのは何かが滴る大きな錠だ。

「(山錠トチエツ)……!!刀身の液体は毒……か?それにしては……」

ズズ・・・

足をゆっくりと開き構えていく。

「残念ながら称号を賜ったのは大祖父個人でな。なによりこの第三公女は――」

ザッ

「『<sup>ノイブル</sup>高貴』と呼ぶには少々野蛮だぞ」

そこには剣を正面に構えた騎士が立っていた。

ザッザッザッザッ

屋敷の周囲を回りできるだけ会場から離れ角に身を潜める。

その理由はふたつあった。

ひとつはアリスと引き離すため。

近くで戦うともう一方の戦闘にまで気を配らなければならない。

今のアリスの実力では五分五分といったところだ。

「（ローデリアの近衛兵か・・・アリスにとって厳しい戦いとなるだろうがやってやれないことはない。それにアレを極めていけば勝てない相手でもない）」

アーチャーは過去に彼らローデリアの近衛兵と戦ったことがある。

その時、思ったのが強い弱いではなく”上手い”だ。

特に心理戦を熟知し、ただ強いだけでは飲み込まれる。

「（プロならきつとこんなところでムリはしないだろうが奴らなら  
———）」

ブルル「ヒイン!!」

アーチャーが振り向くと遠くには馬車が置かれていた。

「来賓の馬車か……参ったな。ここで荒事は――」

「よお」

先程来た道にヤツが立っていた。

「それで隠れたつもりかよッ」

男は角に身を潜めたアーチャーに脱穀棍を振るう。

その一撃は角に鎖がかかり、鉄球が遠心力でアーチャーを的確に襲う。

「ックー!!」

――ゴソッ!!

干将・莫耶でなんとか耐え内臓へのダメージをなくすが手がしびれ膝をつく。

アーチャーは夫婦剣を消し見られないようにする。

「ん？おかしな感触だったが当たったか」

満足そうに言いアーチャーの前に立つ。

アーチャーは懐に手を入れる。

「ん？銃でも取り出すのか？はあく。暴徒つてのはよ。銃じゃあんまり怖がってくれねェんだよな……ま、当然だ」

脱穀棍を肩に載せ、男は自慢気に語りだす。

「銃の痛みは想像しづれえ。撃たれた奴は少ないからな。拳銃とナイフ。肌当てられて怖いと思うのはナイフだろ？群集戦はな、その”痛み”を想像させて牽制するんだ……切ったり潰したり原始的なヤツほどいい!!」

男は満面の笑みを浮かべ鉄球を手に載せる。

「痛そうな形で、痛そうな音で、何人がミンチにしてみせりゃ、怖がりな奴はなにもできねエッ」

ジャララッ

次の一撃はまともに食らい倒れこむ。

「イイ加減くたばれよ。俺だってどうせなら、”男”より”女”の肉を潰したい」

---

コロセ

---

その一言でアーチャーの中で何かが囁いた。

そして全てが変わった。

「確かに原始的な武器はいい。その恐怖は見ただけでわかるからな。だが、それだけだ」

アーチャーが立ち上がり男を見据える。

そこに表情はなく瞳は黒くにごっていた。

「無理するなよッ！怖がり兵隊！！」

男は一步踏み出し振りかぶろうとする。

「ジャラララ」ザクッ

「おっとすまない。武器を見せる前に貫いてしまった」

「あ………れ？」

男の足が止まる。

その足元に液体が広がっていった。

流れ出る液体の元をたどると太腿を貫く鎖の付いた鉄杭があった。

「………ハハ！武器自体は俺のより痛そうじゃねエけど  
いッあゝアアアアゝア！………！！！！！！」

焼けるような痛みにも男は叫んでしまう。

その痛がる男を尻目にアーチャーは鎖をゆっくりと引き寄せせる。

「痛みが想像できないなら実感してもらおうと思ってな。初めて見る武器だが怖いだろっ」

その声に感情の色はなく、ただ事実を伝えた。

そして、鎖を引き距離をつめる。

「今度はコレだ。見たことはあるか？」

虚空から取り出したのは全体が真っ黒の短剣だ。

それを見せ付けるように前へ突き出す。

「い、いったいどこから!？」

コレがもうひとつの理由。

一般人に武器が現れる姿を見せないためだ。

全ては手の内を無闇に明かさないための措置。

「まあこんなものでは恐怖はせんだろうが……」

見た目は全く恐れを抱くようなものではない。

並みの短剣にも劣るただの小さな短剣なのだ。

サクッ

今度は逆の足に突き刺さった。

「ウアアアア！！！！！」

「これでこの武器にも君は恐怖を抱くようになった。つまりは経験だ。痛い経験をしていると、どんな形をしていようと恐怖を抱く」

「テ、テメエはいつたいなんなんだ……まるでワケがわからねエ……」

「最後は日頃使っているものに恐怖してもらおう」

アーチャーは弓を取り出し構える。

「……テメエはなんなんだアッ」

弓に狙われると思った男は頭を抱え込む。

しかしアーチャーの狙いは男と見当違いの方向だった。

トシユッ タンッ ヒイイン!!

男はそれを見て倒れながらも脱穀棍を振り回しアーチャーの足を絡めとる。

アーチャーはそれに躓き膝をついた。

「くッ!冗談じゃねエツ。フ・・・付き合ってられっかよ!!」

ドツドツドツ ヒイイイン!!

そのまま男は這って逃げようとする、遠くから馬の鳴き声と馬車の音がした。

「(?!?) さっきの弓で馬を驚かせたのか!!(くそッ」

ジャラララ

男の足に痛みが走る。

そこには鎖を持ったアーチャーが男を見ていた。

その鎖と太腿の鉄杭はつながっている。



馬車は男のギリギリを通過する。

「ほう。運がいいな。無傷か……さあ次だ」

二台目が迫る。

「もうわかった！これは怖い！！わかったから——」

「それはおかしなことを……貴様はまだ実感してないではないか・  
……”痛み”を」

アーチャーは冷酷にそう告げ男を見下ろした。

そして二台目が通過する。

「チクシヨウ！放せッ放せよッ放せ、放せッ！こ……の」

男は必死にもがき鉄杭を抜こうとするが骨に引っかかって抜けない。  
せめて逆の短剣も抜こうとするが刃に返しが付いているためこちら  
も抜けなかった。

コシヤッ

男は嫌な音を聞きゆつくりと”痛み”を感じるところを見る。

「…………おまえの……せいだぞ……俺の右手……  
潰れちまったじゃねエか」

その右手は手の付け根から第二関節まで紙ほどの厚さにまで潰れて  
いた。

親指にいたっては全部がペシャンコだった。

目からは涙を流し鼻水も垂れ放題である。

嗚咽が漏れ何も考えられない。

「フッフウッフウグッ……ヒデェ……」

——  
グイッ

アーチャーは男の足を持ちユラユラと引きずる。

「な……………に……………を……………!?!?!?」



通り過ぎた馬車は横転し馬達も落ち着きを取り戻す。

そのことによつて外は静まりかえつた。

男は轢かれる直前にアーチャーに足を持ち上げられ逆さ吊りの状態で気絶した。

そう、つまり彼は死んではいない。

アーチャーはその男を振りかぶり勢い良く屋敷に投げ込んだ。

ガシャシアン!!!

その音で会場全体がこちらを向く。

平民、貴族、例外なくだ。

「（再び誓おう。君が望むような世界になるよう。そして君を信頼し常に君の背中を守り背中を預けることを。そばにいて孤独から君を守り抜くと）」

「まったく、なんで警察が軍の手伝いなんか……」

「言うな。アイツらは『アックスなんたら』つってな、一人一人が特殊な権限を持っているんだそうだ。情報統制って名目さえ立てば、一時的に他機構の下端を動員できるんだと」

「そりゃまたヒデエ話——」

ト  
ロ  
ロ  
ロ  
ロ

警察が舞踏会会場に続く道を封鎖していると一台の車が近づいてくる。

「ああすみません。現在この先は封鎖中ですよ——」

「構わん。この車は通していい」

先程、話に出ていた軍人が警官に命令する。

そして通された車は何事もなかったかのように通り過ぎていった。

「あ、あの車。軍のお偉いさんかなにかで？」

警官が軍人に尋ねるが返答は何も帰ってこなかった。

車の中、二人の男が話している。

一人は運転し、もう一人は後ろで外を見ている。

「ああ……上の人間だ」

「一課への浸透は未だ不完全だというのに……あの若僧、危険を  
楽しんでいただけではありませんか!？」

「獅子の子は、兄弟を戯れ合うことで”狩り”を覚えるという。そ  
れは技術だけでなく命の略奪・喪失を擬似体験することで、動物な  
りの命の倫理を得るからだ。だから獅子は不必要な狩りはしない」

後ろの男は仮面を取り出し顔につける。

「だが奴には―――対等に戯れ合えるだけの………  
・・・）相手がいなかった。倫理を学ばぬまま成長した牙と爪で戯れ  
合える相手を求め続けているのだ」

その姿は以前水道局に現れたJACKだった。

『アリス………貴族とはな………どこかしら寂しいものな  
のだ………』

その言葉は懐かしく、大祖父が話してくれたものだった。

「（貴族は―――民を守るために………外敵と戦わねばならない

！そして……民を律するためには……」

アーチャー達が外に出て一分も経っていない。

しかし体感ではもう10分はにらみ合っただろうか。

男とにらみ合う中アリスは考えをまとめていく。

「『決闘』ならたとえ貴様が十三貴族でも、殺して構わんな？」

「無論だ。他には？」

その言葉にエリスは泣きだしソリスは悲しい目で見つめる。

パウロもその返答には動揺を隠せないでいる。

「この決闘になにを賭ける？」

アリスは周りを見回す。

まずはパウロを、次に周りの貴族を見て答える。

「貴族の……貴族達の……”誇り”を」

貴族はみな静まりかえり顔を見合わせる。

「誇りだと……貴族おまえらにそんなもんがあるか……ありもしないモン賭けた決闘ごっこで……この気持ちはおさまるかッ!!」

リーダーが貴族に向けて銃を握る。

「ここまでやった以上どのみち死刑なんだ!!」

「1匹でも多く殺した方がお得ってモンだ」

平民が今にも襲いかかろうとしたとき、

「少し待ってもらえないか」

一人の声がかかった。

「命乞いなんかしても……なっ……!!?」

声に振り向くとリーダーは驚く。

その男は例の書類を酒場で酔っていた自分に渡した者だったからだ。

「（貴族……だったのか——！？）」

「こついつた書類が存在する以上、侯爵殿の悪事は明らか。ならば姫君が決闘に勝たれたならば！」

アリスを手で指し示し平民に語り告げる。

「侯爵殿には当局への出頭と潔い自白を！そして諸君らには正義の告発者として無罪放免を」

「無……罪？」

平民の一人がその言葉に傾く。

「侯爵側が勝つたら？」

近衛兵が場を取り仕切るレオニールに尋ねる。

「侯爵殿のお好きに……。罪を認めず黙秘するもよし。この場から逃亡を図るもよし」

レオニールはそこまで語ると一端きり目を細めて周りを見る。

「まあその時は……我々全員を巻き込んだ、”制裁”が続行されるだけでしょうが――」

――ゾ……

貴族はそれを聞いて悪寒が走る。

「いかがか？」

「い……いいんじゃないか？」

「俺達に損はないよな？」

平民側は賛成の意見でまとまりつつある。

「つまり第三公女が勝てば……」

「虐殺は――ない？」

「……俺達は助かる――!!」

貴族側も賛成にまとまった。

ただパウロ侯爵はどちらにしる助からない。

死ぬか地位を失うかだ。

「お……おいどうする!?!」

「(いいのか……このままあの男を信用していいのか!?!)」

リーダーはレオニールをじっとみて決断した。

「……決闘だけはさせてやる……それ以上は譲らん!!!(こんなのでおさまってたまるか……)」

銃を握り締め成り行きを見守ることにした。

「さあ姫君! 思う存分決闘を——」

「寄るな」

少し近づいたレオニールに言う。

「貴族の誇りを賭けた”決闘中”だ」

レオニールは想像もしなかったようで驚き、貴族方は騒然とする。

「レオ様になんて口のきき方!!」

「せつかくとりなしてくださったのに」

特に女性陣からの文句がひどい。

「あの子・・・」

「うん・・・」

ただ姉達はじっと寄り添うようにアリスを見つめていた。

「・・・少しこちらの条件に付け足してもらおう」

山鉦をゆっくりを動かしながら言う。

「——————来る!—!」

「こちらが勝てば、脱出用に車を貰い受けよう。それではこの決闘  
” 受けた”」

—— ダンッ！！

二人は同時に動き出す。

先手は男だ。

山鉈を振り刀についた滴をアリスにかける。

対するアリスはその滴を物ともせず突っ込んだ。

「！」

—— ガキユン！！！！

アリスの突きを山鉈の刃の部分をもっひとつの手で持ち短剣の鏝に  
あて止める。

「一瞬も怯まんか・・・なぜ毒でないと？」

「たとえ威嚇目的でも、こんな飛び散るほどの量を護衛対象の傍で  
使うものか」

アリスは顔についた泥を拭う。

それはひどい臭いで顔を少し歪める。

「酷い臭いだろう?」

男は短剣を返し距離をとった。

その後、刃から滴り落ちる泥を片手につける。

「ローデリアの南方に広がる未開の湿原地帯。これは泥だ。生存も困難な湿原で私は訓練を積んだ。腐敗した草が溶け込む泥の臭いの中……な」

男は手に溜まった泥を顔に塗りだした。

「この臭いが緑の地獄を思い出させる。この臭いが……私の”領域”を作る!」

山鉦を振りあたりに泥を撒く。

そこから臭いが広がった。

「たとえば暴徒が何人いようがこの領域の中ならば、湿原の雑草と同じに扱える。雑草は……」この山刀で刈ればいい」

男が構えをとる。

アリスもそれに続き一步踏み出した。

「オイオイ……あんなの相手に大丈夫かよ」

どこかに行っていたオレルドは車に戻ってくる。

「オレルド、どうだった？」

「ああ給仕が持ってたぜ。参加者名簿。ザッと見てみたが……会場こゝにいるほとんどが二流か三流の家門。それもいき遅れの次男次女ばっかだ」

「じゃあVIPは？」

「4人だ。まず隊長……パウロ侯爵、ホースト侯爵、それからさっきの……レオニール・テイラー。あああと……隊長の姉2人」

「えっ!？ど、どの人!？」

マーチスは少尉の姉と聞いて誰か知りたがる。

「給仕の話だとこの会場で一番……」豊満なおっぱい」と……  
「生意気なおっぱい」の持ち主らしい

「アレか」

「見付けるの早いな。ん〜？」

オレルドも驚きの早さでマーチスはおっぱいを見付ける。

「ち……違っ……だってさっきも少尉とゴチャゴチャやってたから——」

「まあとにかくだ。幸いにもまだケガ人は出てネエ……。このまま本当に平民達が刃を収めるなら……」

「名誉を気にしない二流貴族達は命惜しさに口裏を合わせる。『平民達を正義』に、『パウロ侯を悪』に、全力で仕立て上げる」

マーチスはレオニールを見る。

彼は現在貴族側に立ち決闘を静かに見ていた。

「（彼の口上で……”襲撃”そのものがなかったことになろうとしている）……凄いな……レオニール・テイラー」

「いや、アイツはなにも解ってネエ。正義の立場や恩賞なんかで平民は絶対、刃を収めない！！悪が許せないんじゃない————貧しさが許せないんじゃない————自分も悪できたら耐えられた……・相手が貧しいなら耐えられた……・そう、平民が許せないのは

『不公平な世の中”そのものだ……』

「そんなの……決闘でどうこうできる話じゃない……！！」

「言ったる。今回ばかりはどつにもならね」

そういつて平民の様子を確かめる。

少しずつ手が震えだす者が現れだした。

それを見てボソボソとマーチスに言う。

「（エンジンは切るなよマーチス。こいつらはいつ弾けてもおかしくねえんだ）」

ギーンッ

「……ッ（また防がれた!）」

アリスの短剣の刃は男の目先5cmというストレスで止められていた。

彼女の呼吸はだんだんと上がりそろそろ疲れが見え始めるころだ。

対する相手は全くといっていいほど乱れは窺えない。

「くっ……（呼吸にも心にも乱れがない！剣先を”恐ろしい凶器”ではなく、ただの”避ける物”として見ている……まるで……雑草でも見るかのように冷静に……）」

——  
又チャ

「……！！」

アリスが一步下がるとそこは男が撒いた泥があった。

「（足裏の感触と立ち込める臭いで……場所に対する認識が混乱する……）。ここは舞踏会場だ！湿原じゃない！足場は丈夫。思い切り踏み込め——！？）」

アリスが驚いたのは急に会場が湿原地帯に変わる錯覚に陥ったためだ。

男は下半身を沼に浸からせこちらを窺っているように見える。

「やりにくいだろう？見える風景と臭いが食い違つと。だが私は慣れている」

「！？っ（ここは舞踏会場だ！！足場はしっかり——）」

足元を確認し錯覚を追い払おうとする。

ブオン！！

しかし、その隙に相手が接近し山鉈を振り追い詰める。

間一髪離脱するが甘かった。

バン！ガタン！

男は冷静に見極めスカートの裾を踏んだのだ。

「しまっ……」

男の山鉈が迫る。

しかし回避もできない。

「（細い短剣で山鉈マキヘンの重い斬撃は――）

頭によぎる。

ドレスを恥ずかしそうに、けれどうれしそうに差し出す姉エリスの姿が。

「（受け切れない……）」

——スパツ——ビリイイイ！！

「！」

哀しそうな顔をする姉エリスの顔が見えた。

けれど構えは解かない。

そして、また男に向き合った。

ビリビリに破れたドレスのスカート部分を晒して。

「ほう。あの一瞬でスカートを切って避けると判断できたか……」

男は感心するがこちらも構えを解かない。

「……怒らなくていいの？」

「うん、どのみち——あの子が今やるつもりとしてる」にあのドレスは邪魔だから」

無表情で必死に涙を堪えるが姉が肩に置いた手の温もりで溢れ出てくる。

「そついうの大事にする子だって……わかってるもん……」

ついには涙を流し姉に寄り添ってもらった。

「オレルド……もう——」

「待て！今、俺達が動いたらそれこそ暴動再発だぞ……！？」

オレルドが見たの決闘ではない。

「（しまった！決闘に気を取られすぎた！！いつの間に！！）」

いつの間にか貴族側の背後に回りパウロを取り囲んだ平民達だ。

「ダメだっ殺すな！！」

「ハッ」

その時アリスもようやく気がつく。

パウロ候を囲み武器を振りかぶった男達がいることに。

「あ・・・あああ」

震えるパウロ候をみて決闘を放り出し駆ける。

「死ねパウロッ」

振りかざされた斧や鋤を見てアリスはパウロを押し倒す。

「（ワシを・・・）」

斧を避け鋤を短剣で受ける。

「（やっつけたいんじゃないのか・・・！？）」

「邪魔するなッ」

もう一人の男がシャベルを横に振るう。

アリスはそれをしゃがんで避けその手の関節をキメる。

「決闘中になんの真似だッ」

「こんな決闘・・・チンタラ待つてられるか!!」

襲い掛かった男達は怒りを顕にする。

「申し訳ない・・・彼女との戦闘に・・・いつの間にか夢中になつていました」

近衛兵もパウロの隣に立ち謝る。

「だいたいよ。あんたが勝つてパウロが出頭したって、金と権力にモノ言わせてすぐ出てくるんじゃないか!？」

「そつだ・・・な」

「ああ・・・それならここで・・・殺しておかないとな」

「やっぱり俺達死刑だよな」

「なら・・・」

平民達はまた武器を握り締めて貴族たちに近寄っていく。

「（貴族は・・・民を守るために外敵と戦わねばならない！そして・・・民を律するためには――）」

アリスはゆっくりと短剣を振り上げる。

「ギヤアツ！！！！」

「（その守るべき民と――）」

「さ・・・刺した！俺の手を刺しやがった！！」

「（民とすらも”戦わねばならない”）」

リーダーは開いた口が塞がらなかった。

しかしやがて笑いが込み上げてくる。

「ハツハハハハツ。そうだよなツ貴族が平民の味方なんてするわけがないよなツ。少しでも信じた俺がバカだったよ」

「私は・・・誰の味方でもない」

アリスの表情はなかった。

「開き直りかッ」

銃をアリスに向ける。

「パウロの前におまえから殺してやるッ」

——  
ふわりっ

「『貴族 貴族』って……なによ虫ケラみたいに」

姉エリスがアリスの前に立ち盾になる。

「貴族にだって大切な家族がいるわよ。好きな人がいるわよっ。それを殺してなんで正義なのよっ。『不遇な平民だから』って言えば許されるの！？それじゃ階級を盾にしているのはアンタ達自身じゃない！！」

「なん……だと？」

リーダーの銃を持つ手が震える。

言い返したいが言い返さないのだ。

「オレルド……」

「ああ……限界だ。マーチス最悪隊長だけでも連れて逃げる。俺はなんとか――」

「もう少しだけ待ってあげて」

オレルドの肩に手が置かれた。

その置いた人物はソリスだった。

「あ……な……!」

「あなた達、あの子の同僚でしょ?なら……もう少しだけ見ていてあげて。あの子……凄く頑張ってるから」

「じゃなくてこんな所にノコノコ来た……ら……」

――ジャキッ

ソリスに鋤の刃が向けられる。

「そ……その車で自分だけ逃げようつてのか？卑怯者が」

貴族に怯えながらも平民はそう言った。

「軍人の妻になった時から夫と自分の喪に服している。徒党と組んで暴力に酔う貴様らといっしょにするな」

「な……」

平民はソリスの覚悟にたじろぐ。

彼女の眼光は普段温和な性格からは全く窺えないほど威厳があった。

「姉上、お退きください。決闘の最中です」

「な……なんでだっ！なんでこんな決闘に拘る!？」

「不公平”が許せないからだ」

アリスの言葉に平民、貴族共に全員が驚く。

「貴族だから裁かれぬ。平民だから許される。笑止!!罪あらば裁く!悪あらば斬る!それが貴族でも平民でも”皇帝陛下”である

うとも！それが私に唯一できる”公平”だ……」

アリスは覚悟が宿った目で平民達を見る。

「なっ……今、陛下を……」

「不敬罪……いや、大逆罪だッ」

貴族はアリスの発言に騒ぎ出すが平民は落ち着き自分を取り戻す。

「（なんだ……おまえはいつたいななんだ……。……あ  
あ！ああそうか——！俺がさっきから口にしてる……）」

『おまえが”貴族”か！！』

「公平を示すためには、どちらかの味方をするわけにはいかない。  
逆に貴族や平民である以上、家族も良人も守るべき民ですらも、誰  
もあの子の味方をしてはいけない……。貴族であるほどに——

「あの子は寂しくなっていく……」

ソリスは彼女のあり方に嘆き涙を流す。

「『貴族』か『平民』である以上……ですか……。ならば  
の場合『軍人』はどちらになりますかねエ？」

ソリスはその発言をしたオレルドを見る。

「確かに俺達は正義じゃないのかもしれない……けどな気持ち  
がおさまらないんだ！！殺せばおさまると信じてきたんだあっ！！」

ドガシャアアアア！！！！！！

窓から急に何かが入ってくる。

ローデリアの近衛兵だ。

地面についても尚転がり、もう一人の近衛兵の前でようやく止まった。

「な……………」

「う……………」

「おい、どうした。しっかりしろ！！ローデリアの近衛兵が暴徒の前で醜態を晒すな……………!?!?」

「……………あ……………」

彼の怪我は酷く、足には刺し傷があり手はペシャンコにつぶれている。

止血すれば命の保障はできるが、歩けるには日を要するだろう。

そして、この怯えようは半端ではない。

そう、彼はアーチャー自身が恐怖の対象になったのだ。

刃ではなく鉄球でもなく人を。

何も手にしていない彼を恐怖する。

窓に指差し怯え続ける男。

平民は窓の外を振り返る。

そこには一人の執事がいた。

先程外に逃げた執事だ。

ジャリッ

彼は縁に足をかけ屋敷に入ってくる。

「うっうっくっ……ああっあアあ あッあーああーあああ  
！……！」

執事が近づくとたびに怯えた声は大きくなる。

そこ光景は異様だ。

彼のように両足を刺されても手が潰れてもここまで怯えるものはいない。

ましてや噂に轟くローデリアの近衛兵がだ。

その一番異様に思っているのはもうひとりの近衛兵だ。

自分と肩を並べるものがこつも怯えるのだ。

恐怖が自身にもすくづ。

平民達はその執事が通る道が無意識に開ける。

彼が向かう先は近衛兵の下でなくアリスの下だった。

「（来るな……言いたくないんだ……本当は戦いたくないのに、傷塗れになって頑張るおまえに……こんなことを言いたくは……）それ以上近寄るな。決闘中だ」

アリスの言葉にレオニールは当然だなといった顔をし、ソリスは悲しみを濃くする。

——  
タッ

そしてアーチャーは聞いていないかのように歩みを進めた。

レオニールは理解できず、ソリスも目を見開く。

オレルドはそれを見てニヤけた。

アーチャーはアリスのすぐ背後までたどり着く。

彼女は体全体を震わす。

「来るな……って言ったのに……なんで。私は貴族で……だから、貴族は独りでいなくちゃ」

「アリス」

優しい声で彼は彼女の名前を呼んだ。

そこには愛しさも含まれている。

「私も・・・独りでやらなければならないコトがある。それがアリスにとって『貴族』というコトなら私にはなにもできん」

「うん・・・」

剣を握り締め体に力を込める。

そうしないと崩れてしまうからだ。

『アリス・L・マルヴィンと英霊エミヤはこの先もずっと独りかもしれない・・・』

「しかし私が出会ったのは貴族でもなく、軍人ですらない君個人『アリス』だ。だから・・・アリスを守りたい。なぜなら私はアリスの従者なのだから」

愛おしみを込めた言葉はアリスの心に染み渡っていった。

彼女は自慢の従者を見上げる。

「・・・エー！」

「？」

「エ・・・『エミヤ』？」

「ああ・・・アリス！」

顔を真っ赤にして俯き、けれどもそれは恥ずかしさよりも嬉しさが勝っていた。

「（まったく・・・貴族である上に——アリスでもあらねばならんとは・・・よかるうッ。やってみせよう！—）」

「アーチャーッ」

「なんだ」

「服を脱げ」

エリスがソリスの隣にやってきた。

「（おお！生意気なほうが……）」

「あら、お帰りなさい」

「もー、勝手に移動しないでよ」

ブンブン言いながら隣を陣取る。

「アラアラ、ご機嫌ナナメ？」

「そりゃあね……私のドレスを破っておいて、あんなにデレデレしちゃってさ」

端から見ると真剣そのものの目なのだが、やはり家族にはわかるの

だろうか。

「全くドレスが破れ替えがほしいと言っならそう言いたまえ」

「同じことではないか、さあ早く貸せ」

アーチャーは呆れながらも自分の着ている執事服ではなく、いつも来ている真っ赤な三課のコートを出した。

「こちらのほうが動きやすい。それと丈夫だ。しっかりと着込んで肌を無闇やたらに見せんようにな」

「ああ、ありがとう」

「それとスカートから見え隠れしている宝石は預かるう。そんなところにあつては邪魔だらう」

そういつて宝石を手に取りうとするとアリスが止める。

「それには及ばん。確かに少々動きにくいけど、ドレスが破れてしまったのだ。首にかけても真っ赤なコートと合うし、何より少しでも手放したくない」

「……そうか。ありがとう」

「では、行ってくる。——マーチス！車を降りてエンジンを切れ。敵前逃亡するつもりなどないことを証明してやれ！！オレルドッ決闘の間パウロ侯爵を守れ。死ぬ気でな！！あと人妻を口説くなッ」

「え……」

「バカ娘……」

「アーチャーは私の背中を守れ。絶対に決闘の邪魔をさせるな」

「了解だ。アリス」

——すっ……

アリスが肺いっぱいコート匂いを嗅ぐ。

「（三課の……匂いがする……）」

相手に向き直り宣言する。

「貴様の言っていた”領域”……私も得たぞ」

そしてアリスは髪留めを外しいつもの姿に戻った。

「今からここは戦災復興部隊、パンプキン・シザーズの作戦区域だ  
！！！」

協奏曲を舞う主人と狂想曲を踊る従者（後書き）

祝・連載一ヶ月！

初めてこの小説を投稿してから一ヶ月経ちますね。

見直してみると誤字脱字や意味不明な場所が多々あります。。。

特にバトルシーンは描写が難しく思い通りにかけません。

お見苦しい点が多々ありますがどうか我慢してお読み頂ければ幸いです。

感想待ってます！！

日本語難しいね！

近衛兵の処刑時に脳内で曲『エミヤ』が流れた貴方。

私と気が合います。

最近MATERIAALBOOKを発見しましてそこでギルガメシユの武器に詳しくなりました。

これからジャンジャン出していきます。

それから黒鍵つて刀身が長かったです。

勘違いしてました。

ずっと短剣かと・・・。

武器・防具紹介

鎖の付いた鉄杭

備考：ライダーの武器。鎖がつながっているので引きずりまわせる。

全体が真っ黒の短剣「ダーク

備考：刃先に返しがついていて抜けません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2278t/>

---

誇り無き従者と誓う戦災復興

2011年6月25日01時46分発行